

大阪府埋蔵文化財調査報告2009-13

# 千里丘遺跡Ⅱ

都市計画道路千里丘三島線道路改良事業に伴う調査

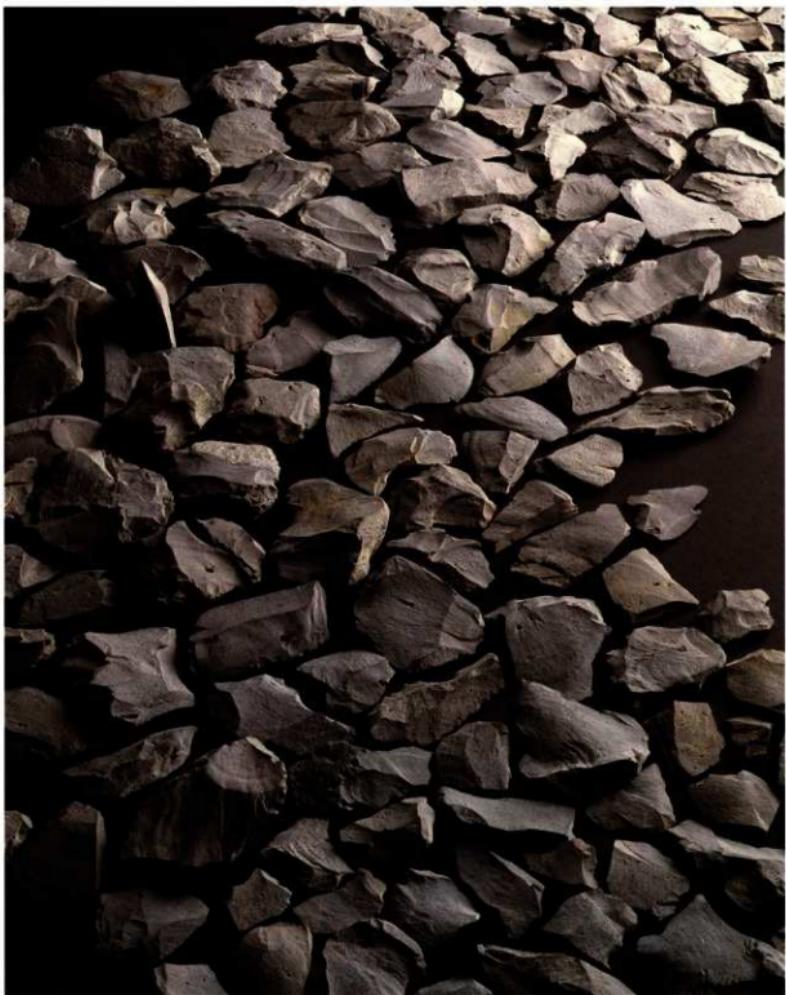
大阪府教育委員会



# 千里丘遺跡 II

都市計画道路千里丘三島線道路改良事業に伴う調査

大阪府教育委員会







千里丘遺跡周辺（西から）



平成20年度 第Ⅰ調査区西 第3遺構面（上方が北）



平成20年度 第Ⅱ調査区西 第3遺構面（上方が北）



平成20年度 第Ⅱ調査区西 第5遺構面（上方が北）

## はじめに

大阪府摂津市は、西方には六甲山系、北方には千里丘陵越しに摂津の山々を望み、近くには万博公園や淀川があり、豊かな自然に恵まれています。また、社寺や街道、史跡など歴史的遺産にも富んでいます。その一方で、大阪市の中心部まで程近いという利便性から住宅地としての開発もすすみ、急速な変化を遂げてきました。大大阪であった大正期には東洋一の貨物輸送拠点とうたわれた吹田操車場の建設、戦後日本の復興を証明する昭和45年の大阪万博など、日本の近代化を象徴するような出来事もこの地で数多く起こりました。昭和59年に廃止された吹田操車場跡については、現在あらたなまちづくりが計画されています。

昭和13年に開設されたJR千里丘駅や、駅の開設以前に設置された小坪井架道橋周辺では、駅前開発にともない平成17年度より継続して調査を行ってきました。平成17年度の調査では、縄文時代の石器集石から古代・中世の耕作痕や掘立柱建物、近世以降の耕作痕に至るまで、長きにわたってこの地域に人々が居住していた痕跡が残されていたことを確認することになりました。平成18年度の調査では、古代・中世の耕作や掘立柱建物の痕跡を確認しました。平成19・20年度の調査区域では、古い時代の遺構は破壊されていましたが、中世以降の耕作の痕跡は広がることを確認できました。

上記の成果を得た調査の実施にあたっては、本府都市整備部、茨木土木事務所、摂津市教育委員会、地元自治会各位をはじめとする多くの関係者の方々にご協力いただきました。深く感謝するとともに、今後ともこの地における文化財保護行政にご理解、ご協力をお願いする次第であります。

平成22年3月

大阪府教育委員会事務局  
文化財保護課長 野口 雅昭

## 例　　言

1. 本書は、大阪府教育委員会が、大阪府都市整備部の依頼を受け、都市計画道路千里丘三島線道路改良予定地について平成19・20年度に実施した摂津市千里丘1丁目所在、千里丘遺跡の遺構・遺物発掘調査の報告書である。調査番号は07038・08014である。
2. 調査は、文化財保護課　調査第一グループ主査　一瀬和夫（平成17・18年度）（現・京都橘大学）、副主査　小浜成（平成19年度）（現・指定文化財グループ主査）、技師　小川裕見子が担当し、遺物整理は調査管理グループ主査　三宅正浩、副主査　藤田道子が担当した。
3. 調査に要した経費は、大阪府都市整備部が負担した。
4. 調査の実施にあたっては、大阪府都市整備部、茨木土木事務所、摂津市教育委員会、地元自治会をはじめとする諸機関、諸氏の協力を得た。
5. 本書の編集は、小川が担当し、執筆は調査担当者及び参加者等が分担した。文責は各々文末に記した。
6. 本書に掲載した遺物写真の撮影は、有限会社　阿南写真工房に委託した。また、航空写真測量については株式会社　航空撮影センターに委託した。
7. 本報告書は、300部を作成し、一部あたりの単価は966円である。

## 目 次

第1章 調査に至る経緯 .....	1
第2章 千里丘遺跡の周辺環境 .....	3
第1節 立地と歴史的環境 .....	3
第2節 千里丘遺跡周辺の既往の調査 .....	8
第3章 平成20年度調査の手順と経過 .....	11
第4章 基本層序 .....	15
第1節 平成20年度調査区について .....	15
第2節 平成19年度調査区について .....	24
第3節 千里丘遺跡の基本層序 .....	27
第5章 調査成果及び検出遺構 .....	29
第1節 平成20年度調査区の検出遺構について .....	29
第2節 平成19年度調査区の検出遺構について .....	38
第3節 まとめ .....	40
第6章 出土遺物について .....	43
第7章 両極打法を用いたサヌカイト剝片の特性 .....	49

写真図版

報告書抄録

## 挿図・表目次

### 挿 図

図1 横津市域の主な遺跡	5
図2 調査位置図	9
図3 平成20年度調査区 地区割り設定模式図	11
図4 第I調査区 北側溝断面図	17
図5 第I調査区 西・東側溝断面図	18
図6 第II調査区 北A・B・C側溝断面図	19・20
図7 第II調査区 西D・E側溝断面図	21・22
図8 第III調査区 側溝断面図	23
図9 第IV調査区 側溝断面図	23
図10 平成19年度B調査区 東・北側溝断面図	24
図11 平成19年度A調査区 西・南側溝断面図	25・26
図12 第2遺構面 遺構平面図	31・32
図13 第3遺構面 遺構平面図	33・34
図14 第5遺構面 遺構平面図	35・36
図15 第4遺構面 遺構平面図	37
図16 平成20年度第III調査区・平成19年度B調査区 第5遺構面 遺構平面図	38
図17 平成20年度第IV調査区・平成19年度A調査区 第5遺構面 遺構平面図	39
図18 千里丘遺跡の既往の調査 遺構平面図	41・42
図19 土師器・瓦器	44
図20 須恵器	45
図21 陶磁器	46
図22 瓦	48
図23 平成17年度調査区 最終遺構面 遺構平面図及び石器集石遺構位置図	49
図24 石器集石出土状況図	50
図25 出土石器剝片（1）	52
図26 出土石器剝片（2）	53
図27 出土石器剝片（3）	54
図28 出土石器剝片（4）	55
図29 出土石器剝片 接合資料	56
図30 出土石器のタイプ別組成	57
図31 サヌカイト石器集石遺構の類例	63

図32 千里丘遺跡 出土石器長幅比	67
図33 はさみ山遺跡85-7区 出土石器長幅比	67
図34 国府遺跡第3地点 出土石器長幅比	67
図35 千里丘遺跡・はさみ山遺跡85-7区・国府遺跡第3地点 出土石器長幅比の比較	68

### 挿 表

表1 千里丘遺跡層序表	28
表2 出出土器観察表	47
表3 出土石器の分類	57
表4 出土石器剥片計測値一覧（1）	58
表5 出土石器剥片計測値一覧（2）	59
表6 出土石器剥片計測値一覧（3）	60
表7 サスカイト石器集石遺構の類例比較	62

## 第1章 調査に至る経緯

本報告は、都市計画道路千里丘三島線道路改良事業に伴い、平成17年度～21年度までの4ヶ年にわたっておこなった摂津市千里丘に位置する千里丘遺跡の埋蔵文化財発掘調査の成果を記録・報告するものである。

線路をくぐってJR千里丘駅東口と西口とを結ぶ小坪井架道橋の拡幅工事が都市計画事業の一環として大阪府茨木土木事務所により計画され、平成3年に事業認可された。当初、小坪井架道橋は片道1車線の狭い道路で、交互信号が設置されていた。府道大阪高槻京都線へむける当該道路は、交通量も決して少なくなく、信号待ちの時間が渋滞を引き起こす原因にもなっていた。信号を無理に渡ろうとする車両によって事故がたびたび引き起こされ、調査中にも日撃することがあった。そのような事態を解消するための拡幅工事である。事業の完了は、平成21年度内の予定である。

本府教育委員会事務局文化財保護課は、平成17年度から千里丘遺跡の発掘調査を継続しておこなってきた。調査地周辺はJR千里丘駅前の再開発がすすむ地区にあり、平成17年度の時点で、駅の東口はすでに複合商業施設であるフォルテ摂津が建設され、バスターミナルも整備されていた。フォルテ摂津の敷地は、その建設工事に伴い遺跡として確認され、既に千里丘東2丁目遺跡として周知であった。駅の西側は、平成20年度調査の直前まで用地買収が完了せず、工事は用地買収の進捗に従い順次進められた。このため、当該用地の埋蔵文化財調査も、結果としては平成17年度から20年度にわたっておこなわれることとなった。

平成17年度は、まず7月に試掘調査をおこない、その結果、本調査が必要であることを確認した。既往の調査成果の概要については、第2章第2節を参照されたいが、平成17年度9月から、駅のすぐ西側の当該道路に沿った調査地では最も東にある部分を約25mにわたって、平成18年度はそのさらに西側を延長約20mにわたって発掘調査をおこなった（註1）。

これらの調査終了当初は、平成17年度調査区は千里丘1丁目遺跡第2地点、平成18年度調査区は千里丘1丁目遺跡第3地点として登録していた。しかしながら、継続しておこなっている調査の成果を照合したところ、一連の遺跡群は中世の集落・耕作跡を中心とした同様の性格をもつ遺跡であることを確認した。発掘調査とともにおこなった周辺地形の現況測量調査の結果と合わせて、原地形の復原を試みたところ、南北報告の谷地形を復原することが可能であった。この南北方向の谷筋を中心とする範囲において、後世の耕作や住宅建設などの開発による削平を免れ、遺構が残存したものと考える。これらの成果を受けて、摂津市教育委員会と協議の上、千里丘2丁目遺跡第2地点・千里丘1丁目遺跡第2地点及び第3地点の既存の3遺跡を1つの遺跡として一体的に取り扱い、埋蔵文化財包蔵地の範囲を拡大することとした。平成19年6月にこれらの範囲を千里丘遺跡として新たに登録した。

その後、平成19年11月1日～22日にも、平成18年度調査区から狭い生活道路を挟んでさらに

西側の2ヶ所、合計約150m<sup>2</sup>について調査をおこなった。平成20年度は、用地買収が府道大阪高槻京都線との交差点部分まですべて終了した。この用地の西端は、平成19年度に設定した周知の遺跡範囲外であったが、遺跡が継続して拡がる可能性があるため、平成20年6月11日に2ヶ所のトレンチ（合計約5m<sup>2</sup>）を設定して試掘・確認調査をおこなった。これにより、西端近くまで遺構・遺物の残存を確認でき、千里丘遺跡の範囲を交差点までの範囲を含むようにあらたに拡大した。工事対象域はすべて本調査を実施する運びとなり、平成20年9月1日から翌年2月9日にかけて約420m<sup>2</sup>の範囲の調査をおこなった。これに併行して、平成19年度調査区の隣接地において通行上の都合から調査ができなかった残地部分2ヶ所についても、道路切り替え工事の進捗に合わせて調査をおこなった。

また、平成17年度・平成18年度調査区の間に、平成17年度調査時に車両進入口となっていた部分が、その後しばらくは仮設道路として使用されていたため未調査であった。当時の協議の結果では、仮設道路切り替え工事に伴い調査をおこなう予定であったが、平成21年度2月に現場へ赴き掘削したところ、遺構はすでに削平され、埋戻されていた様子がみえた。諸調査の不足により、数年前まで残存していたはずの遺構・遺物の記録をとどめることができなかつたことについては、今後このようなことが繰り返されないよう、協議・調整の徹底化を進めたい。

上記の千里丘遺跡の一連の調査から、本報告書は平成19・20年度の調査成果を中心に、総括的に報告するものである。

（小川 裕見子）

（註1） 平成17年度調査成果の詳細については、大阪府教育委員会2006年『千里丘遺跡群発掘調査概要』、平成18年度調査成果の詳細については、大阪府教育委員会2008年『千里丘遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告2007-3を各々参照されたい。

## 第2章 千里丘遺跡の周辺環境

### 第1節 立地と歴史的環境

摂津市は大阪平野の北部に位置する。市域は淀川右岸から千里丘陵南側にかけて広がり、その面積は14.88km<sup>2</sup>にわたる（註1）。淀川水系と大和川水系によって構成された沖積平野上にあり、大阪市、高槻市、茨木市、吹田市、寝屋川市、守口市と隣接する。

今回調査をおこなった千里丘遺跡は摂津市と吹田市の境界付近に存在する。周辺の遺跡のうちで比較的大規模なものとして、摂津市域内には明和池遺跡・蜂前寺跡など、吹田市域内には吹田操車場遺跡・吹田須恵器窯跡群などがあり、古代から近世にかけての多彩な遺跡が分布する。

以下、摂津市における遺跡及び出土遺物について時系列に沿って記述する。

#### 旧石器時代

摂津市域内において旧石器時代のものとみられる遺構・遺物は、未だ確認されていない。しかし、千里丘周辺での大規模な遺跡として吹田市域内の吹田操車場遺跡があり、ここでは旧石器時代のサヌカイト石器剥片が出土している。吹田操車場遺跡は、昭和42年の土木工事に際して中世の遺物が出土したことから遺跡として認識され、平成10年から財團法人大阪府文化財センターによって操車場全城にわたる61ヶ所で試掘調査が実施された。これにより、旧石器時代から近世にかけての遺構・遺物が多數確認された（註2）。

また、この他にも吹田市域内においては、旧石器遺物を伴う遺跡として、千里丘陵上に位置する垂水遺跡と吉志部遺跡、千里丘陵より南側に広がる平野部に位置する高城遺跡や日俵遺跡などがあり、ナイフ形石器などが確認された（註3）。

#### 縄文時代

千里丘遺跡では、平成18年度の調査時に、縄文時代の地層より約137点のサヌカイト石器剥片の集石を検出した（註4）。これより他に摂津市域内において縄文時代のものとして明確に確認できる遺物は少ないが、『摂津市史』によると鳥飼西地区の淀川本流河床より出土した縄文土器片が知られる（註5）。これは、昭和49年度に河底浚渫作業に関連して排除された土砂中より発見されたもので、上流の高槻・寝屋川・守口市域においても同様の状況が確認された。土砂内からは、縄文時代～近世にわたる大量の土器片が発見されたが、このうち少なくとも4点の土器片が縄文時代後期及び晩期のものと比定される（註6）。また、鳥飼西地区より上流の淀川河床では、高槻市柱本遺跡において前期～晩期の縄文土器が良好な状態で出土している（註7）。

#### 弥生時代

昭和期の造成工事に際して、いくつかの弥生土器が発見された。前述の鳥飼西地区河床での採集物にも、弥生時代前期・中期の弥生土器片が含まれる。これには、完形品はみられないものの摩耗の少ない破片が多く、付近一帯に弥生土器を含む遺物包含層の遺存が推定される（註8）。また、鳥飼西700番地（現・カネカ大阪工場地内）に所在する水田の造成工事が昭和12年度にお

こなわされた際に、地下3～10m（伝承）地点より弥生土器の壺が発見され、市内の光蓮寺に保管されている（註9）。これは、全高26cm、最大胴幅27cm、底部径8cmの平底壺である。全体に朱の塗布が顕著であり、胴の中位部に人為的な小穿口をもつ。乳幼児を葬る壺棺の可能性を考えられる（註10）。

近年の調査では、昭和62年度の本府教育委員会による明和池遺跡の発掘調査において、弥生時代中期～末期の土器を検出した。さらに、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構及び摂津市教育委員会による同遺跡の平成19～20年度調査では、弥生時代層の土器よりから弥生時代後期に位置付けられる壺・壺などが出土した（註11）。

また、摂津市域周辺の大坂府下・兵庫県下では、前期・中期・後期にわたって弥生時代集落跡が多く分布する（註12）。

#### 古墳時代

千里丘遺跡周辺の吹田市域内では、多数の古墳や須恵器窯跡が確認されている。これに対して、摂津市域内においては古墳の遺存例は認められないものの、古墳時代の遺構・遺物の確認例は前時代より増加する。

昭和初期頃から古墳時代の須恵器・土師器類の発見・採集例がある。旧味舌村大字庄屋牛屋（現・庄屋1丁目）の共有用水池（通称「明和池」）より、若干ながら須恵器が発見されている。これには完形の环身2点、横瓶、丸底壺などがある。また、現在の千里丘4丁目付近において、全高13cmの有蓋高壺や丸底あるいは円筒形の異形土器、提瓶などの須恵器が確認されている。さらに、前述した鳥飼西地区の淀川河床から採集された遺物にも多量の須恵器・土師器類が含まれる。この他にも、千里丘東1丁目地域から須恵器片、千里丘3丁目の金剛院境内から埴輪片・須恵器片などが採集された（註13）。以上のように多数の遺物発見例が認められるが、これらはいずれも発掘調査によるものではなく、遺構との相関関係などは不明である。

近年の調査では、前述した明和池遺跡において、溝内に人為的に設置された可能性のあるI型式3段階（中村編年・註14）の須恵器壺をはじめ、古墳時代の広範囲にわたる土師器・須恵器が出土し、集落跡の様子が確認された（註15）。

#### 奈良～平安時代

摂津市域内において、奈良・平安時代を示す明確な遺跡の例は発見されていないが、前述の鳥飼西地区淀川河床及び明和池遺跡を中心に、歴史時代全般にわたる遺物が確認されている。

また、千里丘3丁目に所在する金剛院には、平安時代の作と推定される寄木造の木造不動明王立像があり、府指定有形文化財である（註16）。

奈良時代に入ると、文献上でも摂津市域内の地名や事象が散見されるようになり、摂津市の鳥飼もそのひとつである。この地は元来、摂津国鴨下郡に位置し、明治時代ごろまでは鳥養と記されていた。「日本書紀」には、雄略天皇10年9月条に「養鳥人」、さらに同11年10月条に「鳥養部」という記述があり、関連性が考えられている。また、律令制度下の地方官制において、摂津には

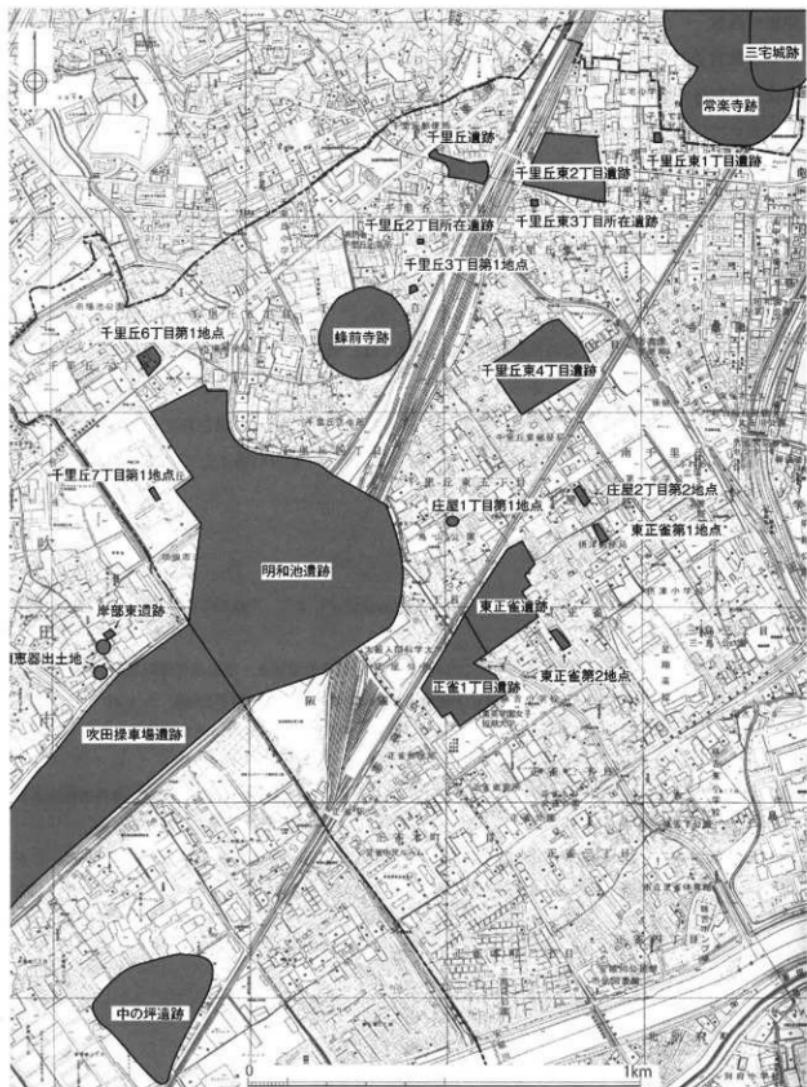


図1 摂津市域の主な遺跡

国司ではなく特別に摂津職を設けており、このことからも摂津が当時の要地であったことがわかる（註17）。

### 中世～近世

本府教育委員会が平成17～18年度に実施した千里丘遺跡の調査において、中世の遺構として掘立柱建物跡や耕作痕、これに伴う遺物などを検出しているが、この他にも蜂前寺跡、明和池遺跡において、中世～近世にかけての遺構・遺物がみられる。蜂前寺跡の第1次調査では、14～15世紀にかけての瓦を含む東西の溝が検出された（註17）。また、本府教育委員会による明和池遺跡の昭和62年度調査では、鎌倉時代から室町時代にかけての掘立柱建物跡、戦国時代の大溝、各時代の土器・陶磁器がみつかった。次いで摂津市教育委員会による平成19～20年度調査の際には、中世段階にみられる条里制を踏襲した地割に影響を受けた溝が検出されるなど、中世以前の地割を推察できるような痕跡が確認された（註18）。

以上のように、千里丘周辺の摂津市域内においては、戦前の開発などの際に採集された遺物や近年の開発に伴う発掘調査などから、土器を中心とした各時代の遺物及び遺構が確認できる。特に古墳時代以降のものが顕著である。大規模な集落跡などの存在が確認されているわけではないが、古代から現代にいたるまで長期にわたって人々の居住・生産の場として使用されたことがわかる歴史の豊かな地域である。

（福庭 万里子）

（註1） 摂津市ホームページ（<http://www.city.settsu.osaka.jp/>）より。平成19年10月1日現在における国土地理院による公表値。

（註2） 財団法人 大阪府文化財センター 2008年 『吹田操車場遺跡Ⅲ 吹田信号場駅基盤整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』（財）大阪府文化財センター調査報告書第180集 5-6頁

（註3） 吹田市教育委員会 2001年 『吹田の石器時代』 旧石器時代～縄文時代草創期を中心に 1-3頁

（註4） 大阪府教育委員会 2006年 『千里丘遺跡群発掘調査概要』 都市計画道路千里丘三島線道路改良事業に伴う調査

（註5） 市史刊行以前に確認された摂津市域の考古遺物に関しては、ほぼすべて市史（本編・史料編一）を参考として記述した。『摂津市史』は本編1巻、史料編4巻、別巻1巻として刊行されており、摂津市域の自然環境や、先史時代から昭和50年代までの通史を紹介している。各巻の刊行年は次の通りである。

摂津市史編さん委員会 1977年 『摂津市史』本編

柴田 實監修 1984年 『摂津市史』史料編一

柴田 實監修 1982年 『摂津市史』史料編二（近世編）

柴田 實監修 1983年 『摂津市史』史料編三（近世編）

柴田 實監修 1984年 『摂津市史』史料編四（近現代編）

摂津市教育委員会 1997年 『摂津市史』別巻

- (註6) 摂津市史編さん委員会 1977年 前掲註5 70-72頁  
柴田 實 監修 1984年 前掲註5 4-6頁
- (註7) 摂津市史編さん委員会 1977年 前掲註5 72頁
- (註8) 柴田 實 監修 1984年 前掲註5 8-10頁
- (註9) 摂津市教育委員会 2003年 「いにしえ通信」61号（2003年5月1日）
- (註10) 摂津市史編さん委員会 1977年 前掲註5 89-95頁  
柴田 實 監修 1984年 前掲註5 8-14頁
- (註11) 摂津市教育委員会 2009年 「明和池遺跡確認調査報告書」吹田採車場跡地地区（仮称）の整備事業に伴う埋蔵文化財確認調査
- (註12) 摂津市史編さん委員会 1977年 前掲註5 79-82頁
- (註13) 摂津市史編さん委員会 1977年 前掲註5 111-124頁  
柴田 實 監修 1984年 前掲註5 15-27頁
- (註14) 中村 浩 2001年『和泉陶邑窯出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版
- (註15) 摂津市教育委員会 2009年 前掲註11
- (註16) 柴田 實 監修 1984年 前掲註5 50頁  
大阪府ホームページ（<http://www.pref.osaka.jp/>）「府指定の文化財一覧（彫刻）」参照  
(2010年2月1日現在)
- (註17) 摂津市史編さん委員会 1977年 前掲註5 127-129頁
- (註18) 摂津市教育委員会 2002年 「いにしえ通信」50号（2002年6月1日）
- (註19) 摂津市教育委員会 2009年 前掲註11

## 第2節 千里丘遺跡周辺の既往の調査

千里丘遺跡群は、JR千里丘駅を挟んで東西に広がる。今回の主な調査地はJR千里丘駅西口から西へ直進して150mほどに位置する摂津市千里丘1丁目にあたる。

千里丘遺跡群の調査は、都市計画道路千里丘三島線道路改良事業及びJR千里丘駅前再開発事業に伴うものであり、平成3年にJR千里丘駅東口と西口とを結ぶ小坪井架道橋の拡幅工事が都市計画事業の一環として事業認可されたことに始まる。平成9年度から試掘・立会調査などが実施され、工事計画の進行に伴って平成20年度まで小規模な発掘調査を継続しておこなってきた。

平成9年度から平成11年度までの調査は摂津市教育委員会によっておこなわれた。平成9年度には、JR千里丘駅東口の南側にあたる千里丘東3丁目遺跡第1地点の立会調査がおこなわれ、中世の遺物包含層が確認されるとともに、土師器・瓦器片が出土した。さらに平成10年度には、平成20年度の調査区より都市計画道路千里丘三島（大阪府道142号）線を挟んで南側にあたる地点において立会調査が行われ、遺物包含層と土坑の存在が確認された。続く平成11年度にはJR千里丘駅東口の駅前総合施設（現・フォルテ摂津）建設に伴う調査が行われ、奈良時代から平安時代にかけての耕作痕が検出された（註1）。

平成17年度以降の調査は大阪府教育委員会による。小坪井架道橋工事関連の立会・試掘を含む調査の中で、それ以前にも周辺で多数の遺跡の存在が確認されていたことから、平成17年度工事の開始に先立って、平成17年7月21・22日の2日間にわたり試掘・確認調査をおこなった。遺構・遺物の存在を確認したこの試掘・確認調査の結果を受け、平成17年度から千里丘遺跡の発掘調査を開始し、縄文時代から近世にわたる複合遺跡を新たに発見した。近世以降の遺構としては、溜池もしくは流路と見られる遺構・溝などの耕作の痕跡、柱穴及び建物の痕跡、土坑などを検出し、土師器・須恵器・瓦器片・綠釉陶器片などが出土した。

また、他にも比較的新しい遺物が出土していることから、近世以降も長期にわたって使用されていた遺構であると考える。中世には、ほぼ全ての方向が北東・南西に描う鶴溝群や、8棟が数えられる南北方向主軸となる掘立柱建物群の柱穴など、耕作の痕跡と建物跡が主となった。出土遺物には土師器・須恵器・瓦器・陶磁器片がある。古代以前の地層からは、奈良～平安時代における流路や溝、牛の足跡、馬鍔の跡など多様な耕作の痕跡を検出した。また、ピット状の遺構とそれに伴う須恵器・土師器・黑色土器・瓦片の出土から住居跡の存在も想定できる。さらに特徴的な点として、縄文時代のものと推定できる地層からサスカイトの石器約137点が出土している（註2）。これについては第7章で詳しく報告する。

平成18年度には、平成17年度調査地の西側にあたる地点で新たに発掘調査をおこなった。この際の調査成果及び継続して実施されてきた調査成果を照合し、平成10・17・18年度の調査区を含む範囲が千里丘遺跡として新たに登録された。これは、旧地形における南北方向を走る谷筋の中で残存した、主として中世における集落・耕作跡としての同一の性格を持つ遺跡であることを確認できたことによる、範囲拡大を伴う一括登録である（註3）。また、平成20年度には、今回の

調査地内において試掘調査をおこなったが、この結果を受けて遺跡範囲はさらに拡大した。

このような経過からもわかるように平成18年度の調査地では、中世や近世の遺構面において、平成17年度調査において検出した遺構と同一の性格を持つ耕作痕跡や集落跡の検出が主となつた。中世末から近世にかけての遺構として、ピット・土坑・鍬溝などを検出しており、出土遺物は近世においては陶磁器口縁部・中世末のものに土師器・黒色土器・瓦器・陶磁器片などがある。中世の遺構では、おおよそ5棟が想定できる掘立柱建物跡・ピット・鍬溝などを検出した。掘立柱建物の主軸は、北東・南西方向となり、これは共に検出した鍬溝と平行に存在する。出土遺物には、土師器・瓦器・陶磁器片がある。古代の遺構では、溝・数棟を数える掘立柱建物跡・落ち込みを検出し、土師器・黒色土器片などが出土した（註4）。

以上のことからわかるように、千里丘遺跡において主となる遺構は、鍬溝・溝などの耕作痕跡と掘立柱建物跡である。特に中世の遺構・遺物が中心となるが、古くは縄文時代からも遺跡が存在する複合遺跡であるという性格を持つ。

（福庭）



図2 調査位置図

- (註1) 大阪府教育委員会 2006年 「千里丘遺跡群発掘調査概要」都市計画道路千里丘三島線道路改良事業に伴う調査 3-4頁
- (註2) 平成17年度の調査詳細は、大阪府教育委員会 2006年 前掲註1を参照されたい。
- (註3) 大阪府教育委員会 2007年 「千里丘遺跡」都市計画道路千里丘三島線道路改良事業に伴う調査 3頁
- (註4) 平成18年度の調査詳細は、大阪府教育委員会 2007年 前掲註3を参照されたい。

#### 参考文献

- 大阪府教育委員会 2006年 「千里丘遺跡群発掘調査概要」都市計画道路千里丘三島線道路改良事業に伴う調査
- 大阪府教育委員会 2007年 「千里丘遺跡」都市計画道路千里丘三島線道路改良事業に伴う調査  
大阪府埋蔵文化財調査報告2007-3
- 柴田實 監修・有坂隆道ほか編集 1984年 「摂津市史」史料編一 摂津市役所
- 摂津市教育委員会 2009年 「明和池遺跡確認調査報告書」吹田操車場跡地地区（仮称）の整備事業に伴う埋蔵文化財確認調査
- 摂津市教育委員会 2002年～2004年・2006年 「いにしえ通信」 50号～52号・62号～64号・74号・99号・100号
- 摂津市史編さん委員会 1977年 「摂津市史」本編 摂津市役所

### 第3章 平成20年度調査の手順と経過

平成20年度調査の調査区は、残土置き場を確保するために、調査範囲を東西に2分して設定した。東側を第I調査区(約9.5m×約13m)、西側を第II調査区(約10m×約15m)とした。さらに、遺物採集などの便宜のため、各々の調査区内を南北に2分し、2~3m毎にN1~N6・S1~S6の地区割りを設定した。以下に、第I・II調査区の地区割りを示す(図3)。

また、以下の2つの調査区に加えて、平成19年度調査時には道路切り替えの都合上、調査ができなかった残地部分に、三角形に近い形の第III調査区(約7m×約15.5m)及び第IV調査区(約1.2m×約4m)を設定した。しかしながら、N2・S3・S4・S5区では攪乱による破壊が著しい部分が大半を占めた。

今回の調査では、まず表土や攪乱層を重機による機械掘削で除去した後に、人力による調査掘削をおこなった。側溝は、遺構面の排水のため各々の調査区の周囲を囲うように設定した。第II調査区については、調査区が複雑な形状を呈するため、側溝も屈曲の多いものとなった。そのため、各々の壁面にA~Hの記号を割り当てた。これについても、以下の図を参照されたい(図3)。

調査の過程において、遺構平面図及び遺構断面図を各々20分の1の縮尺で、遺構の特徴に応じて必要なものを記録のために作成した。また、すべての調査区において、地層の堆積状況の記録のため、側溝壁断面図を20分の1の縮尺で作成した。

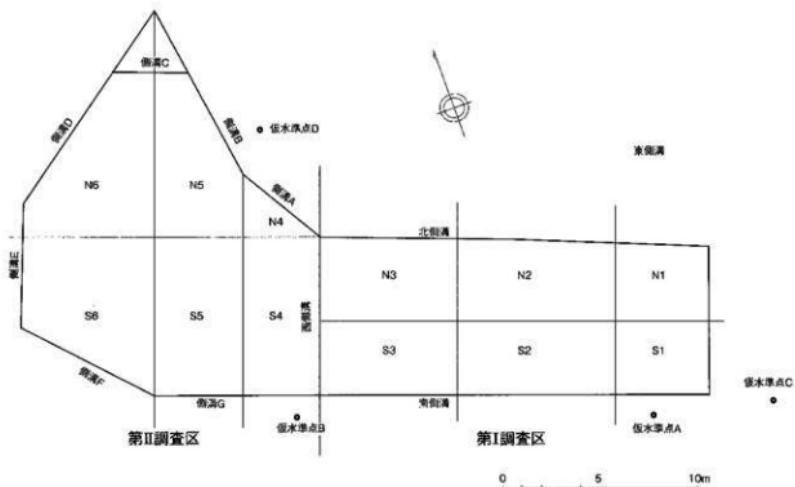


図3 平成20年度調査区 地区割り設定模式図

同様にこれらの図面を作成したものについては、すべて写真撮影をおこなった。各々の遺構面について、調査区の全景写真の撮影は足場を用いておこなった。また、両調査区とも第3遺構面については、25tクレーン車を用いて写真撮影及び写真測量をおこなった。これらの遺構については、第5章にて詳細を報告する。

出土遺物は、洗浄した後に出土位置にしたがって登録をおこない、実測図を作成した。その成果は第6章にて報告する。

本報告書は上記の平成20年度調査をはじめ、本府教育委員会事務局文化財保護課がおこなった千里丘遺跡の一連の調査成果を集成して報告するものである。

以下に平成20年度調査の調査経過を示す参考資料として、調査日誌の概要をまとめる。

#### 調査日誌より抜粋

2008年9月1～3日 曇り

プレハブの設置。及び現況測量。

地区割りの設定（東西約5～6m毎に1～6、南北約3～4m毎にN・S）（図1）。

第1調査区を重機による機械掘削の後、ベルトコンベアの設置。

調査時の測量用に仮水準点A～C 3点を設置

（点AはT.P.+10.552m、点BはT.P.+10.694m、点CはT.P.+10.437m）。

2008年9月3日～8日 晴れ時々曇り

第1調査区の側溝を東西南北の4方向において人力により掘削。

2008年9月9日 晴れ

北側溝壁の分層。N 1～3区、S 1～2区の人力掘削。

北側溝壁断面の写真撮影。

北側溝壁T.P.+10.0 mとT.P.+ 9.80mの位置に水糸を設置。

断面図を作成（S = 1 / 20）。

2008年9月10日～11日 晴れ

N 3・S 3地区の遺構面精査。N 2～3・S 2～3地区の搅乱の人力による除去。

北側の側溝壁の断面図作成及び地層注記。

2008年9月12日 晴れ

N 1・S 1地区の搅乱除去。東側溝壁断面の分層。

第1遺構面の遺構平面図を作成（S = 1 / 20）。

遺構の検出状況を写真撮影。

2008年9月16日 曇りのち晴れ

第1遺構面の遺構平面図を完成後、遺構を掘削。

遺構の完掘状況を写真撮影。

2008年9月17日 晴れ

第2遺構面まで人力掘削。南側溝壁断面の分層。

2008年9月18日 曇り

第2遺構面精査。東側溝壁断面の分層。南側溝壁の断面図作成 ( $S= 1/20$ )。

2008年9月19日 曇り時々雨（台風）

雨天のため、土器実測。

2008年9月26日 雨のち曇り

雨天のため、遺物の台帳登録。南側溝壁の断面図作成 ( $S= 1/20$ )。

2008年10月1日 曇りのち晴れ

第2遺構面SX01・SD01の遺構断面図を作成 ( $S= 1/20$ )。

東側溝壁の分層継続。

2008年10月2・3・7日 晴れ（曇り）

第3遺構面の全景写真を撮影。

水糸をT.P.+ 9.80mに設置して東側溝壁の断面図を作成 ( $S= 1/20$ )。

2008年10月8～10日 晴れ

第4遺構面まで人力掘削。その後写真撮影。

第4遺構面掘削、遺構SD02・SD03の遺構断面図を作成 ( $S= 1/20$ )。

2008年10月14日 雨

雨天のため、遺物と図面の台帳登録。土器実測。

2008年10月17～18日 晴れ

第4遺構面の遺構平面図作成 ( $S= 1/20$ )、及び写真撮影。

第5遺構面まで人力掘削。

2008年10月21～23日 晴れ（23日は雨のち曇り）

第II調査区埋戻し。土器実測。遺物洗浄。第II区の機械掘削。

2008年10月24日～28日 晴れ（24日は雨のち曇り）

仮水準点Cの水準点確認。

2008年10月29～31日 晴れ

第II調査区の側溝掘削。

それぞれの側溝壁断面の分層と断面図作成 ( $S= 1/20$ )。

2008年11月4～6日 晴れ

N 4～6区、S 4～6区第1遺構面の精査。側溝壁断面の写真撮影。

2008年11月7～13日 曇り（12・13日は晴れ）

内業。第I調査区第1・2・5面の遺構平面図の水準値修正。

遺物洗浄、登録、実測。

2008年11月14日 晴れ

第Ⅱ調査区第1遺構面平面図の水準値記入。ピットを完掘。

第3遺構面まで掘削。

2008年11月18・19日 晴れ

第3遺構面の遺構掘削。遺構断面図の作成 ( $S=1/20$ )。

2008年11月20日 晴れ

レッカ撮影。

2008年11月21～25日 曇りのち雨（25日は晴れ）

N4～N6区の人力掘削。第4遺構面の遺構検出。

2008年11月26日 晴れ

N4～N6区写真撮影。第Ⅲ調査区の東側壁断面分層。

水準値の仮基準として新点Eの設定。

2008年11月27日～12月1日 曇り（1日は晴れ）

第Ⅲ調査区東側壁面の断面図作成 ( $S=1/20$ )。

第Ⅱ調査区の側溝掘削、分層、側溝断面図の加筆修正。

第Ⅱ調査区第4遺構面の遺構掘削。

SD20・21の遺構断面図作成。

鋤溝群完掘。SD22から遺物出土。

2008年12月2～12日 晴れ（5日は雨）

第Ⅲ調査区人力掘削、断面精査。断面図に注記。全景写真撮影。

土器洗浄、実測。

これまですべての図面の修正。

第Ⅳ調査区人力掘削、分層、平面図作成、写真撮影を経て調査終了。

（山崎 美輪）

## 第4章 基本層序

### 第1節 平成20年度調査区について

摂津市千里丘に位置する千里丘遺跡は、千里丘陵を北西に控える低位段丘上に位置する。段丘層のさらに下層には、大阪層群が堆積する。調査区周辺の原地形は、西側が高く東側に向けて緩やかにくだり、遺跡の両端でおおよそ1mの高低差をもつ程度の傾斜がかかる。

調査の結果、平成20年度調査区においても、確認した遺構・遺物は平成17年度からつづく従来の調査成果と連続するものであり、千里丘遺跡がさらに西に拡がることがわかった。今回の調査区において、基本層序は0～5層までの6つに大別でき、さらに細分が可能なものは、数字及びアルファベットの小文字を用いて枝番号をつけた。遺構が存在するのは5層の上面までであり、以下は地山に相当する。これは平成18年度調査区の6・7層上面に対応する（註1）。

主だった遺構面は3面存在し、第Ⅰ調査区の東部においてのみ、さらにもう1面の耕作面を検出した。基本的には、第2遺構面は2層上面で近世以降、第3遺構面は4層上面で中世末～近世、第4遺構面は4-6・4-7・4-8層下面で中世末頃、第5遺構面は5層上面で中世に対応する。

それ以上遡るものについては、遺物の混入は確認できるが、遺構は中世以降に削平されているようで、面的な拡がりは確認できない。5層より下層の堆積は、人為的な攪拌を受けていない堆積のようにみえる。第Ⅰ調査区においては、特に調査区端の壁面近くで攪乱を受けている部分が多く層序と遺構面の対応関係が確認しにくいが、第Ⅱ調査区の北側の壁では比較的明瞭に確認できる。第Ⅰ調査区の西端から第Ⅱ調査区にかけては調査前に存在した建物の基礎が深く、遺構は特に第Ⅱ調査区南半では著しく削平を受けていた。

以下に、まずは主だった調査区である第Ⅰ・Ⅱ調査区において、次いで平成19年度調査の残地である第Ⅲ・Ⅳ調査区において、上層から順に地層の特徴を記す。

調査以前に存在していた鉄筋コンクリート造の建造物の基礎が深く、特に西側の第Ⅱ調査区では、現代盛土（0層）あるいは攪乱を受けた土が1～1.2mと厚く堆積する。その下層には灰色～明灰色粘土又は砂を中心とする、現代の耕作土（1層）が存在する。耕作土の下面が現代の遺構を擁する第1遺構面に相当するが、調査区の端から端まで一貫した堆積ではない。これより下層から、主だった遺構面に相当する地層が堆積する。

上面が第2遺構面に相当する2層は厚くはなく、15～25cm程である。調査区の西部では比較的堆積が厚く、第Ⅱ調査区において25cm程となり、2層に細分できる。第Ⅰ調査区西半から第Ⅱ調査区にかけてでは、その堆積の中でも第5章で図化した第2遺構面に加えてさらにもう1面の耕作の痕跡を部分的に確認することができた。主に淡い灰色をベースとする砂質土で、一部は鉄分沈着により橙～褐色を呈する。

上面が第3遺構面に相当する4層は、安定的に堆積し25～30cm程度の厚みをもつ。第Ⅰ・Ⅱ調査区を通じて確認でき、遺構のひろがりも一部を除いて調査区全域で確認できる。さらに平成

19年度以前の調査成果と比較しても、遺構面・堆積ともに対応関係が比較的明瞭である。4層は主に上・下層に2分が可能であるが、そのうち遺構面として耕作の痕跡が確認できたのは、第Ⅰ調査区の東半のみである。これを第4遺構面とした。

上面が第5遺構面に相当する5層は、いわゆる地山に相当する。一部において青～暗青味がかった色合いを呈し砂粒が粗くなることがあるが、基本的には明黄褐色で、非常に締まった粘土層の上面に安定的に遺構を検出できる。そしてこの地山上の遺構も、後世の削平状況により、中世の遺構であったり、あるいは古代以前の遺構であったりという、残存する遺構の形成年代に違いはあるが、千里丘遺跡全域にひろがることが確認できた。

第Ⅲ・Ⅳ調査区は平成19年度調査の残地部分にあたり、第Ⅰ・Ⅱ調査区のやや東に位置する。JR千里丘駅西側のこの遺跡では、基本的に西の方が高く東へ向かって緩やかに傾斜がかかって下る原地形が復原できると先にも述べた。第Ⅲ調査区では、先述の第3遺構面と第5遺構面に相当する、おもに2面の遺構面が確認でき、上層の遺構が第3遺構面、下層が第5遺構面に相当する。第3遺構面は図8の6・7層上面で検出し、暗灰色を呈する6層がベースとなる。第5遺構面は地山である図8の15・18層上面で確認でき、第Ⅰ・Ⅱ調査区で明黄褐色であった対応層は、ここでは暗灰色を呈する。ただ、変わらず締まりは強い。

第5遺構面の地山が、前述の東が高く西が低いという基本的な状況に反して、この調査区内では西半の方が低い。しかしながら、これは東半の15層上面の遺構の残存状況が西半の18層上面よりも良好であることを考慮しても、東半の方が後世の擾乱の到達深度がより深く、上面が著しく削平されていることによる。調査区東半の地山上に堆積する16層の対応層が西半には堆積していないことも、この状況を説明するといえよう。

第Ⅳ調査区では、地山上面の第5遺構面のみ、確認することができた。図9では、5a層上面にあたる。第Ⅲ調査区同様にここでもこの粘土層は青みがかった灰色を呈し、よく締まる。上層で鉄分沈着が著しく、黄～赤褐色に変色する。

(註1) 平成18年度調査区の基本層序に関しては、大阪府教育委員会2008年『千里丘遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告2007-3を参照されたい。

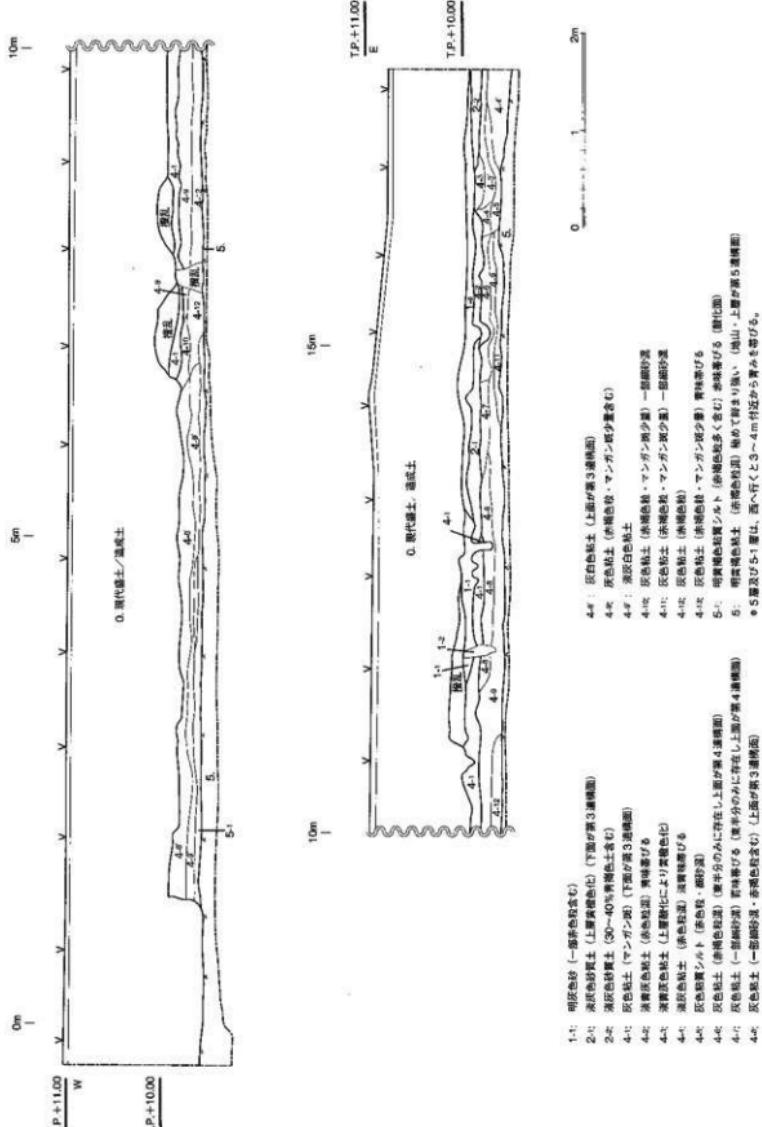
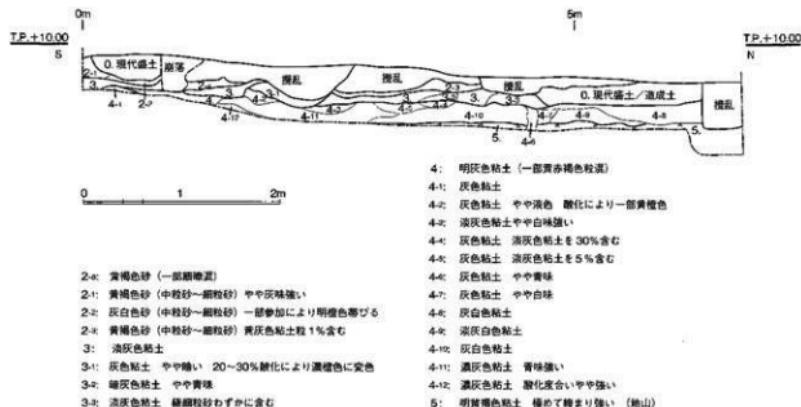


圖4 第I調査区北側湾断面図

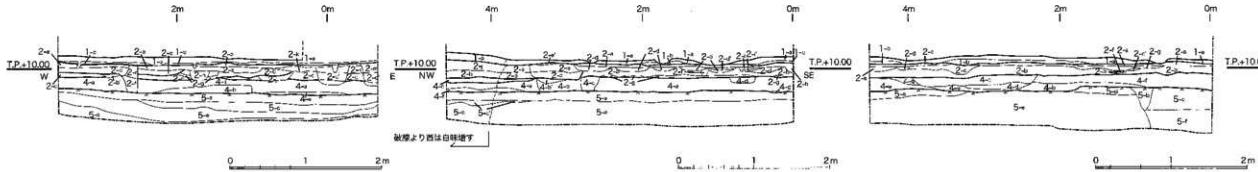


## 1) 第I調査区 西側溝断面図



## 2) 第I調査区 東側溝断面図

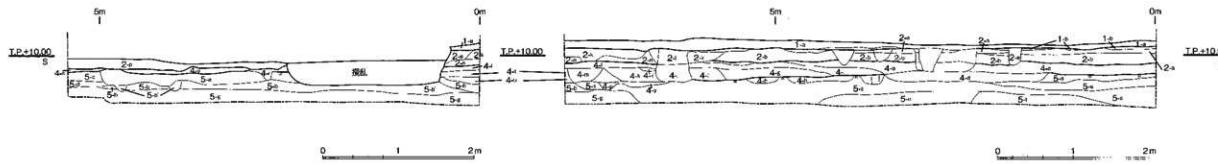
図5 第I調査区 西・東側溝断面図



1) 第II調査区 倒溝C

2) 第II調査区 倒溝B

3) 第II調査区 倒溝A



1-a: 黒灰色土 (樹根砂利シルト) (耕作土) 調査A～H同一層  
 1-b: 淡褐色土 (樹根砂利・樹枝砂利) (耕作土)  
 2-a: 遊離粘土土 (樹根砂利・樹枝砂利) (上面が第2透鏡面)  
 2-b: オリーブ色土に黄褐色土・30%程度混入 (樹枝砂利)  
 2-c: 明黄色粘土質土 (樹枝砂利) 布局複数  
 2-d: 黄褐色粘土質土 (樹枝砂利) 全体に軟化している  
 2-e: 明黄色土 (樹枝砂利) 全体に軟化している  
 2-f: 淡褐色土 (樹枝砂利) やや軟化、軟化している  
 2-g: 淡褐色土に淡灰色土が50%程度混入 (樹枝砂利)  
 2-h: 淡褐色土に淡褐色土 60%程度混入 (樹枝砂利) 軟化している  
 2-i: 黄褐色土上 (樹枝砂利) (樹枝砂利)  
 2-j: 汚れた褐色土に暗褐色土 20%混入 (樹枝砂利)  
 2-k: 暗灰色土 (樹枝砂利) 全体にやや軟化  
 2-l: 反色砂質土 (樹枝砂利) 敷地により一部暗黃褐色  
 2-m: 淡褐色土 (樹枝砂利) 一部漂砂化

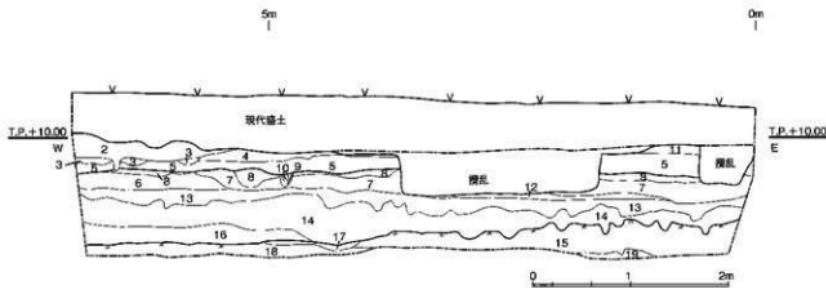
4-a: 黑色土 (軟化により下方洗滌漂白化) (樹枝砂利)  
 4-b: 淡褐色土 (樹枝砂利・樹枝砂利) 全体にやや軟化 (調査日4ヶ月前に剥離)  
 4-c: 黄褐色土 (樹枝砂利) 一部軟化  
 4-d: オリーブ灰褐色土 (樹枝砂利) ポロロしたもじり土 (透鏡性土)  
 4-e: 淡褐色土 (樹枝砂利) 全体に軟化 (透鏡性土)  
 4-f: 汚れオーブル色土 (樹枝砂利) (樹枝砂利シルト) (透鏡性土)  
 4-g: 黄褐色土 (樹枝砂利) 全体に軟化 (透鏡性土)  
 4-h: 黄褐色土 (樹枝砂利) やや軟化 (透鏡性土)  
 4-i: 淡褐色土 (樹枝砂利) 全体に軟化 (透鏡性土)  
 4-j: 黄褐色土 (樹枝砂利) 全体に軟化 (透鏡性土)  
 4-k: 淡褐色土 (樹枝砂利) 全体に軟化 (透鏡性土)  
 4-l: 黄褐色土 (樹枝砂利) 全体に軟化 (透鏡性土)  
 4-m: 黄褐色土 (樹枝砂利) 全体に軟化 (透鏡性土)  
 4-n: 黄褐色土 (樹枝砂利) 全体に軟化 (透鏡性土)  
 4-o: 黄褐色土 (樹枝砂利) 全体に軟化 (透鏡性土)  
 4-p: 黄褐色土 (樹枝砂利) 全体に軟化 (透鏡性土)

5-a: 明黄色砂質土 一部軟化している (中～高粘性) 調査A～H同一層  
 5-b: 淡褐色砂質土 (樹枝砂利) 上面が第5透鏡面  
 5-c: 淡褐色砂質土 (樹枝砂利・シルト)  
 5-d: 黄褐色土質土 やや柔らかい  
 5-e: 淡褐色砂質土 (樹枝砂利) 下方やや軟化  
 5-f: 淡褐色砂質土 (樹枝砂利) 全体に軟化やや強い  
 5-g: 明黄色砂質土 (樹枝砂利) やや軟化  
 5-h: 淡褐色砂質土 (樹枝砂利) 全体に強烈な砂質土のブロックを多く含む  
 5-i: 淡褐色砂質土 (樹枝砂利) 全体に強烈な砂質土のブロックを多く含む  
 5-j: 淡褐色砂質土 (樹枝砂利・シルト) 5cmより堅くなる  
 5-k: 淡褐色砂質土 (樹枝砂利) やや青味、一部下方で軟化  
 5-l: オリーブ灰褐色土 (樹枝砂利) 全体に軟化  
 5-m: 淡褐色砂質土 (中～高粘性)  
 5-n: 黄褐色土 (樹枝砂利) マーブル状に漂化

1) 第II調査区 倒溝E

2) 第II調査区 倒溝D

図7 第II調査区 西D・E倒溝断面図



2. 黒色 砂質土  
オリーブ灰褐色粘土ブロック (~5cm大) と ~1cm大の塊を少量含む
3. 灰色 砂質土 オリーブ灰褐色粘土ブロックを多く含む (過構造)
4. 緑豊色細砂 ~1cm大の塊を多く含む 全般的に鉄分発達
5. 明オリーブ灰褐色粘土 東へ行くほど鉄分が多く赤透し 上半分黄褐色化
6. 緑褐色粘質細砂 構造面スジ状に緑灰色粘土がわずかに混入
7. 灰色粘質細砂 鉄分濃度 (平成19年度調査部ら題と対応)
8. 灰色粘質細砂 ~3cmの5のブロックを多く含む
9. 灰色粘質細砂 鉄分全体に浸透 漆黒褐色化
10. 黄茶褐色粘質細砂
11. 黄褐色砂 (粘土の一部)
12. 灰白色粘質細砂褐色帯び 鉄分多く赤褐色化
13. 白灰色粘質土 鉄分多く含み赤褐色化
14. 黄色粘質砂 (青苔帯) 鉄分含みまだら状に赤褐色化
15. 黄色粘土 鉄分含み赤褐色化 (地山: 18. と対応)
16. 灰色粘土 (やや暗い) 鉄分含み全体的に赤褐色化
17. 灰色砂 (やや暗い) 青灰色粘土含む 鉄分により一部漆黒褐色化
18. 青灰色粘質シルト やや暗い灰色微細脈を含む (地山)  
鉄分によりまだら状に赤褐色化
19. 青灰色微砂 部分的に鉄分含み赤褐色化

図8 第III調査区 側溝断面図

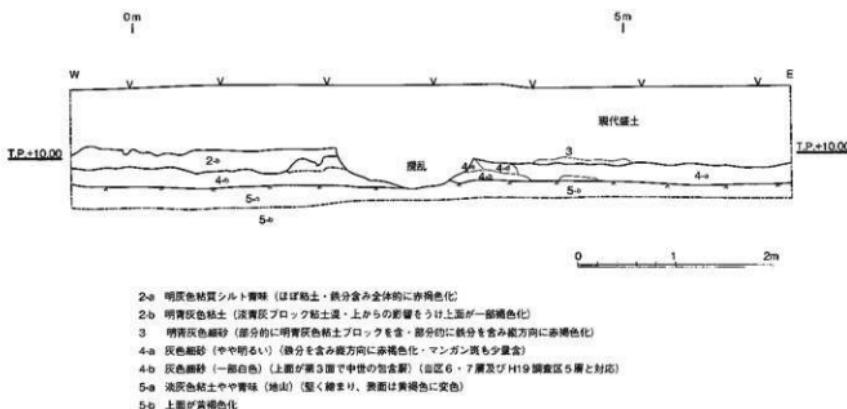


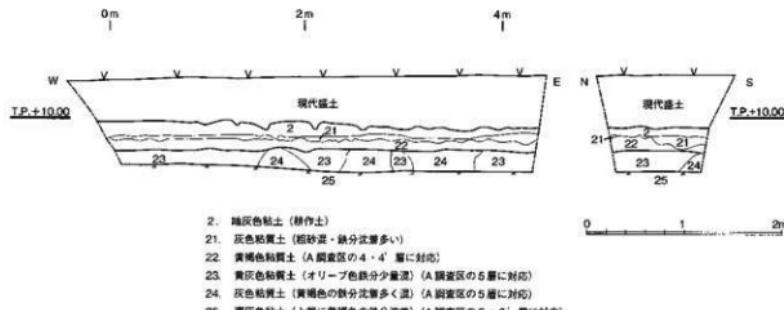
図9 第IV調査区 側溝断面図

## 第2節 平成19年度調査区について

平成19年度調査は、平成20年度調査地の東に隣接する位置でおこなった。A・B 2つの小規模な調査区があり調査区ともに他年度の調査とも対応する層序、及び上・下2面の遺構面を確認した。前項で報告した平成20年度調査と比較すると、上層の遺構は第3遺構面、下層が地山上の第5遺構面に相当する。第3遺構面は、A調査区では図10の5層上面、B調査区では図11の23・24層上面にある。第5遺構面はA調査区では6層上、B調査区では25層の上面にある。B調査区においては、第5遺構面にあたる地山の粘土層は黄褐色～オリーブ黄色を呈し、平成20年度調査区とよく似た様相を示す。

また、平成17～20年度の一連の調査における層序の対応関係は、次節で層序表とともに示すこととする。

\* 平成19年度の発掘調査は本府教育委員会文化財保護課調査第1グループ副主査 小浜成（現・指定文化財グループ主査）がおこなった。



1) 平成19年度B調査区 北側溝断面

2) 平成19年度B調査区 東側溝断面

図10 平成19年度B調査区 東・北側溝断面図

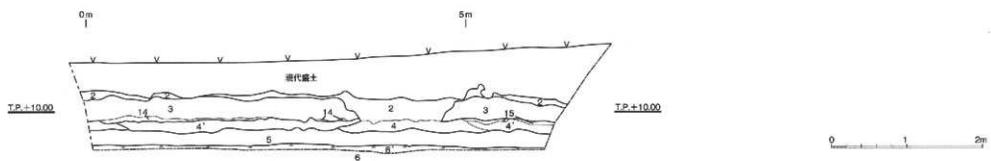
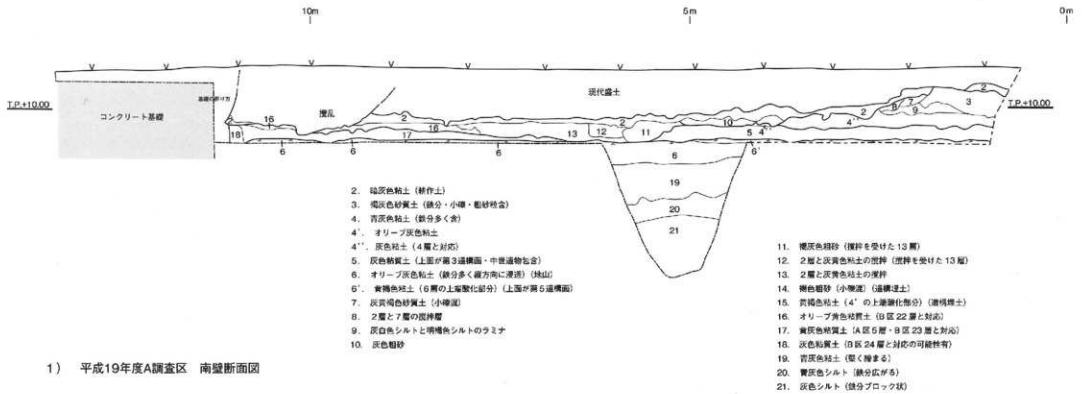


図11 平成19年度 A調査区 西・南側溝断面図

### 第3節 千里丘遺跡の基本層序

前項まで述べた各々の調査区の層序の対応関係を表1にまとめた。

平成19年度調査区は極端に狭い範囲の調査であったため例外的ではあるが、それを除くと、基本的には3面の遺構面は千里丘遺跡のほぼ全城を通じて広がることがわかった。もっとも上層は、近世の遺構面で、平成17年度調査では第1遺構面として検出し、平成18・20年度の第2遺構面と対応する。次は、中世末頃の遺構面であり、平成17年度調査では第2遺構面として検出し、平成18・19・20年度の第3遺構面と対応する。地山直上の最終遺構面は、平成17年度調査区では第3遺構面として検出し、平成18・19・20年度の第5遺構面と対応する。

最終遺構面は、平成17・18年度調査においては、古代以前の遺構をも検出することができたが、それ以降の調査では、地山が緩やかに傾斜し、微高地を形成しているため削半されていた。そのため、平成19・20年度調査では、最終遺構面においても中世の遺構が検出されたのみである。

平成18・19年度調査区では、さらに下層を確認するトレンチを設けた。平成18年度調査区における10層は平成19年度調査区における19層と対応している可能性が高く、これは大阪層群に属すると想定できる。

このように、当該調査範囲では、東側ほど原地形は谷間となり堆積が厚く、遺構・遺物の残存状況も良好であった。そしてこの谷間は、南北方向に広がることが推定される。

表 1 千里丘漫阶层序表

H-17 年代层序区— 层号 台相 (厚度 cm)		漫阶·湖相 层号 台相 (厚度 cm)		H-19 年代层序区— 层号 台相 (厚度 cm)		漫阶·湖相 层号 台相 (厚度 cm)	
层号	年代 (0~100)	层号	年代 (0~100)	层号	年代 (0~80)	层号	年代 (0~90)
0 层	现代带土 (0~100)	0 层	现代带土 (0~10)	0 层	现代带土 (50~80)	0 层	现代
2 层	冲积带土, 钙质 冲积带土 (0.5)	1 层	冲积带土, 钙质 冲积带土 (0.5)	2 层	冲积带土, 钙质 冲积带土 (0.5)	1 层	冲积带土, 钙质 冲积带土 (0.5)
3 层	冲积带土, 钙质 冲积带土 (0.5)	2 层	冲积带土, 钙质 冲积带土 (0.5)	3 层	冲积带土, 钙质 冲积带土 (0.5)	2 层	冲积带土, 钙质 冲积带土 (0.5)
4 层	冲积带土, 钙质 冲积带土 (0.5)	3 层	冲积带土, 钙质 冲积带土 (0.5)	4 层	冲积带土, 钙质 冲积带土 (0.5)	3 层	冲积带土, 钙质 冲积带土 (0.5)
5 层	冲积带土, 钙质 冲积带土 (0.5)	4 层	冲积带土, 钙质 冲积带土 (0.5)	5 层	冲积带土, 钙质 冲积带土 (0.5)	4 层	冲积带土, 钙质 冲积带土 (0.5)
6 层	冲积带土, 钙质 冲积带土 (0.5)	5 层	冲积带土, 钙质 冲积带土 (0.5)	6 层	冲积带土, 钙质 冲积带土 (0.5)	5 层	冲积带土, 钙质 冲积带土 (0.5)
7 层	冲积带土, 钙质 冲积带土 (0.5)	6 层	冲积带土, 钙质 冲积带土 (0.5)	7 层	冲积带土, 钙质 冲积带土 (0.5)	6 层	冲积带土, 钙质 冲积带土 (0.5)
8 层	冲积带土, 钙质 冲积带土 (0.5)	7 层	冲积带土, 钙质 冲积带土 (0.5)	8 层	冲积带土, 钙质 冲积带土 (0.5)	7 层	冲积带土, 钙质 冲积带土 (0.5)
9 层	冲积带土, 钙质 冲积带土 (0.5)	8 层	冲积带土, 钙质 冲积带土 (0.5)	9 层	冲积带土, 钙质 冲积带土 (0.5)	8 层	冲积带土, 钙质 冲积带土 (0.5)
10 层	冲积带土, 钙质 冲积带土 (0.5)	9 层	冲积带土, 钙质 冲积带土 (0.5)	10 层	冲积带土, 钙质 冲积带土 (0.5)	9 层	冲积带土, 钙质 冲积带土 (0.5)

## 第5章 調査成果及び検出遺構

### 第1節 平成20年度調査区の検出遺構について

今回の調査では、第Ⅰ・Ⅱ調査区とともに、主に3面の遺構面を検出した。擾乱が著しい地区以外のほぼ調査区全域に安定的に広がるそれは、第2遺構面、第3遺構面、第5遺構面である。各々、第2遺構面は2層上面、第3遺構面は4層上面、第5遺構面は5層をはじめとする地山の最上層上面において検出した。

第1遺構面は現代耕土上面の耕作及び建物の痕跡であり、ここでは報告の対象に含まない。第4遺構面は、第Ⅰ調査区の東半のみという一部の地区のみで検出可能であった。ここで図示する以外の地区では後世の整地により削平されたようである。調査区内の大部分では、第3遺構面下層の4層を除去後はすぐに地山が露出し、第5遺構面となる。

以下に、各遺構面で検出した遺構の詳細を上層から順に述べる。

まず、第2遺構面では、細溝群・落ち込み・溝・土坑・ピットなどを検出した。細溝群は、幅20～40cm程度のものが東西からやや南にふれる方向で、何条も平行して走る。耕作にともなう鋤溝の痕跡であると想定できる。第Ⅰ調査区の中央よりややに東において北東・南西方向に落ち込みの肩を検出した。西が高く、東へ20cmほど下降する。肩は、第Ⅰ調査区東端から西へ約12m程の位置にあったが、調査区北端付近においては擾乱の到達深度が深い箇所が多くあり、第2遺構面が削平されている。そのため、断面においてはこの落ち込みが照合できない。

落ち込みの西側では、ほぼ正南北方向に走るやや不整形で幅広い溝が存在する。溝幅は1m余りである。同様に、調査区の北東角でわずかに西肩のみ検出した溝がある。長さは約10m、幅は最大で80cmという一部を検出したのみで調査区外へ続く。調査区北端にみえる2-2(図4参照)肩がこの埋土にあたる。この2条の溝は、後者は両肩を検出した訳ではないが、平行して並ぶように見える。ともに浅めであることなど、性格も類似するため、同時につくられ、使用されたものである可能性も多い。

溝の周辺ではこの他に足跡のような小土坑や、性格不明の土坑などがみつかった。その一方で、落ち込みの東側の微高地域では、細溝群とともに、柱穴の痕跡であろうピットをいくつか検出したが、同一の建物を構成するものは確認できなかった。ピットの類は調査区南側に集中し、細溝群は特に第Ⅱ調査区北側で密集していた。細溝群は、これらの第Ⅰ調査区内の一群と、第Ⅱ調査区北側の一群と、大きく2ヶ所で群在する。そして、この2群の細溝の主軸はわずかにずれる。どちらも東西方向からやや南へふれる主軸方向であるが、第Ⅰ調査区の一群の方がふれ幅が小さく、概ね正東西方向に近い。第Ⅰ調査区と第Ⅱ調査区南半の境界近くで、擾乱を著しく受けているが、このあたりに地目境が存在し、その地目境を超えると主軸がわずかにずれるという可能性が高い。この傾向は、平成17・18年度調査区においても確認している。

また第Ⅱ調査区の西端では、4条のみであるがこれらの東西細溝に直交する、ほぼ南北方向に

主軸をもつ鋤溝も検出した。

第2遺構面からは、陶磁器を中心とする遺物がみつかった。千里丘遺跡では、全体的に出土遺物の量は少なく、土器・陶磁器類の残存状況はあまり良好でないため、遺構の時期の断定などは極めて困難である。しかしながら、第2遺構面から出土した土器・陶磁器類には、肥前系の染付陶器片(次章・図21-14など)が多くあった。他には、淡焼であると思われる土師質の土器の破片(図19-13)や備前焼のすり鉢片(図21-18)などが出土した。瓦器椀(図19-10・12)や須恵器鉢(図20-2)なども出土したがこれらは下層の遺物が混入したものであろう。これらの出土遺物の状況から、第2遺構面は概ね18~19世紀頃の近世に相当する。

第3遺構面は、比較的安定して調査区全域に広がる遺構面である。遺構平面図作成は、25tクレーン車を用いた写真撮影測量による。平成17~18年度調査区においても、もっとも遺構密度が高く、それは平成20年度調査区をはるかにしのぐ密度の高さであった。

主な遺構は、上層と同様に鋤溝であろう細溝群・溝・ピットなどである。細溝群は第I調査区中央部で検出した。どれも幅20~30cmほどの小規模なものである細溝の主軸方向は、ここでも上層の傾向を踏襲し、東西方向からわずかに南にふれるが、ほぼ正東西方向である。

第2調査区北半では、これらより規模の大きな溝を検出した。幅20~25cm程度での溝が延長の長いものが2条、途中で途切れる短いものが3条、平行して北西・南東方向に走る。これらも鋤溝の痕跡であろう。また、それらの鋤溝の南に幅40~70cm程度やや不整形ではあるが、同方向に平行して走る溝を2条検出した。これらも耕作にともなう痕跡であると考える。

この他にも、ピットや土坑を検出した。ピットは、柱穴であると想定できるものが複数あったが、並んで建物となるような痕跡を確認できなかった。

第3遺構面から出土した遺物は、主に土師器・瓦器・陶磁器類である。土師器は皿(図19-3)や椀の破片が多く、このうち土師器椀の高台付き底部片(図19-7)は土坑(S X03)から出土した。時期の特定が可能なものでは、白磁椀の口縁部片(図21-13)や備前焼のすり鉢の破片がある。第3遺構面は、中世の後期、概ね17世紀頃までに形成された遺構であると言えよう。

第5遺構面は最終遺構面であり、平成20年度調査においては、もっとも遺構密度が高い。主に黄褐色を呈するきわめて締まりの強い粘土(地山)直上に上層の灰色系の砂粒を多く含む埋土が堆積した状態の細溝群を検出した。細溝群は、上層と同様に鋤溝の痕跡であり、幅20~30cm程の溝が何条も平行して走る。特に第I調査区内では密集して群在する。第II調査区では、やや規模の大きい幅50~70cm程度の溝を2条検出した。溝の主軸も上層と同様に、東西方向からわずかに南へふれる。しかしながらそのふれ幅は上層遺構よりも大きく、正東西方向に近いとは言えない。

その一方で第II調査区の西半で、第2遺構面にもあったように、数条の南北方向溝を検出した。幅も狭く、延長も短いが、こちらも鋤溝であり、同様の南北方向の鋤溝は第III・IV調査区及び平成19年度調査区においても確認できたため、こちらは次節で詳しく述べる。

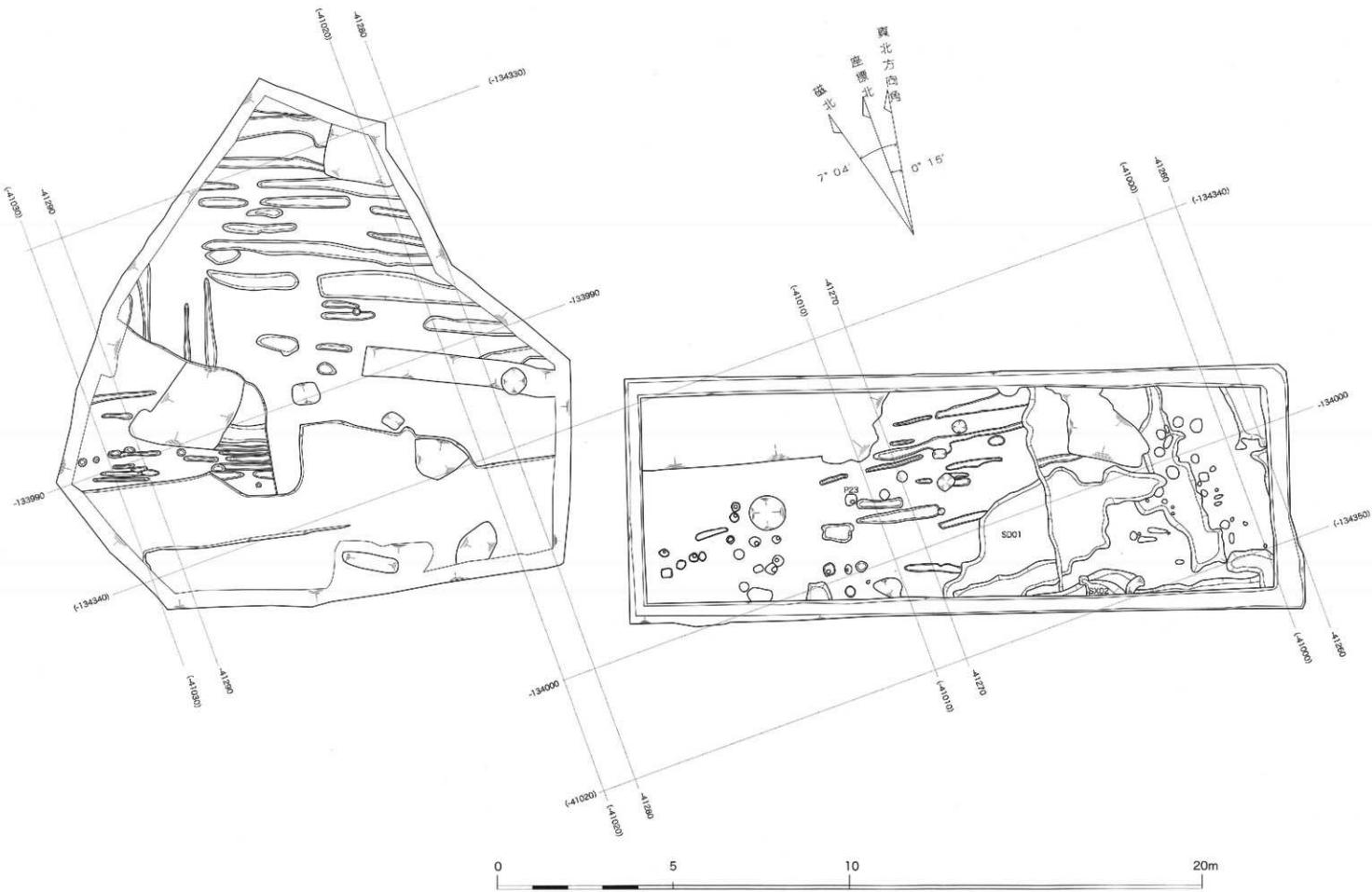


図12 第2遺構面 遺構平面図

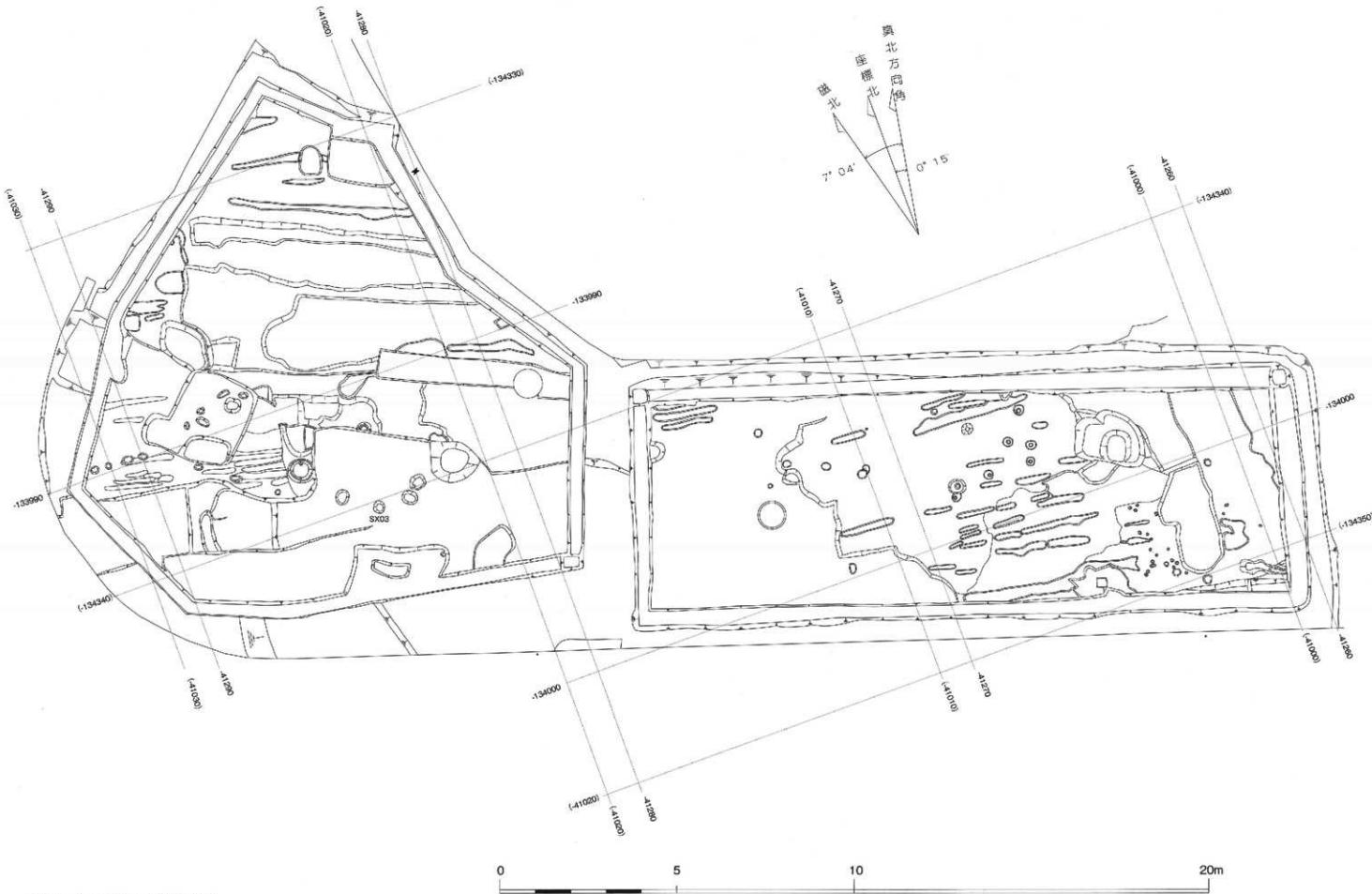


図13 第3遺構面 遺構平面図

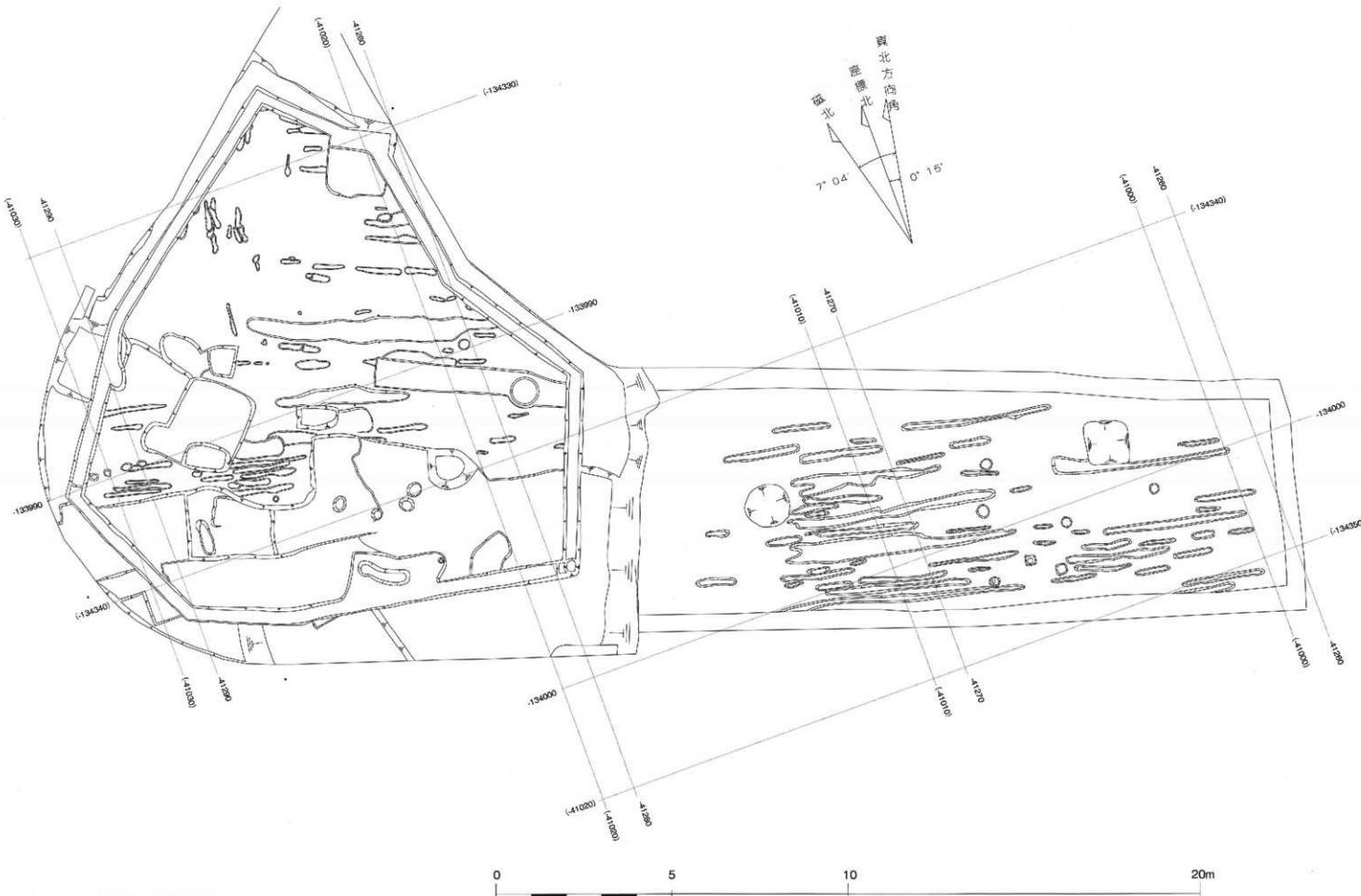


図14 第5遺構面 遺構平面図

第5遺構面の遺物は、陶器碗の口縁部破片を1点（図21-9）図化しているが、極めて少なかつた。しかしながら、第3・4遺構面との層序関係から、これらより相対的に古い中世の遺構であることを想定する。

そして、調査区のほんの一部のみでしか検出できなかったため主要遺構面であるとは言えないが、第I調査区東半においてのみ、第4遺構面を検出することができた。4・6・4・7・4・8層下面で検出し、第3遺構面と第5遺構面の間にあたる。幅40～55cmと主要遺構面の細溝よりやや幅広い溝が9条、ほぼ正東西方向に走る。これらも耕作にともなう痕跡であろう。

ここでは、4・8層が包含層にあたるため出土上遺物が比較的多く、土師器・瓦器・陶器などの破片が出土し、残存状況も他層出土のものより良好なもののが多かった。中でもっとも良好な状態にあった土師器椀（図19-9）はS1区から出土したもので、外面に明瞭な指頭圧痕がのこる。他にも、断面三角形を呈する貼り付け高台をもつ土師器椀の底部片（図19-8）や瓦器椀の口縁部片（図19-10）などが出土し、この遺構面の溝は中世の13世紀頃までに埋没した可能性が高い。

またこのことから、そのさらに下層にある前述の第5遺構面は、13世紀以前の中世にあたるのではないかと考える。しかしながら、千里丘遺跡は遺構の中心が耕作の痕跡であり住居や集落ではないことが原因であろうが、先述の通り出土上遺物の極めて少ない遺跡であり、遺物を手がかりに遺構の年代を想定することは極めて困難である。

平成20年度には、これまで述べた主要調査区である第I・II調査区に加えて、小規模なトレンドである第III・IV調査区とさらに2ヶ所の調査をこなったが、この2ヶ所は、平成19年度調査の残地にあたり、遺構の内容も平成19年度調査区と連続性がみられるため、次項において平成19年度調査区とまとめて報告することとする。

\* 平成20年度の発掘調査に際しては、一瀬和夫、伊部貴雄、前田俊雄、大向智子、宇肥香央里、福庭万里子、坂本聰美、日置舞子、竹村亮仁、山崎美輪、垣添康平ほか諸氏のご助力を賜りました。ここに記して、厚く謝意を表します。

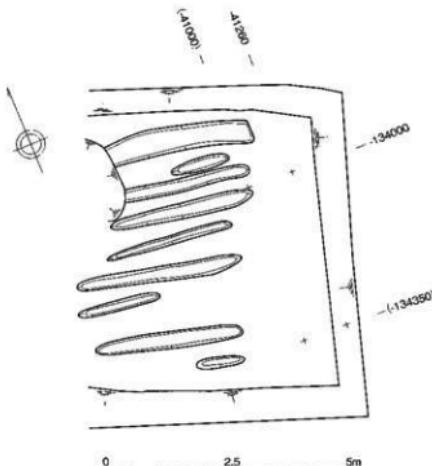


図15 第4遺構面 遺構平面図

## 第2節 平成19年度調査区の検出遺構について

ここでは、平成19年度A・B調査区と、その隣接地である平成20年度第Ⅲ・Ⅳ調査区の調査成果について報告する。当該地区は、前節で報告した平成20年度第Ⅰ・Ⅱ調査区のすぐ東に位置する（註1）。本体工事の進捗状況と通行路確保の都合により4つの調査区に分けて順次調査をおこなった。平成19年度に北半のA・B調査区、翌20年度に南半の第Ⅲ・Ⅳ調査区を調査した。周辺の調査成果をもふまえて対応関係が確認できる2面の主要遺構面を検出し、いざれも耕作の痕跡を示す。

上層の遺構面は、前節の第3遺構面に対応し、A・B調査区では5層上面（図10・11参照）、Ⅲ・Ⅳ調査区では6・7層上面（図8・9参照）で検出した。中世末頃から17世紀頃までの遺物が出上した層である。5層は近代以降の削平によって、A調査区の西半にのみ存在を確認することができた。遺構の密度は希薄であるが、鋤溝の痕跡や小土坑があった（図版13参照）。なお、4層についても、5層同様に削平を受けていたが、その他の調査区において近世に相当する遺構面と対応する層位であると考える。

下層の遺構面は、前節の第5遺構面に対応する地山直上で検出した最終遺構面である。A・B調査区では6層上面（図10・11参照）、第Ⅲ・Ⅳ調査区では15・18層上面（図8参照）で検出した。ここでも細溝群を中心とする耕作の痕跡が主な遺構であり、それらに加えてピット、小土坑がわずかにある。鋤溝以外の遺構の性格は、遺物もほぼ出土せず、情報量に乏しいためわからぬ。ここでの特徴的な傾向としてはあげられるのは、主な遺構である鋤溝の主軸方向が異なることである。特に東半のB調査区及び第Ⅲ調査区において集中する鋤溝群は、第Ⅰ・Ⅱ調査区の遺構主軸と直交する方角に走り、南北からわずかに東にふれる。溝の幅は20～30cmと当該調査地で通有にみられる小規模なものである。埋没状況や規模、密集度合いなどからも、同一の性格をもつ耕作とともにうるさい溝群であると考える。

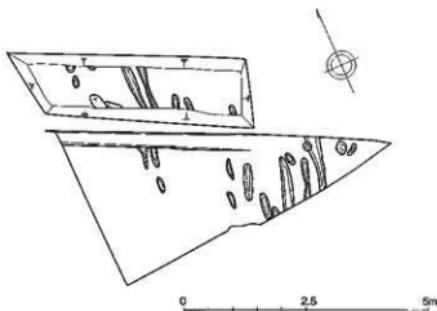


図16 平成20年度第Ⅲ調査区・平成19年度B調査区  
第5遺構面 遺構平面図

しかしながら、当該調査地よりさらに東側の平成17・18年度調査区においては、鋤溝の主軸はふれ幅は大きいものの、通有に東西方向を嗜好しており、平成18年度調査区と当該調査地との間の未調査区域のどこかに地目境が存在したことが想定できる（註2）。また、A調査区で検出した東西溝は、40～45cmほどと他の鋤溝よりはやや幅が広く、南北溝はこれを境に南

側に集中することからも、区画溝の性格をも備えた溝であった可能性がある（図版14参照）。

\* 平成19年度A・B調査区の発掘調査は小浜が、平成20年度第III・IV調査区については第I・II調査区同様に小川がおこった。

(註1) すべての調査区の位置関係については、次項で示す図18を参照されたい。

(註2) 未調査地は、平成18年度調査とともに試掘トレンチを掘削して遺構の存在がみえなかった部分、及び現況の通行路が踏襲される工事対象外部分である。

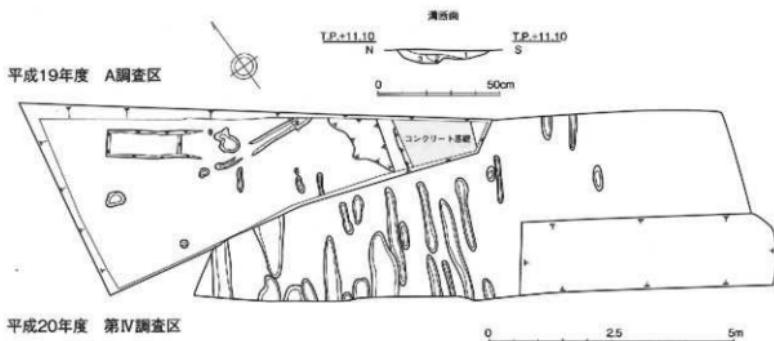


図17 平成20年度第IV調査区・平成19年度A調査区 第5遺構面 遺構平面図

### 第3節 まとめ

千里丘遺跡全体における遺構の概要を把握し易くするために、前項まで述べた4ヶ年にわたる既往の調査区各々の遺構図を現況道路図に嵌め込んだ。遺構はすべて地山直上の第5遺構面(平成17年度調査では第3遺構面)のものである。

平成19年度B調査区及び平成20年度第Ⅲ・Ⅳ調査区を除いては、全体的に東西を指向する溝・鋤溝群が主だった遺構として広がる。しかしながら、各々の調査区にはほぼ一致する群単位で、その角度はわずかにずれる。正東西方向からの振れ幅は、もっとも東に位置する平成17年度調査区において一番大きく、西へいくほどに小さくなる。また、地山の水準は西から東へ緩やかにくだる。

これらのことより、地形の傾斜に伴い一定区間ごとに地目境が存在したことが想定できる。また、図18をみるとその境界は、平成18・19年度調査区との間にほぼ東西方向に走る生活道路と同様の方向であったと考える。これは、現況地図にみえる、都市計画道路千里丘三島線より北側の住宅用地境界の方向とも矛盾しないため、当該地域では中世以降の土地利用区画が大幅に変更されることなく踏襲されていたようである。その一方で、当該道路の南側は区画整理が進み、土地境界も全く異なる様相を示している。

(小川)

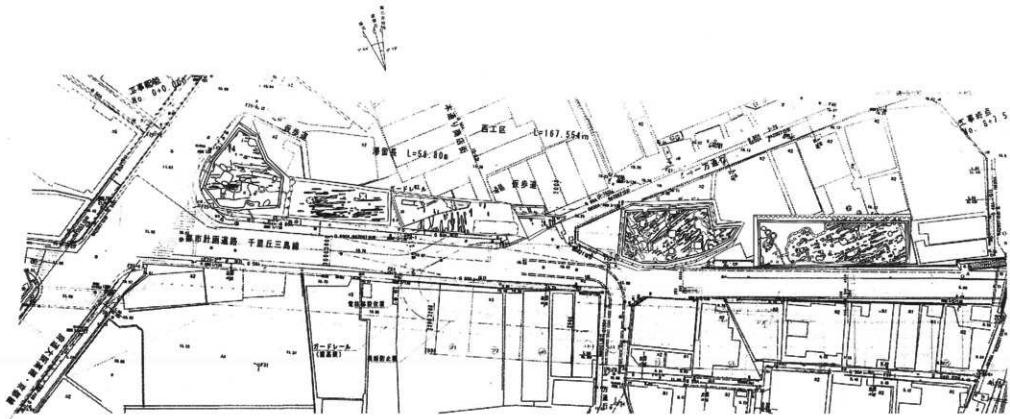


図18 千里丘遺跡の既往の調査 遺構平面図

## 第6章 出土遺物について

平成20年度の調査で出土した遺物は、中世から近世にかけての土器・陶磁器類が多くを占める。土器・瓦器・陶磁器などが主である。

### 土器・瓦器

図19-1・3～9・13～16は土器である。1・3は小皿の口縁部の破片である。1は第II調査区西側の側溝Dから出土した。口縁部下部で屈曲し、ゆるやかに外反しながら端部にいたる。調整痕は摩滅して不明である。口径は8.5cm、残存高は1.2cmを測る。15世紀から16世紀頃のものと考えられる。3は第II調査区西側の側溝Eから出土した。口縁は内湾しながら端部にいたる。内・外面にナデが施され、口径9.0cm、残存高は0.8cmを測る。12世紀から13世紀頃のものと考えられる。

4は小皿の口縁部から底部にかけての破片である。摩滅のため調整は不明であるが、口径9.6cm、底径0.8cm、残存高7.1cmを測る。9世紀から11世紀頃のものと考えられる。

5は皿の口縁部の破片であり、第I調査区第3遺構面の落ち込みから出土した。口縁部は下端でわずかに屈曲し、ゆるやかに内湾しながら端部にいたる。内面にはナデが施され、外面は摩滅のため調整痕が確認できない。口径9.9cm、残存高は1.6cmを測る。

6は杯の口縁部の破片であり、第I調査区第4遺構面から出土した。ゆるやかに内湾しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。内面は摩滅のため調整痕が確認できないが、外面は底部下半に指頭圧痕が残る。口径12.5cm、残存高3.2cmを測る。5・6ともに9世紀から11世紀頃のものと考えられる。

7は椀の底部の破片である可能性が高い。第II調査区第3遺構面の土坑(SX03)から出土し、外面にススが付着している。摩滅のため調整痕は不明で、高台を有する底部は径2.6cm、残存高0.5cmを測る。中世のものと考えられる。

8は椀の高台付底部の破片である。第I調査区第4遺構面から出土し、外面にナデが施されているが、内面は摩滅のため調整痕は不明である。底径8.7cm、残存高1.3cmを測る。断面が三角形を呈する貼り付け高台をもつ。9世紀から11世紀頃のものと考えられる。

9は椀の高台付底部の破片である。第I調査区第4遺構面から出土した。摩滅のため調整痕は不明である。底径7.2cm、残存高1.6cmで、断面が三角形を呈する貼り付け高台を持つ。9世紀から11世紀頃のものと考えられる。

13は壺の破片であり、第I調査区第2遺構面のピット(P23)から出土した。内・外面にナデが施され、外面にはススが付着している。口径は不明であるが、最大径16.6cm、残存高は2.9cmを測る。

14～16は甕で、14は第I調査区第1遺構面から出土した。口縁部外面は肥厚し、稜をもつ。内・外面にナデが施され、口径16.8cm、残存高2.2cmを測る。15は第I調査区第2遺構面下から出土

した。口縁部下端で屈曲し、外面はゆるやかに外反しながら端部にいたる。摩滅のため調整痕はみえないが、口径31.1cm、残存高2.6cmを測る。9世紀から11世紀頃のものと考えられる。16は第Ⅱ調査区第3遺構面から出土した。口縁部下端で屈曲し、ほぼ水平にひろがりながら口縁部にいたる。口径23.5cm、残存高1.5cmを測る。15世紀頃のものと考えられる。

図19-2・10～12は瓦器である。2は小皿の口縁部の破片である。第Ⅱ調査区第3遺構面から出土した。口縁部下端で屈曲し、ゆるやかに外反しながら端部にいたる。口径7.5cm、残存高は1.1cmを測る。13世紀頃のものであると考えられる。

10・11は碗の口縁部の破片である。10は第Ⅰ調査区第2遺構面の溝SD01から出土し、口縁部はゆるやかに内湾しながら丸く収められた端部にいたる。口径8.7cm、残存高1.0cmを測る。11は第Ⅰ調査区第4遺構面から出土した。やや厚めの口縁端部は、内面にわずかに稜をもち、丸く収められる。口径10.2cm、残存高0.9cmを測る。11世紀から12世紀頃のものと考えられる。

12は碗の高台付底部の破片である。第Ⅰ調査区第2遺構面から出土した。内面にはナデが施され、外面は摩滅のため調整痕は不明である。底径2.7cm、残存高0.8cmを測る。断面が台形を呈する貼り付け高台をもつ。13世紀前半頃に比定できる遺物と考えられる。

いずれの瓦器椀類も、摩滅が著しく暗文等を確認できたものはなかった。また、調整痕が確認できたものもわずかである。

17と18は土釜の鋸部の破片である。17は土師質で、第Ⅱ調査区の耕作土中から出土した。鋸部は外側に向かって短く直線的に伸びる。内・外面にナデが施され、外面にはススが付着している。体部最大径27.4cm、残存高3.5cmを測る。18は瓦質で、第Ⅱ調査区第1遺構面から出土した。鋸部は外側に向かって短く直線的に伸びる。内面にヨコハケ、外面にナデが施されている。体部最大径は28.6cm、残存高は4.1cmを測る。ともに13世紀から14世紀頃のものであると考えられる。

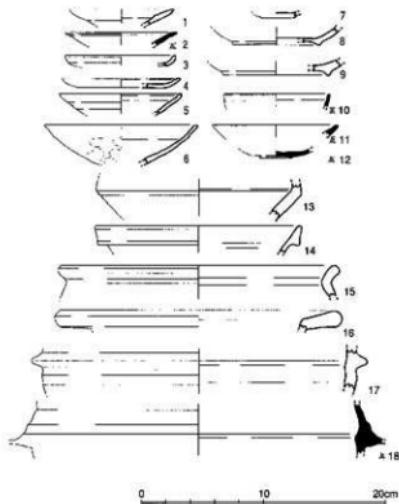


図19 土師器・瓦器

## 須恵器

図20-1～4は須恵器である。1・2は鉢の口縁部の破片である。1は第I調査区第4遺構面から出土した。まっすぐに口縁部端まで伸び、端部先端には面を持つ。内・外面ともに回転ナデが施されている。口径22.3cm、残存高2.6cmを測る。時期は13世紀頃と考えられる。2は第I調査区第2遺構面から出土した。口縁端部は、端部を内側に折り返すことで肥厚する。内・外面に回転ナデが施されている。口径28.4cm、残存高1.5cmを測る。11世紀から12世紀の遺物と考えられる。3は壺か鉢の破片である。第I調査区第1遺構面から出土した。内面には岡上で左下から右上へとタタキ痕が施されるのが確認できたが、外面は摩滅のため調整痕は確認できなかった。4は壺の破片である。第II調査区第3遺構面から出土した。内面には回転ナデと岡上で左上から右下へのタタキ痕、外面には回転ナデとタタキ痕及びハケメの痕跡が確認できた。

3・4は古墳～平安時代のものであると考えられる。

## 陶磁器

図21-1～8・13は磁器である。1～3・5～8は碗で、4は皿の口縁部の破片である。

1は白磁碗の口縁部の破片であり、第I調査区第1遺構面から出土した。ゆるやかに外反する口縁部は、端部でわずかに肥厚する。内・外面に釉薬が施されている。口径8.8cm、残存高2.9cmで、魚と円形のような模様が描かれている。2は白磁碗の口縁部の破片で、第II調査区第1遺構面から出土した。ゆるやかに内湾しながら口縁部にいたる。内・外面ともに釉薬が施されている。口径10.1cm、残存高4.8cmで、奴鳳のような模様が描かれている。

3は口縁部の破片で、第I調査区第1遺構面から出土した。ゆるやかに内湾しながら立ち上がり、口縁端部はわずかに外反し、肥厚する。内・外面ともにナデが施されている。口径10.9cm、残存高2.8cmを測る。4は白磁の皿で、第I調査区第2遺構面から出土した。口縁部は強く外反している。内・外面ともに釉薬が施されている。また、内面の口縁部にはN状のものが並行に2つ、

その下にゆるやかなS状の模様が描かれている。口径14.1cm、残存高1.5cmを測る。

5～8は第I調査区第1遺構面から出土した。5は白磁碗の口縁部から高台付底部にかけての破片で、内・外面には釉薬が施されている。体部はゆるやかに内湾しながら立ち上がり、口縁端部はわずかに内傾する。口径10.4cm、底径5.6cm、残存高2.7cmを測る。断面の形が丸みをもった四角形を呈する高台をもつ。6は白磁碗の口縁部から底部にかけての破片である。大きく内湾しながら口縁部にいたり、内・外面ともに釉薬が施される。

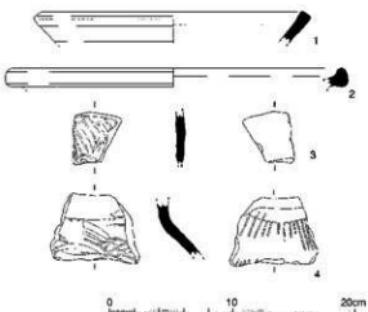


図20 須恵器

口径9.2cm、底径4.1cm、残存高4.8cmを測る。断面の形が丸みをもった四角形を呈する高台をもつ。7は高台付底部の破片で、内・外面ともに釉薬が施されている。底径4.1cm、残存高2.0cmを測り、断面が三角形を呈する高台をもつ。5～7の外面には模様が描かれている。8は白磁碗の高台付底部の破片で、内・外面ともに釉薬が施されている。底径4.4cm、残存高2.8cmを測り、高台部に3本の線が描かれている。断面の形が三角形を呈する貼り付け高台をもつ。

13はすり鉢の口縁部の破片で、第II調査区第3遺構面から出土した。口縁端部は、端部を折り返すか粘土紐を継ぎ足すことにより肥厚している。内・外面ともに釉薬が施され、口径17.8cm、残存高2.0cmを測る。11世紀から12世紀頃のものであると考えられる。

いずれの資料も詳細な時期比定は困難であるが、おそらく中・近世のものであろう。

図21-9～12・14～17は陶器である。9は碗の口縁部の破片で、第I調査区第5遺構面から出土した。ゆるく外反しながら口縁部にいたる。内面にはナデ、外面にはケズリとナデが施され、口径9.8cm、残存高1.7cmを測る。10は碗の口縁部の破片で、第I調査区第2遺構面下から出土した。やや内湾気味に口縁部にいたる。内・外面ともに釉薬が施され、口径11.6cm、残存高1.8cmを測る。11は皿の口縁部の破片で、第I調査区第2遺構面から出土した。口縁部は強く外反して

いる。内・外面ともに釉薬が施され、口径11.9cm、残存高1.8cmを測る。12は碗の口縁部の破片で、第II調査区第1遺構面から出土した。やや内湾気味に口縁部にいたる。内・外面ともに釉薬が施され、口径15.0cm、残存高3.5cmを測る。

14～17は碗の高台付底部の破片である。14は緑釉陶器で、第I調査区第2遺構面下から出土した。内・外面ともに釉薬が施され、底部にロクロの痕がある。底径4.8cm、残存高1.6cmを測り、断面の形が台形を呈す高台をもつ。15は第I調査区第1遺構面から出土した。内・外面ともにナデが施され、底径3.9cm、残存高1.5cmを測る。底部内面のほぼ中心に花が絵付けされている。断面の形が三角形を呈する高台をもつ。16は第I調査区第4遺構面から出土した。内・外面ともに釉薬が施され、底径5.9cm、残存高1.2cmを測る。断面の形が三角形を呈す

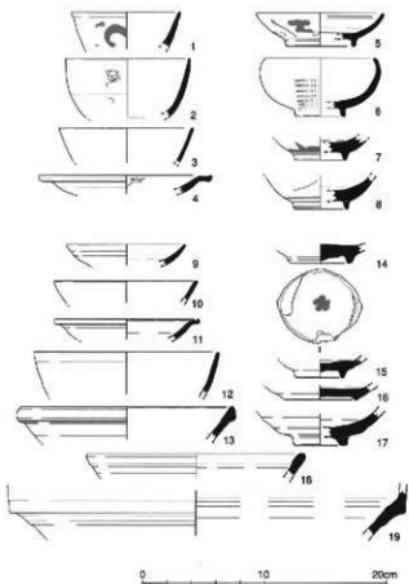


図21 陶磁器

表2 出土土器觀察表

番号	出土地点	器種	種類	時代	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	断面			色調			地質	地成	文書記載	
								外面	内面	底部・天井部	外面	内面	底面				
1 111	1区2段 N1	土器	盤	中世	5.5	—	1.2	不明	不明	—	淡黃褐色	灰白色	灰白色	雷	良好	9 3	
2 093	2区3段 N1	土器	盤	中世	7.5	—	1.1	不明	不明	—	淡褐色 + 深褐色	灰白色	灰白色	雷	良好	37 —	
3 112	2区3段 N1	土器	皿	中世	9.0	—	0.8	ナゲ	ナゲ	—	褐色	褐色	褐色	雷	良好	3 —	
4 152	2区3段 N1	土器	皿	中世	6.0	0.8	7.1	不明	不明	—	褐色	浅褐色	明褐色	雷	良好	30 2	
5 075	1区2段 N1	土器	皿	中世	9.9	—	0.1	不明	ナゲ	—	褐色	褐色	褐色	雷	不良	31 —	
6 093	1区4段 N1	土器	皿	中世	12.5	—	0.2	圓錐形 ナゲ	不明	—	浅褐色	灰白色	灰白色	雷	良好	29 1	
7 144	2区3段 N1	土器	皿	中世	—	0.6	0.9	不明	不明	高台	黑褐色	浅褐色	浅褐色	雷	不良	39 —	
8 093	1区4段 N1	土器	皿	中世	—	0.7	0.9	ナゲ	不明	貼付け高台	浅褐色	褐色	褐色	雷	不良	36 4	
9 077	1区3段 N1	土器	皿	平安	—	0.7	1.0	不明	不明	—	明黄色	浅褐色	浅褐色	雷	良好	26 5	
10 070	1区2段 N1	土器	皿	平安	8.0	—	0.1	不明	不明	—	黑褐色	灰白色	灰白色	雷	良好	2 6	
11 092	1区3段 N1	土器	皿	中世	10.2	—	0.9	不明	不明	—	褐色	褐色	褐色	雷	良好	13 7	
12 101	1区3段 N1	土器	皿	中世	—	2.7	0.8	ナゲ	不明	貼付け高台	灰白色	灰白色	灰白色	雷	良好	36 8	
13 062	1区3段 N1	土器	皿	中世	—	2.9	0.9	ナゲ	—	赤褐色	橙色	橙色	橙色	雷	良好	23 11	
14 023	1区1段 N1	土器	皿	中世	16.8	—	0.2	ナゲ	ナゲ	—	明黄色	明黄色	明黄色	雷	良好	24 12	
15 061	1区2段 N1	土器	皿	平安	0.1	—	0.2	不明	不明	—	灰褐色	浅灰色	浅灰色	雷	良好	32 13	
16 152	1区3段 N1	土器	皿	中世	23.5	—	1.5	不明	不明	—	褐色	浅褐色	浅褐色	雷	良好	35 15	
17 122	1区1段 N1	土器	皿	中世	—	—	0.5	ナゲ	ナゲ	—	(黒褐色)	浅褐色	浅褐色	雷	良好	27 14	
18 118	1区1段 N1	土器	皿	中世	—	—	0.1	ヨコハケ	ナゲ	—	暗灰色	灰色	灰色	雷	良好	41 9	
1 092	1区2段 N1	土器	鉢	平安	—	2.0	2.0	圓錐ナゲ	圓錐ナゲ	—	青灰色	青灰色	青灰色	雷	良好	26 17	
2 094	1区2段 N1	土器	鉢	中世	25.4	—	1.9	圓錐ナゲ	圓錐ナゲ	—	灰色	灰白色	灰白色	雷	良好	33 19	
3 030	1区1段 N1	土器	鉢	平安	—	—	4.2	不明	ナタキ	—	紫灰色	青灰色	紫灰色	雷	良好	40 20	
4 147	2区3段 N1	土器	鉢	平安	—	—	5.4	圓錐ナゲ ナタキ	圓錐ナゲ ナタキ	—	紫灰色	青灰色	紫灰色	雷	良好	42 18	
1 022	1区1段 N1	土器	鉢	平安	8.0	—	0.9	地輪	地輪	—	灰白色	灰白色	灰白色	雷	良好	7 21	
2 128	2区1段 N1	土器	鉢	元世	10.1	—	4.2	朱色	施釉	—	灰白色	灰白色	灰白色	雷	良好	5 22	
3 015	1区2段 N1	土器	鉢	中世	0.9	—	0.2	ナゲ	ナゲ	—	灰色	灰色	灰色	雷	良好	4 —	
4 056	1区1段 N1	土器	皿	中世	—	—	1.5	施釉	施釉	—	明褐色	明褐色	明褐色	雷	良好	11 30	
5 023	1区1段 N1	土器	皿	中世	0.4	—	0.6	施釉	施釉	—	明褐色	明褐色	明褐色	雷	良好	16 23	
6 036	1区2段 N1	土器	皿	中世	0.2	—	4.1	4.8	朱色	施釉	明褐色	明褐色	明褐色	雷	良好	12 27	
7 023	1区1段 N1	土器	皿	中世	—	—	4.1	0.8	施釉	施釉	朱色	朱色	朱色	雷	良好	17 25	
8 030	1区1段 N1	土器	皿	中世	—	—	4.4	2.8	施釉	施釉	貼付け山台	褐色	褐色	褐色	雷	良好	16 26
9 097	1区1段 N1	土器	鉢	中世	0.9	—	1.7	ナゲ、ケズリ	ナゲ	—	灰白色	灰白色	灰白色	雷	良好	1 29	
10 043	2区2段 N1	土器	鉢	中世	1.1	—	0.8	施釉	施釉	—	灰黄色	灰黄色	灰黄色	雷	良好	8 —	
11 054	1区2段 N1	土器	皿	中世	1.9	—	0.8	施釉	施釉	—	灰色	灰色	灰色	雷	良好	10 16	
12 128	2区1段 N1	土器	鉢	元世	15.0	—	0.9	施釉	施釉	—	浅黄色	浅黄色	浅黄色	雷	良好	6 —	
13 135	2区3段 N1	土器	皿	中世	17.8	—	0.7	施釉	施釉	—	灰黄色	灰黄色	灰黄色	雷	良好	14 28	
14 095	1区2段 N1	土器	皿	元世	—	4.8	0.6	施釉	施釉	高台	オリーブ色 + 青色	オリーブ色 + 青色	灰白色	雷	良好	20 32	
15 015	1区1段 N1	土器	皿	元世	—	3.9	1.1	ナゲ	ナゲ	—	オリーブ色	灰白色	灰白色	雷	良好	15 24	
16 066	2区3段 N1	土器	皿	中世	—	5.9	0.2	施釉	施釉	高台、施釉	オリーブ色 + 地輪	灰白色	灰白色	雷	良好	21 33	
17 055	2区2段 N1	土器	皿	中世	—	4.3	0.9	施釉	ナゲ、ケズリ	貼付け山台	灰褐色	オリーブ色	灰褐色	雷	良好	19 —	
18 126	2区2段 N1	土器	皿	中世	—	0.9	—	ナゲ	ナゲ	—	青色	青色	青色	雷	良好	22 —	
19 147	2区3段 N1	土器	皿	中世	—	—	0.9	ナゲ	ナゲ	—	赤褐色	青色	青色	雷	良好	34 31	

注( ) 内数値は瓦転覆元後の値及び西面

る高台をもつ。17は第I調査区第2遺構面から出土した。外面には釉薬、内面にはケズリとナデが施されている。底径4.3cm、残存高2.6cmを測り、断面の形が台形を呈する高台をもつ。

9～12、14～17の資料は詳細な時期比定は困難であるが、おそらく中・近世のものであろう。18・19は備前焼のすり鉢の口縁部の破片である。18は第I調査区第2遺構面から出土した。口縁部は丸くおさめられている。内・外面ともにナデが施されている。口径12.6cm、残存高1.9cmを測る。19は第2調査区第3遺構面から出土した。内・外面ともにナデが施されている。残存高3.6cmを測るが口径は不明である。18・19ともに時期はおよそ15世紀から17世紀の頃のものと考えられる。

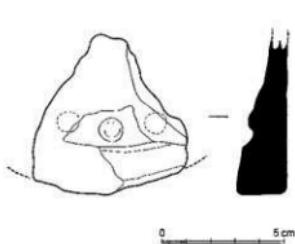


図22 瓦

### 瓦

図22-1は中世の軒丸瓦である。第I調査区第1遺構面から出土した。三巴文をもつと思われるが、周縁から珠文部分にかけてしか残存しない。珠文が1個見られ、復元径は14.0cmを測る。

このように今回の調査では、中世～近世以降の遺物が中心となって出土した。また、遺構に伴うものが少なく、遺構の年代を決定づけるまでには至らなかった。  
(坂本 聰美)

## 第7章 両極打法を用いたサヌカイト剝片の特性

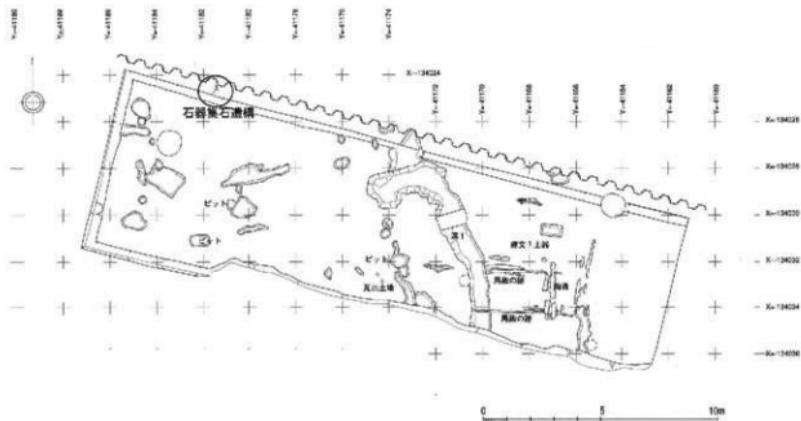
はじめに

千里丘遺跡では、平成17年度から都市計画道路千里丘三島線沿いを、JR千里丘駅のすぐ側から東へ向けて順次4ヶ年にわたりて調査をおこなってきた。その初年度次に、調査区の北東隅近くの北壁地層観察用に残した畦内において、サヌカイトの石器剝片の集石を検出した（図1）。170点を超える剝片がびったりと重なり密着した状態であった。ここでは、そのサヌカイト石器集石遺構及び石器剝片について若干の考察を述べることにする。

### 1. 検出状況について

平成17年度調査成果の概要については既刊の概要・報告書（註1）を参照されたいが、ここでは石器集石を検出した層序と遺構面について簡単に振り返りたい。

千里丘遺跡では最も遺構が集中するのは12～16世紀頃の中世であり、鶴溝をはじめとする耕作の痕跡が中心である。しかしながら、この石器が出土したのはさらに下層の地山直上の最終遺構面においてである。当該調査において、この遺構面では、古代の掘立柱建物やピット、耕作の痕跡などを検出している。また、同遺構面の主な出土遺物は古代の土師器・須恵器の小片であるが、石器の出土地とはかなり離れているものの同調査区の他の出土土器とは全く様相を異にし、縄文土器の可能性も考えられるような著しく摩耗した小土器片も出土した（註2）。

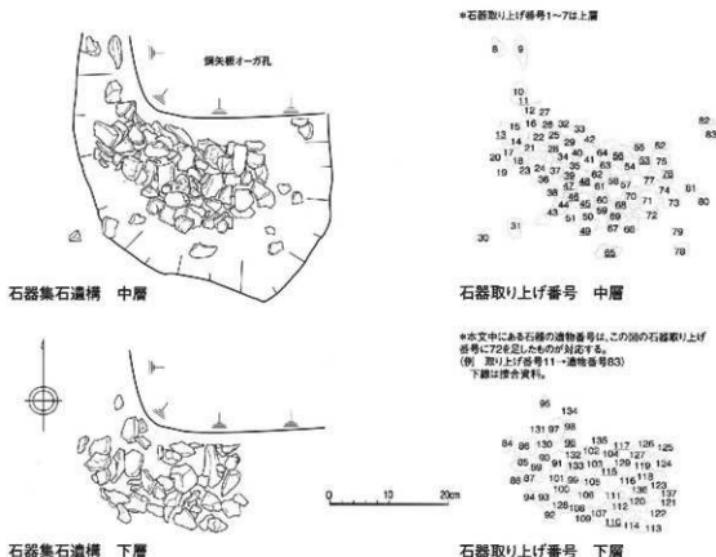


そのため、古代よりいっそう古い時代の遺構・遺物が存在する可能性はここからも示唆される。

この石器剝片は平成17年度調査区で7層と呼ぶ地層の上部において出土した。その上面である第3遺構面において、16点を検出していた。それらを取り上げ後、明瞭な掘り込みではないが、ピット状にやや窪地となった中にレンズ状に堆積した状態で出土した(図24)。T.P.+8.6m付近において、ねばねばして赤みを帯びた黄褐色粘土の上層で検出し、堆積は最大径が約25cm、中心部の厚さは約9.3cmであった。チップ状の碎片をのぞいて、主だったもので170点以上を数える。

数メートルを隔てて西に隣接する平成18年度調査区内においても、同様の石器片が出土する可能性を想定し、対応層では注意深く検出作業をおこなったが、ここでは1点の剝片も出土することがなかった。

出土石器の整理・検討をすすめるにあたって、石器の出土した層序についてより詳しいデータの必要性を感じ、その再確認をおこなうために平成18年度調査時に、対応層から土壤サンプルを採取し、詳細な観察をおこなった(註3)。7層の直上に堆積する6層に相当するサンプルからは、比較的多量の褐色火山ガラスがHタイプ・Cタイプ(註4)ともに存在し、他の層から採取したサンプルと比べると火山ガラスの含有量が圧倒的に多かった。褐色ガラスは鬼界アカホヤ火山灰(約7,300年B.P.)に特徴的な含有物である。7層においては、褐色ガラスとともに角閃石の単結晶が多く観察できた。これは、近畿地方で確認される火山灰のなかでは阪手火山灰(約1万数千



年B.P.)に特徴的な鉱物である。この結果、各々6層にはアカホヤ火山灰、7層には阪手火山灰が含まれている可能性がある。

しかしながら、どちらもいわゆる火山灰層として認定できるほど多量の火山碎屑物を含んでいたわけでも、排他的に一種の火山灰のみが存在したわけでもない。そして、7層のサンプルは残念ながら石器集石のまさに検出地から採取したものではなく、対応層から採取したものである。このため、これを根拠に6・7層及び石器集石の絶対年代を断定するにはいさか根拠が弱いため、ここでは、各々の火山灰が堆積の中に含まれることを考慮し、平成18年度調査の報告においても6・7層は各々当該年代に堆積した可能性があり、石器剥片出土層はアカホヤ火山灰の降灰以前に堆積した可能性がある、というにとどめておく。

アカホヤ火山灰の降灰した7,300年前は縄文時代の早期にあたる。ここでは明確に時期のわかる遺物を共伴しておらず、通有の縄文時代の時期区分に当てはめることはできないが、後にとりあげる他遺跡の遺構との類例比較の目安として掲げておく。少なくとも、このような検出状況により、石器集石は千里丘遺跡において通常みられる遺構・遺物と比較して、際だって古い時期に形成されたものである可能性が示された。そしてそれは、揖津市域やその周辺の遺跡ではこれまでみられない時代及び類の遺構であり、この地域における遺跡形成の起源をたどる意味でも非常に重要なものであることがわかる。

## 2. 千里丘遺跡出土サヌカイト石器剥片の概要

集石遺構内の剥片は、小さいものを合わせると200点を超える。主だったものの一部を図化したものと、各々の剥片を計測したデータ一覧を掲載する。ここでは、2cm以下の碎片・破片60点あまりをのぞいた178点を考察の対象とする。

肉眼観察から、出土した石器はすべてサヌカイト製であるが、香川県金山産のものはみあたらず、ほぼすべてが奈良県二上山産のものであると考えられる。一般的に二上山産のものの方がきめ細かく、金山産のものは全体的に白っぽく、白く粗い粒子も含まれ、フィッシャーの周りにもざらついた白っぽいしわが走るというが、本出土遺物にそのような状態はない(註5)。また、すべての剥片の剥離面が白く風化し、剥離面と自然面との色合いにはほんのり差がないほど摩耗している。

この一群の剥片の組成については詳細なデータを後に提示するが、ほぼ9割以上が両極打法を用いて割られたものである。両極打法とは、比較的扁平な台石に石核や原石をのせ、上からハンマーで打ち碎く挟み打ちの手法で、上から打ち下ろす力と、下方で台石とぶつかる力によって、打点が上下2点に生じる。そのため、剥片の上下ともに打ち碎く痕跡が残るのが特徴である。この技法を用いて剥離されたものは、「楔形石器」・「ビエス・エスキュー」と呼ばれる(註6)。岡村道雄氏はこの両極打法を用いて加工された石器に顕著な諸特徴を指摘する(註7)。例えば、上方からの打撃による力の伝達と下方の台石から反作用によって伝わる力とが、縁辺部に階段状の剥離痕を残したり、内部で食い違ったところで割れを生じさせ剪断面を形成したりするもので

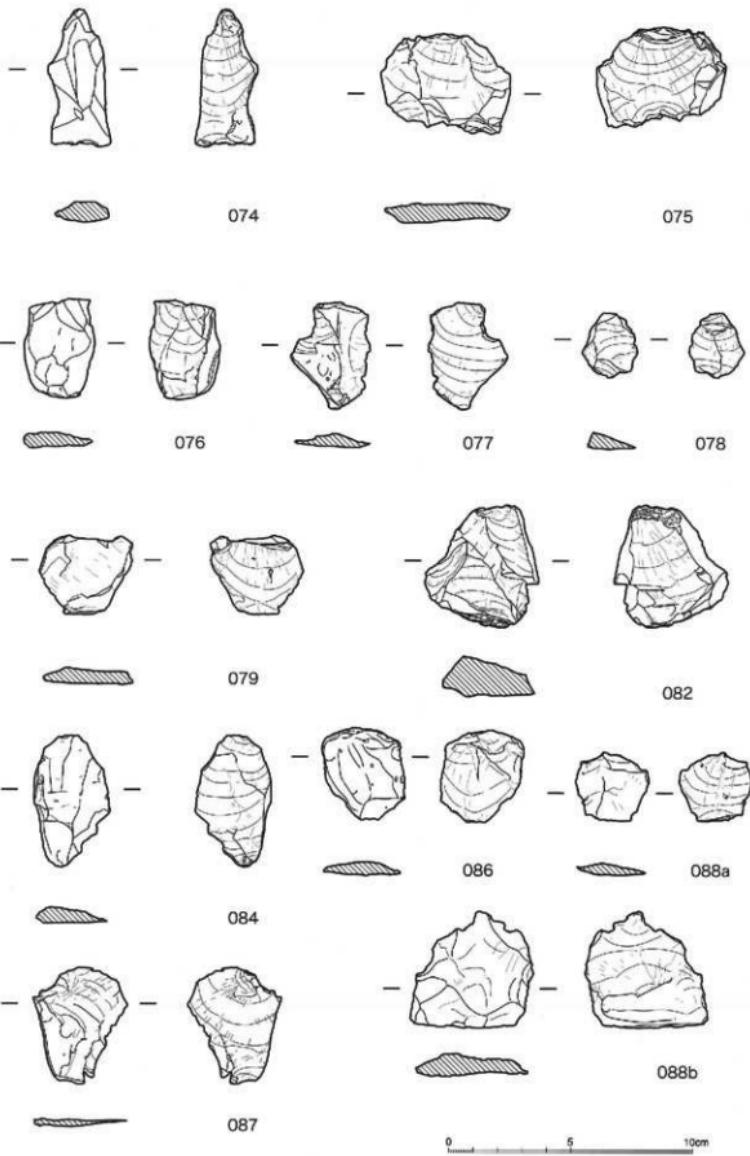


图25 出土石器剥片（1）

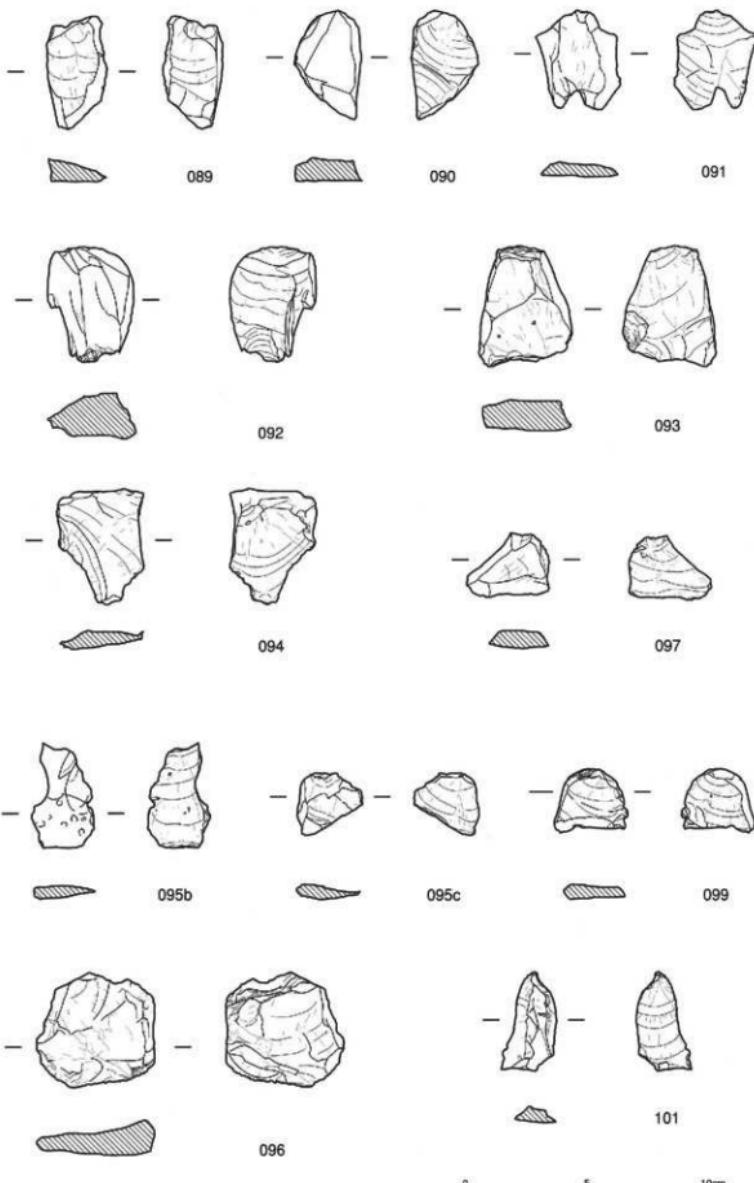


図26 出土石器剥片（2）

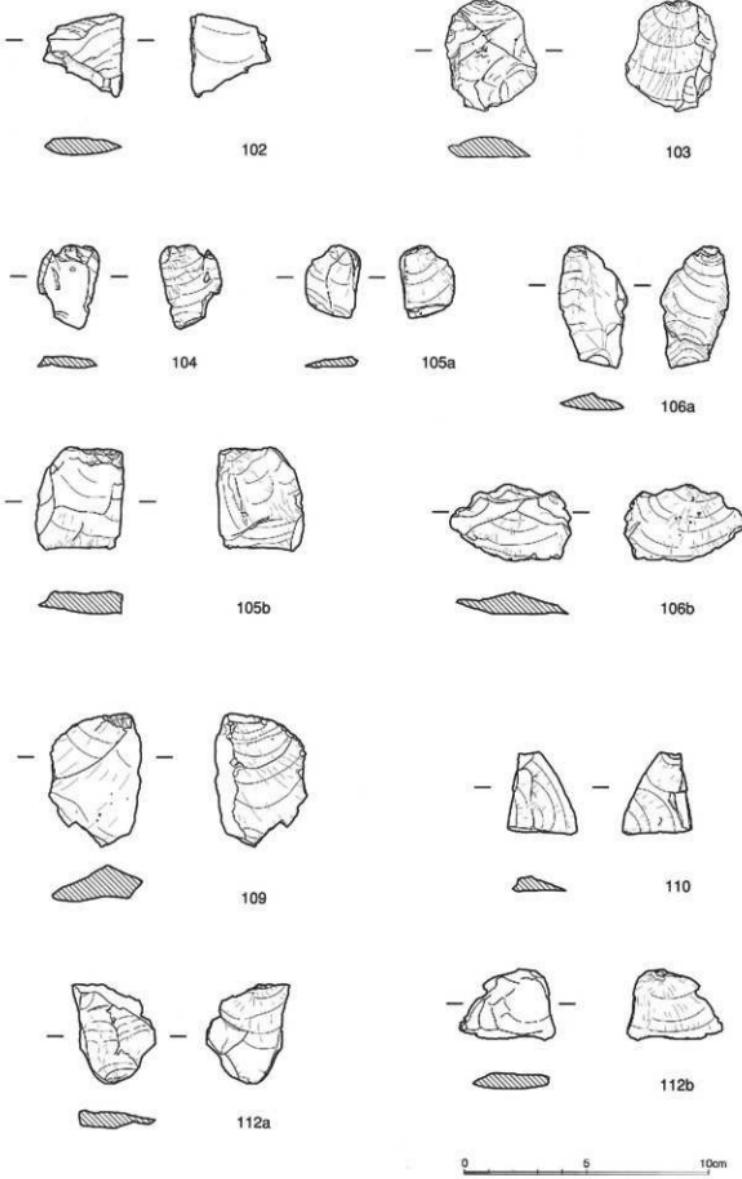


図27 出土石器剥片（3）

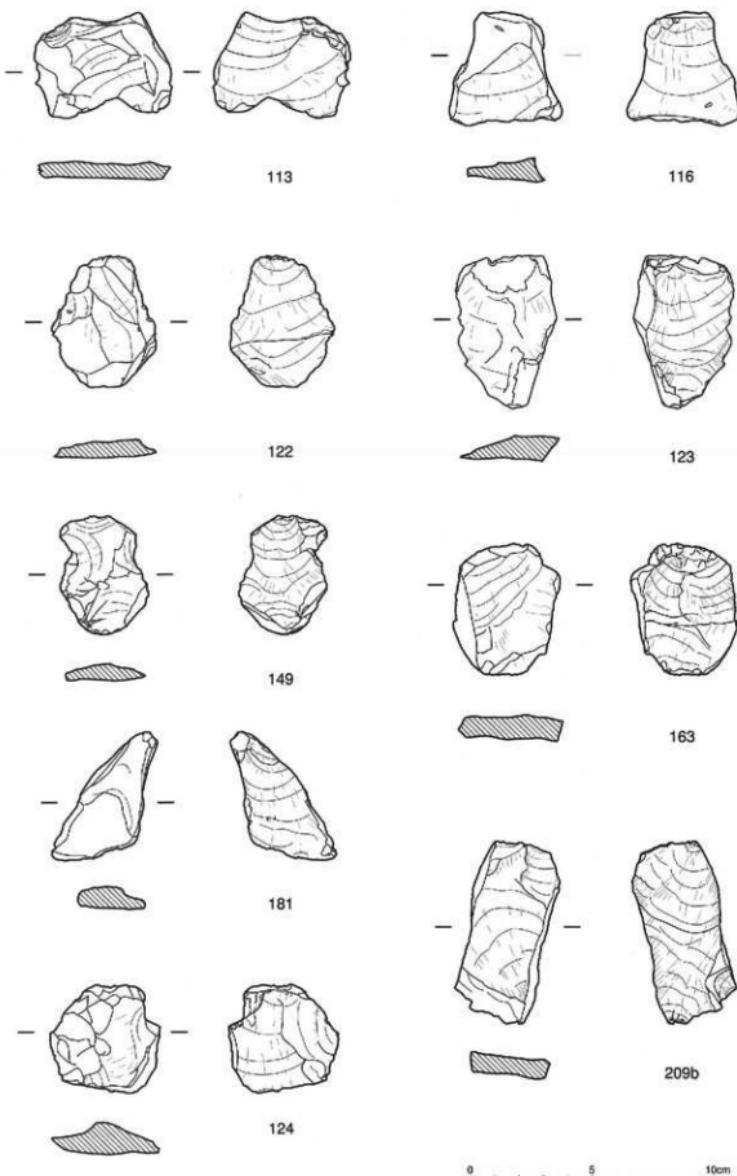


図28 出土石器剥片 (4)

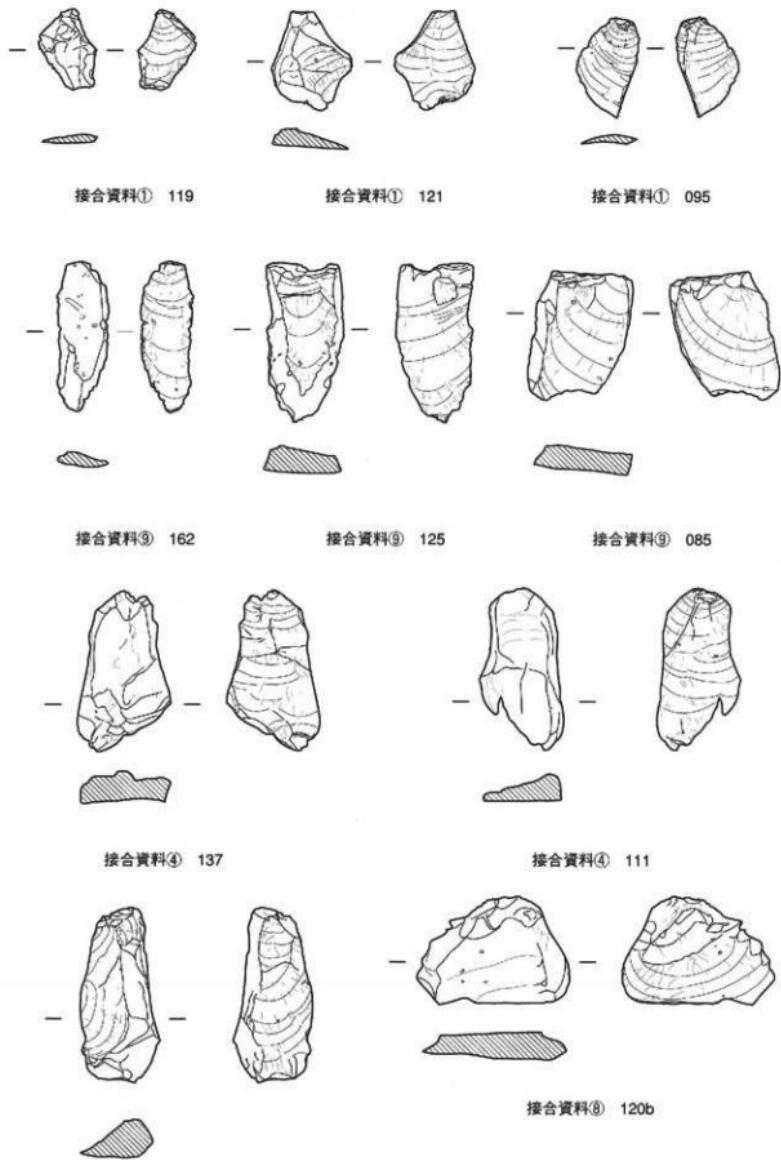


图29 出土石器剥片 接合資料

0 5 10cm

ある。これらはともに、千里丘遺跡例にも多く観察できるところである。その他にも、平面形が四辺形を呈するが多く、剥離面の湾曲が少ない、バルブが平坦で散漫であることなどがあげられる。

一方出土状況は、隙間も、間に土が入ることもなく密着した状態であったが、接合資料は少なく、9例のみであった。それらも、3点が接合するものが4例、残りの5例は2点の接合で、合計24点のみである（註8）。ただ自然面を残すものや、剥離面が著しく風化したバティナをもつものが多く、出土した剥片は原縁からそう繰り返し加工された状態ではないようにみえる。次項でその組成の詳細を述べる。

表3 出土石器の分類

記号	石器タイプ	分類	数値	完成品 25	割合
A	クサビ形未済	底さ2.0cm以上4cm未溝	2	1.6	
B	クサビ形未済	底2.0cm以上5cm未溝	13	7.3	
C	クサビ形未済	底さ2.0cm以上6cm未溝	4	2.2	
D	クサビ形未済	底さ2.0cm以上8.5cm	15	8.4	19.7
E	クサビ形未済	底2.0cm以上10.5cm未溝	30	16.9	
F	クサビ形未済	底さ2.0cm以上12.5cm未溝	41	23.0	
G	クサビ形未済	底さ2.0cm以上13.5cm未溝	23	12.0	
H	クサビ形未済	底2.0cm以上	20	11.4	11.2 9.6
I	クサビ形未済	底さ2.0cm以上3.4cm未溝	4	2.2	
J	クサビ形未済	底さ2.0cm以上3.5cm未溝	7	3.9	
K	クサビ形未済	底さ2.0cm以上	4	1.6	2.2 0.6 24.8 - 30.2
L	未完成	底さ2.0cm未溝	5	2.6	
M	未完成	底さ2.0cm以上3.5cm未溝	5	2.6	
N	未完成	底さ2.0cm以上	3	1.6	7.2 未完成 未完成 - 7.2%
クサビ形剥片	完形成		1	0.6	0.6
クサビ形剥片	未形成		1	0.6	0.6
	合計		約66		分析対象

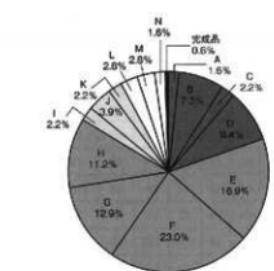


図30 出土石器のタイプ別組成

### 3. 石器の組成

集石遺構内のサスカイト石器剥片のデータをここにあらわす。腹面の剥離時に打点が生じる上下を縦方向として長さ、それに直交する方向の最大値を幅と仮定して剥片の法量を計測したものがこれらの一覧である（表4～6）。両刃とともに2cm以下の碎片・破片約60点を除く178点を分析対象とし、その計測データを元に分類をしたものが組成の円グラフとなる（図30）。

また、これまですべてを総称して剥片と呼称してきたが、ここでは特徴に基づき分類をおこなったため、その定義を示す。まず、剥片がはぎとられた残りの石核にあたるものをクサビ形本体、はがされた側をクサビ形剥片とする。そしてはがされた側でも分厚くまだ剥離調整が可能な分割片をクサビ形削片と呼称する。これらのクサビ形石器に加えて、両極打法が用いられていない通常の剥片の4つに大きく分類する。また、各々のタイプをサイズによってさらに細分し、タイプA～Nとして一覧に示した（表3）。表4～6の計測値一覧にある石器タイプの項目のアルファベット記号は、この分類に基づくものである。

また、これらの未完成品に加えて、使用可能な状態にある完成した石器の可能性があるものが1点存在した。しかしながら、この石器は定型的なものではなく偶發的であり、2次的な「加工

表4 出土石器剝片計測値一覧 (1)

番号	登録番号	石器 種類 ペル	長さ (cm)	幅 (cm)	長幅比 長さ/幅平均	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
1	073	C	5.6	4.6	1.2	3.1	0.9	27.3
2	074	H	5.6	2.2	2.5	3.9	1.0	137 図25
3	075	H	5.3	4.0	1.3	4.65	0.8	18.3 図25
4	076	J	4.3	2.4	1.8	3.35	0.8	10.2 図25
5	077	G	4.4	3.1	1.4	3.75	0.4	7.0 図25
6	078	E	2.2	2.5	0.9	2.35	0.6	3.2 図25
7	079	F	3.9	3.2	1.2	3.35	0.5	8.3 図25
8	080	G	4.8	3.6	1.3	4.2	0.9	11.8
9	081	D	6.5	5.9	1.2	6.35	1.8	72.4
10	082	C	5.1	4.4	1.2	4.75	1.5	37.6
11	083	D	6.0	3.3	1.8	4.65	0.9	20.3 條合資料2
12	084	H	5.4	3.1	1.7	4.25	0.6	11.3 図25
13	085	D	5.2	3.9	1.3	4.35	1.0	26.6 條合資料9
14	086	F	3.4	3.9	0.9	3.65	0.4	6.5 図25
15	087	G	4.6	3.4	1.4	4.0	0.5	7.0 図25
16	088_a	G	4.5	4.7	1.0	4.6	0.8	19.9 図25
17	089	J	4.0	2.8	1.4	3.1	0.9	12.1 図26
18	090	J	4.3	2.8	1.5	3.55	1.0	13.3 図26
19	091	F	3.7	3.9	0.9	3.8	0.6	8.1 図26
20	092	B	4.5	3.6	1.2	4.05	1.9	31.0 図26
21	093	B	4.9	3.8	1.3	4.35	1.1	24.7 図26
22	094	G	4.6	3.5	1.3	4.05	0.6	11.2 図26
23	095_a	G	4.0	2.6	1.5	3.3	0.6	5.5 條合資料1
24	095_b	F	3.8	2.6	1.5	3.2	0.3	2.8 図26
25	096	B	4.9	4.7	1.9	4.8	1.2	30.8 図26
26	097	F	3.5	2.6	1.3	3.05	0.7	5.8 図26
27	098	E	2.7	2.2	1.2	2.45	0.4	3.0
28	099	F	3.2	2.9	1.1	3.05	0.6	5.0 国26
29	100	E	2.1	1.3	1.6	1.7	0.3	1.0
30	101	F	3.7	2.1	1.8	2.9	0.5	3.8 国26
31	102	L	3.1	3.2	1.0	3.15	0.8	8.2 国27
32	103	G	4.6	3.5	1.3	4.05	0.7	12.8 国27
33	104	F	3.2	2.1	1.3	2.8	0.4	4.1 国27
34	105_b	G	4.9	3.5	1.4	4.2	0.7	16.6 国27
35	106_a	H	5.2	2.7	1.9	3.95	0.7	8.4 国27
36	106_b	H	5.0	3.1	1.6	4.05	0.8	10.5 国27
37	108	E	2.5	3.0	0.8	2.75	0.3	2.7
38	109	K	5.2	3.9	1.3	4.35	1.3	24.5 国27
39	110	F	3.6	2.7	1.3	3.15	0.5	5.3 国27
40	111	D	6.7	3.3	2.0	5.00	1.1	26.0 條合資料4

番号	登録番号	石器 種類 ペル	長さ (cm)	幅 (cm)	長幅比 長さ/幅平均	厚み (cm)	重量 (g)	備考
41	112_a	G	4.1	3.0	1.4	3.35	0.7	19.8 国27
42	112_b	G	4.1	3.1	1.3	3.6	0.5	6.1 国27
43	113	H	5.3	2.8	1.4	4.55	0.8	23.0 国28
44	114	D	7.0	2.3	3.0	4.65	1.1	24.1
45	115	G	4.4	2.8	1.6	3.6	1.0	14.3
46	116	N	5.2	5.3	1.0	5.25	1.2	218.0 国28
47	117	C	5.2	4.7	1.1	4.95	1.7	34.0 接合資料3
48	119	F	3.4	2.4	1.4	2.9	0.4	2.8 接合資料1
49	120_a	D	5.6	4.2	1.3	4.9	1.0	33.2 接合資料5
50	120_b	G	4.3	2.7	1.6	3.5	0.6	8.9 接合資料8
51	121	F	3.9	3.3	1.2	3.6	0.7	8.7 接合資料1
52	122	H	5.4	4.3	1.3	4.85	0.7	15.9 国28
53	123	H	6.3	4.9	1.6	5.15	1.1	29.9 国28
54	124	B	4.6	4.3	1.1	4.45	1.3	24.6 国28
55	125	D	6.9	3.3	2.1	5.1	1.1	27.1 接合資料9
56	126	B	4.2	4.0	1.1	4.1	1.9	27.4
57	127	A	3.8	2.1	1.8	2.95	0.5	5.4
58	128	D	7.2	3.8	1.9	5.5	1.5	39.3 接合資料6
59	129	H	5.6	3.6	1.6	4.6	1.2	25.5
60	130	F	3.9	2.9	1.3	3.4	0.4	4.6
61	131	H	5.9	4.2	1.4	5.05	1.0	23.2
62	132	I	3.4	2.5	1.4	2.95	1.0	10.5
63	133	H	5.5	3.6	1.5	4.55	0.8	14.8
64	134	F	3.7	3.2	1.2	3.45	0.7	7.8
65	135	F	3.5	2.9	1.2	3.2	0.4	4.2
66	136	F	3.2	3.1	1.0	3.15	0.4	3.1
67	137	D	6.6	3.7	1.8	5.15	1.3	31.8 接合資料4
68	138	E	2.5	2.4	1.0	2.45	0.4	4.3
69	139	石器	4.6	2.7	1.7	3.65	0.9	14.8
70	140	M	4.1	3.4	1.2	3.75	0.8	15.0 完成品
71	141	E	2.0	1.6	1.3	1.8	0.3	0.7
72	141	E	2.4	1.9	1.3	2.15	0.2	1.4
73	142	F	3.7	2.6	1.4	3.15	0.7	7.4
74	143	G	4.6	3.2	1.4	3.9	0.8	17.4
75	144	G	4.9	2.3	2.1	3.6	0.6	8.1
76	145	L	3.5	2.8	1.3	3.15	0.7	5.5
77	146	I	3.5	3.4	1.0	3.45	0.8	11.8
78	147	G	4.7	4.9	1.2	4.35	0.6	12.1
79	148	D	7.1	3.0	2.4	3.05	1.3	29.3 接合資料8
80	149	B	4.9	3.4	1.4	4.15	0.8	15.0 国28

表5 出土石器剥片計測値一覧(2)

番号	器物 番号	石器 タイプ	長さ (cm)	幅 (cm)	高さ 横幅比	長さ 横幅平均	厚み (cm)	重量 (g)	備考
81	130	F	3.7	3.4	1.1	3.56	1.2	154	
82	131	E	2.7	1.6	1.7	2.15	0.2	10	
83	132	F	3.5	2.9	1.2	3.2	0.5	54	
84	133	F	3.7	3.1	1.2	3.4	0.5	61	
85	134	E	2.6	2.2	1.2	2.4	0.5	22	
86	134 b	E	2.7	2.7	1.0	2.7	0.7	31	
87	135	B	4.2	3.9	1.1	4.05	1.2	264	
88	136	G	4.9	3.2	1.5	4.05	0.5	59	
89	137	H	5.8	3.9	1.5	4.95	0.7	139	
90	138	H	5.9	4.3	1.4	5.1	1.3	318	
91	139	L	3.7	3.3	1.1	3.5	0.7	65	
92	140	E	2.7	2.0	1.4	2.35	0.2	14	
93	141	J	4.7	4.5	1.0	4.6	1.5	217	
94	142	D	6.2	2.2	2.8	4.2	0.5	77	複合資料9
95	143	C	5.3	3.9	1.4	4.6	1.4	351	同28
96	144	G	4.2	2.6	1.6	3.1	0.6	48	
97	145	H	6.2	3.3	1.9	4.75	0.6	100	
98	146	H	5.1	2.3	2.3	3.85	0.7	82	
99	147	F	3.6	1.9	1.9	2.75	0.4	28	
100	148 a	F	3.3	3.9	0.8	3.6	1.0	100	
101	148 b	F	3.7	2.6	1.4	3.15	0.3	25	
102	149	D	6.6	4.6	1.4	5.6	1.2	373	
103	150	B	4.5	4.7	1.0	4.65	1.3	287	
104	151	F	3.8	3.3	1.2	3.56	0.8	78	
105	152	E	2.4	2.2	1.1	2.3	0.7	38	
106	153	F	3.6	3.7	1.0	3.65	0.8	83	
107	154	E	2.4	2.4	1.0	2.4	0.4	26	
108	155	B	4.7	3.5	2.0	4.1	1.0	169	
109	156	G	4.8	2.2	2.2	3.5	0.8	99	
110	157	F	3.8	2.8	1.4	3.3	0.5	42	
111	158	F	3.8	2.9	1.3	3.35	0.9	77	
112	159	F	3.7	3.1	1.2	3.4	0.3	25	
113	160	M	4.5	2.5	1.8	3.5	0.8	72	
114	161	H	6.3	2.8	2.3	4.55	0.9	173	複合資料6
115	162	D	7.2	4.1	1.8	5.65	1.4	396	複合資料6
116	163	A	3.9	3.3	1.1	3.7	0.9	148	
117	164	H	5.4	3.5	1.5	4.45	0.9	137	
118	165	G	4.1	3.2	1.3	3.65	1.0	115	
119	166	G	4.8	3.5	1.4	4.15	0.6	115	
120	167	D	8.0	5.2	1.5	6.6	1.5	675	複合資料7

番号	器物 番号	石器 タイプ	長さ (cm)	幅 (cm)	高さ 横幅比	長さ 横幅平均	厚み (cm)	重量 (g)	備考
121	168	B	4.1	3.2	1.3	3.65	1.2	120	
122	169	L	3.1	2.1	1.5	2.6	0.6	42	複合資料7
123	170	E	2.4	2.6	0.9	2.5	0.4	27	
124	172	G	4.2	4.9	0.9	4.55	0.7	183	
125	173	F	3.6	2.7	1.3	3.15	0.3	29	
126	174	B	4.7	4.9	1.7	4.8	1.2	295	
127	175	H	3.5	2.6	2.1	4.05	0.7	120	
128	176	E	2.9	2.9	1.0	2.9	0.5	44	
129	177	M	4.7	2.7	1.7	3.7	0.8	75	
130	179	D	8.0	3.4	2.4	5.7	1.5	560	
131	180	N	5.5	4.2	1.3	4.85	0.7	180	
132	181	N	5.8	5.9	1.0	5.85	1.5	365	
133	182	F	3.1	2.6	1.2	2.85	0.5	44	
134	183	B	4.9	2.7	1.9	3.8	1.0	144	
135	184 a	G	4.5	3.8	1.2	4.15	0.9	162	
136	184 b	G	4.1	3.3	1.2	3.7	0.6	46	
137	185	A	3.7	3.6	1.0	3.65	0.9	148	
138	186	F	3.5	2.3	1.5	2.9	0.6	46	
139	187	F	3.9	2.6	1.5	3.25	0.5	38	
140	188	H	5.2	4.1	1.3	4.65	0.9	130	
141	189 b	F	6.9	3.2	2.2	5.05	1.0	332	同28
142	192	F	3.4	3.8	0.9	3.6	0.8	113	
143	193	F	3.5	2.5	1.4	3.0	0.6	50	
144	194	F	3.5	2.5	1.4	3.05	0.7	61	
145	195	F	3.1	2.1	1.3	2.75	0.5	42	
146	196	F	3.4	2.2	1.5	2.8	0.4	40	
147	197	F	3.3	3.1	1.1	3.2	0.4	54	
148	198	E	2.9	2.8	1.0	2.85	0.5	50	
149	199	E	2.9	1.9	1.5	2.4	0.7	34	
150	200	E	2.8	2.6	1.1	2.7	0.4	38	
151	201	E	2.1	1.2	1.8	1.85	0.2	0.9	
152	202	K	5.2	2.8	1.9	4.9	0.5	123	
153	203	J	4.4	4.6	1.1	4.2	0.9	158	
154	204	J	4.5	3.4	1.3	3.95	0.9	119	
155	205	J	4.3	2.5	1.7	3.4	0.5	54	
156	206	M	4.9	3.7	1.3	4.3	1.0	138	
157	207	I	3.9	3.6	1.1	3.75	0.8	115	
158	208	E	2.9	1.6	1.8	2.25	0.5	29	
159	209	K	5.9	3.4	1.7	4.85	1.4	290	
160	210	I	3.9	3.5	1.1	3.7	0.9	137	

表6 出土石器剥片計測値一覧（3）

番号	穿孔 番号	石器 タイプ	高さ (cm)	幅 (cm)	長幅比	最大 幅平均	厚み (cm)	重量 (g)	備考
161	214 直下型	M	4.4	3.2	1.4	3.8	1.0	9.2	
162	214 直下型	L	3.2	2.0	1.6	2.6	0.5	3.5	
163	中層	B	4.1	3.6	1.1	3.85	1.3	27.4	黒位置直離
164	中層	F	3.9	1.9	3.9	2.5	0.4	1.7	*
165	中層	F	3.3	2.2	1.5	2.75	0.5	4.9	*
166	中層	F	3.6	2.2	1.6	2.9	0.5	5.1	*
167	上層	F	3.2	2.6	1.2	2.9	0.6	5.6	*
168	上層	E	2.6	2.2	1.2	2.4	0.3	1.8	*
169	上層	E	2.5	2.2	1.1	2.35	0.3	1.3	*
170	上層	E	2.0	1.9	1.1	1.95	0.5	2.5	*
171	上層	E	2.5	2.1	1.2	2.3	0.2	1.8	*
172	上層	E	2.8	1.8	1.6	2.3	0.4	2.4	*
173	上層	E	2.4	2.1	1.1	2.25	0.4	2.2	*
174	上層	E	2.8	2.5	1.1	2.65	0.6	3.2	*
175	上層	E	2.5	2.2	1.1	2.35	0.5	3.0	*
176	上層	E	2.6	1.5	1.7	2.05	0.5	1.4	*
177	上層	E	2.6	0.6	4.3	1.6	0.3	0.6	*
178	中層	K	7.3	3.0	2.4	5.15	1.1	22.4	*

そのうち接合資料は合計9組24点である（図30・図版29上下）。以下にあげるものうち、計測値一覧（表4～6）にみられないものは、分析の対象外とした長さ2cm以下の碎片である。

まず、接合資料①は119・121・095の3点接合で、3点の剥片が順に水平に重なるように接合する。②は140・083の2点接合で離れた位置から出土した2点が接合した。2点の背面はともに風化した剥離面である。③は117a・117b・118の3点が接合するが、117a以外の2点は碎片である。④は137・111の2点が接合し、ともに背面に原面をもつと思われ、原縁に直接両極技法による打撃を加え、2分された形であろう。⑤は117c・120a・073の3点が接合するが、これも117cはチップ状の碎片である。⑥は128・182の、水平に重なる2点が接合する。この2点は中層と下層にわたって上下で重なる位置から出土した。⑦の189・187は近い位置からの出土で接合した。となりあわせではないが①点おいてとなりのものが接合した。⑧は148・120bの2点が接合した。このうち148は両面に主要剥離面をもつが、これにさらに接合する破片はなかった。⑨は162・125・85の縦長剥片3点が下層からこの順に水平に重なって接合する。このうちもっとも小さい162は背面に著しく風化した剥離面をもち、この資料の作成時における原縁の表面であったようにみえる。

#### 4. 石器剥片集石遺構の類例

このようなサヌカイトの石器剥片が密度高く集積した状態で出土した例は他にもある。今回千里丘遺跡から出土した剥片は、集石以外の地点からの石器の出土ではなく、土器など他の遺物や遺

旗がある」ということにすぎない状態のものである（註9）。出土状況をみても、特に他の未製品と区別されていたわけではなく、混在して置かれていた。この完成品（139）もまた、素材剥片をとる段階では両極打法を用いて剥離されている。

石器の分類による比率から、この石器群の顕著な特徴は、両極打法を使用した痕跡のあるクサビの割合がきわめて高いことである。クサビ形本体35点、クサビ形剥片114点、クサビ形削片15点の合計164点で、92%あまりを占める。最大のもので長さ7.2cm、幅5.9cm、厚み1.9cmを測り、平均長は4.27cm、平均幅は3.1cm、平均厚は0.77cmである。また、最も大きなものの重量は218gで、178点の平均重量は14.15g、総重量は2518gを測る。長幅比の平均は1.5となる。

構も伴わないので、用途や性格、年代の特定がきわめて困難である。それを類推するために、ここに類例を集めてみた（註10）。近畿地方におけるサスカイト石器の集石遺構については、田部剛士氏の論考に詳しいが（註11）、ここでは、千里丘遺跡の当該資料がアカホヤ火山灰降灰以前である可能性が高いこととを念頭において縄文時代の、早い段階に属するもの、クサビ形石器を含むもの、二上山産サスカイト石器の集石・積遺構として報告されているものに注目してとりあげる。大阪府下を中心に限定したが、類似性の高かった桐山和田遺跡例については奈良県に位置してはいるが、ここにとりあげることとした。

#### 野畠遺跡

まず大阪府下にあり、千里丘遺跡に近接する北摂地域の、豊中市野畠遺跡の例がある（註12）。豊中市北部、千里川左岸の河岸段丘上の標高約45mに位置する複合遺跡である。包含層から多量の石器が出土しているが、2次調査では5-H区と1-L区の2ヶ所においてサスカイト集石遺構が原蹠とともにみつかった。同じ層よりの出土土器から、縄文時代中期後葉の北白川C式から後期前葉の北白川上層式1・2期に比定される。

5-H区ではサスカイト剝片3点が水平に密着した状態で出土し、うち2点は接合する。この3点はいずれも両極打法を用いたものではないが、隣接する焼土坑から削器や石核、剝片・碎片などとともに、クサビ形石器6点が出土した。1-L区では、長辺23cm、短辺19cmの範囲に18点のサスカイト素材や石核・剝片などが平面的に集積した状態で出土した。剝邊にはかなり大型のものも含まれ、そのうち3点の縦長剝片に接合関係がみられる。

また、野畠遺跡の出土品の中には、具体的な割合は示されていないが、両極打法を用いて製作された石器とその製作に関わる剝片の出土比率が高く、20点を超えるクサビ形石器、あるいは両極打法が用いられた剝片が図示されている。中には、自然面を表裏に残し、そう大きくない原蹠から直接両極打撃を施したと考えられるものも含むといい、これは、前掲の千里丘遺跡の接合資料にもみられる。

集石遺構内の石器群は、節理にそって剥離された大型剝片とそれらを素材とした石核を中心構成される。野畠遺跡においては石材獲得から石器製作まで一連の作業がおこなわれていたと想定されている。両極打法による剝片と思われるものでも長さが8~9cmを超える大型のものがみられる。千里丘遺跡おいても、大型のクサビ形本体は15点と比較的多く出土するが、最大のものでも長さ7.2cmと、野畠遺跡例には及ばない。

出土状況については、各々の剝片がさほど密着しておらず、隙間にわずかながらも土が詰み、千里丘例とは若干違った様相をみせる。

#### 弓削ノ庄遺跡

その他の大阪府下での類例は、中河内地域が多く、東大阪市弓削ノ庄遺跡、八尾市久宝寺遺跡北地区、大阪市平野区長原遺跡などがある（図31・表7）。このうち、弓削ノ庄遺跡例や久宝寺遺跡北地区例などでは遺構内の出土点数が少ないものの、長原遺跡での集石点数は千里丘遺跡例

に迫る。

弓削ノ庄遺跡は縄文時代晩期末から弥生時代にかけての複合遺跡で、主に集落や墓がみつかっている。ここでは1-60集積遺構と2-89集積遺構の2ヶ所のサヌカイト石器の集石遺構が検出された（註13）。前者は縄文時代晩期末とされる遺構面で検出され、後者はそれよりも若干高い位置の弥生時代前期頃の遺構である可能性が高いといふ。

1-60集積遺構は、直径約20cmの範囲にサヌカイトの剥片及び石核15点が重なり合って出土し、掘り込みはない。さらに、遺構周辺で取り上げた4点のサヌカイト石器剥片もこの遺構に伴うと考えられている。どれも10cmを超えることなく類似するサイズの剥片ばかりで完成品は含まれない。接合関係が確認された資料もない。最も大きな剥片で長さ6.9cm、幅8.5cm、最も小さなもので長さ4.8cm、幅4.3cmを測る。剥片の中では、縱横の長さがほとんどわらないものが5点と最も多く、縱に長い剥片と横に長い剥片がそれぞれ3点ずつ含まれる。

また、風化面、原礫面を背面あるいは側面の一部に残すものが15点中10点と多く、数は千里丘遺跡例が圧倒的に多いが特徴に共通する点はある。ただ、集石遺構内から出土した15点はすべて、両極打法が用いられたものではない点が決定的に異なる。大きさの類似性や完成品が含まれないことなどから、石器の素材剥片が集石された出土状況であると考えられている。

また、近傍から1点クサビ形石器が出土していると報告される。その石器については、この他にも集石遺構が検出された1調査区8層から側面や表面に自然面を多く残すものが3点出土している。4.5～6.0cmとさほど大きなものではないが、前掲の野田遺跡でもみられたように原礫とさほどかわらない大きさであろう。ここでも、両極打法を用いて割られた原礫はさほど大きくないものが含まれていた可能性が高い。

2-89集積遺構は縄文時代の遺構よりは上層で検出されたというため、ここでは詳しく述べないが、同様に掘り込みなどではなく、剥片3点、石核1点の計4点が重なって出土した。

表7 サヌカイト石器集石遺構の類例比較

番号	遺跡名	所在	遺構名	掘込 有無	高橋 打法	横幅 mm	横合 資料	集石 点数	実面積 mm <sup>2</sup>	底大長 (cm)	底小長 (cm)	底大幅 (cm)	底小幅 (cm)	備考
1	千里丘遺跡	西脇市 千里丘	石器集石遺構	不明	9割 以上 24点	9種 1種 無	○	180<	72	20>	4.28	複数なく齊刷して置かれる 箇文早期以前か？		
2	野田遺跡	東本市 内緑ヶ丘	2次調査5丁目区 サヌカイト集石	無	無	1種 2種 3	無					複数する底上段から両極 北白川上層1・2式		
3	野田遺跡	東本市 西緑ヶ丘	2次調査11丁区 サヌカイト集石	無	無	1種 3点	18	10種	08>	8~9	1.5	大きな剥片+砂片 北白川上層1・2式		
4	弓削ノ庄遺跡	水大阪市 越出本町	1-60 集積遺構	無	無	15+ 4 少	○	10>				周辺から両極 純文中期～		
5	久宝寺遺跡	八尾市 久宝寺	サヌカイト集石	無	無	有	11	○	21		154	尖部文		
6	長原遺跡	大阪市 平野区長原	ピット148	有	無	101	○	7<	24>	7.2<	32>	49点底面有 尖部文		
7	刺山和田遺跡	守口市 山田村	S X102	有	有	有	65	○	62	105	7.0	57%底面無、33%底面T 純文中期		
8	刺山和田遺跡	守口市 山田村	S X101	有	有	無	24		7.6	24		縄文早期		



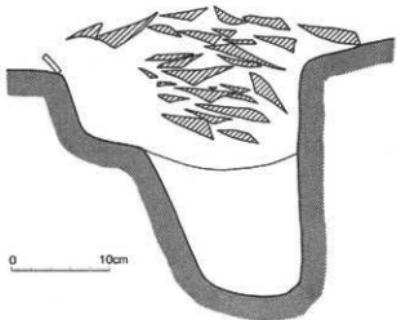
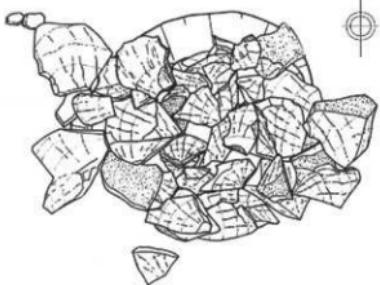
0 10cm

4. 弓削ノ庄遺跡



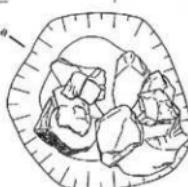
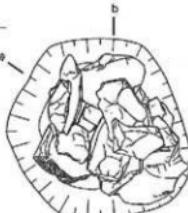
0 10cm

7. 桐山和田遺跡 SX102



0 10cm

6. 長原遺跡 ピット148



0 10cm

8. 桐山和田遺跡 SX101

図31 サヌカイト石器集石遺構の類例

## 久宝寺遺跡

久宝寺遺跡は沖積平野に位置し、旧石器・縄文時代から連続と生活が継続して確認される大規模な複合遺跡である。久宝寺遺跡北地区例では、縄文時代に比定される包含層の中で、石核5点、剥片6片の計11点が集積した状態で出土した。石核と剥片が接合する資料が2組ある。これまで例示したものよりはやや大型の剥片及び石核がも含まれ、最大のものは20cm弱を測る。おおむね10cm弱～15cm弱の範囲内におさまり、ほぼすべてが、側面あるいは背面に自然面を残す。ここで出土した石核が、もともとの厚手の大型剥片から、素材となる小剥片を打ち欠いた状態であると考えられている（註14）。

## 長原遺跡

長原遺跡例は昭和56年度の調査において、E地区のピット148から出土した集石である（註15）。直径約26cm、深さ27cmの2段に彫り込まれたピットの中に大割されたサヌカイト101点が重なり合って入っていた。ピットは上段が広く、下段は底径が狭くなる2段構造で、ピットの底まで遺物が詰まっているのではなく、2段掘りされた上段部分にのみ集中していた。サヌカイト集石の上面はピットからはみ出て広がっていた。ただ、下段は炭化物を含む土が埋土となり、そもそも2段のピットが掘られたわけではなく、炭化物を含んだものを切ってサヌカイト集石のものが掘られた可能性も示唆されている。

101点の中には、サヌカイトの剥片86点、細部調整剥片2点、石核3点が含まれていたが、両極打法を用いて剥離されたものはみられない。最大長は7cmを超え、最大幅は7.2cmを超える。剥片及び細部調整剥片の計88点における最も顕著な特色は、ほぼすべてが3cmを超える剥片であることである。最小のものでも長さ2.4cm、幅3.2cmを超え、碎片が含まれない。うち66点が完形であり、49点の打面形態が原面打面であるという。このことから、これらの剥片は、原面に覆われた原材料をまず大きく剥離した段階での生産物であると考えられている。

また、打撃角の分布の山形が2つにならずに62.7%が $105^{\circ}$ ～ $120^{\circ}$ に集中することから、これらの剥片はまとまったひとつの性格をもつ生産によるものであることも示唆する。しかしながら、剥片の長さと幅の相関関係にまとまりはない（註16）。すなわち、原標を一度にまとめて割り碎いた時の生産品で、まだ目的となる製品をイメージした素材剥片になる前段階の大まかな素材剥片がまとめてピットに放り込まれていたということになろうか。

ピットからは縄文土器の細片1点も出土した。第7A層上面の遺構で、尖端文土器を作う、縄文時代晚期とされる。

## 桐山和田遺跡

両極打法を用いたサヌカイト石器剥片の集石ということで、千里丘遺跡の例に状況が最も類似するものに、桐山和田遺跡の例がある（註17）。桐山和田遺跡は奈良県山添村に位置する。縄文時代草創期と早期で各々1ヶ所ずつサヌカイト集石遺構が検出されている。

縄文時代草創期の集石遺構は微隆起線文土器期に属し、石器原材料貯蔵として最も占い事例とい

われる。このSX102は、長径19cm、短径13.5cmの椭円形を呈する小規模な掘り込みの内部にサヌカイトの剥片が詰まった状態で検出された。深さ4cm前後の浅い掘り込みの中に65点の剥片が折り重なるようにまとまって出土した。SX102が検出された縄文時代草創期の遺物は、調査地内の2地点に集中してみられる。SX102もその隣接地で検出されたため、田部剛士氏は居住地域であった可能性も考えられるという（註18）。

これら剥片の長さは、最大で6.2cm、最小で1.05cm、平均は約3.5cmとなる。幅は最大で7.0cm、最小で1.2cm、平均は約2.4cmとなる。厚さは、最大で1.0cm、最小で0.2cm、平均は約0.6cm、重量は最大で22.23g、最小で0.37g、平均重量は7.96gとなる。千里丘遺跡例の剥片よりはやや小型である。

前掲の類例と同様に、自然面を残すものが65点中37点、約57%と高い割合でみられる。部分的な調整など、2次的な加工を施したものは14点で約57%、縁辺部に使用した痕跡が認められるもののが4点であった。千里丘例で1点製品としているものも、このレベルの調整である。

集石内の剥片の中には、接合する剥片も存在する一方で、複数の原石からなる剥片類が括されている点も特徴的である。そして剥片には、上下両辺に階段状剥離が見られるなど、両極打法を用いて剥離された特徴が多く報告される。65点の集石でありながら、自然面を有する剥片がこれほどまでも多く含まれ、複数の原礫の存在が示唆されるということは、例えば国府型ナイフ形石器などで通常想定されるような大型剥片を素材としていたのではなく、川原石のような小ぶりの原礫が想定されるのではないか。これについてはまた、千里丘遺跡例との比較の項で後に詳しく述べたい。

この桐山和田遺跡では、縄文時代早期のものと報告される同様のサヌカイト石材集石遺構SX101がある（註19）。直径17cm、深さ約10cmの不整円形の小ピットの中から剥片24点が出土した。各々の剥片が隙間なく密着して折り重なり、剥片の下側のピット底部には約8cmの厚みで黒褐色の土が埋没していた。

これら剥片の長さは、最大で7.6cm、最小で2.4cm、長さ5.0cmを超えるものが13点を小型のものより多く、5.0～7.0cm前後の大きさのものが主体である。厚さは0.2～1.2cm、重量は0.83～47.85gとその幅は広い。直接、接合関係が確認される剥片はない。ただし、同一の原礫から剥ぎとられたものが確認できる一方で、明らかに別個体の原礫が想定できるものも含まれ、SX102例と同様に複数の原礫からなるものであることが想定される。自然面が残り、原礫から剥ぎ取られたと思われる剥片もあれば、小型で2次調整が全くなされていない剥片には剥片剥離時の副次的に得られた碎片と考えられるものもある。自然面を残すものは、原礫の石核とするための調整時に剥離されたものではないかと考えられている。

このSX101例で特徴的であるのは、検出面である縄文時代早期の遺構面において、このサヌカイト石器集石とともに28基を数える礫の集石遺構（礫群）が検出されたことである。この遺構面では径50cm余り～120cm余りの円形もしくは不整円形を呈する土坑が数多く検出された。土坑

内には、石鎚や石皿、土器などの遺物が含まれるものも多くあった。これらに加えて、拳大かやや小さめ～やや大きめの川原石などが集められた集石遺構がある。平面的に集石が広がるもの、炉址のように受熱の痕跡がみられるもの、礫の密度が低いもの、など構造によって3つに分類され、2基を除くほぼすべての礫群が調査地内の幅50mほどのエリアに集中してみられるが、炉址に類似するタイプは特に集中した分布がみられる。これらの礫群からは、土器や石器などの遺物も共伴しており、サヌカイトのクサビ形石器も3点出土している。

### 千里丘遺跡との比較

類例を各々例示していく過程でも千里丘遺跡と類似する特徴についてはふれてきたが、ここでこれまでにあげた共通項をいま一度整理してみたい。

まず、ほぼすべての例において共通してみられるのは、自然面を広い範囲で有する剝片が多く含まれることである。これは、集石遺構内の剝片が多く加工工程を経た剝片ではなく、原礫にきわめて近い、大まかに剥離されただけの状態であることを示唆する。そして、この時期の集石遺構内の剝片については、せいぜい300～400gほどという大型のものではなかった原礫が用いられたと想定される。

そして、類例の中で集石遺構内からの出土剝片に両極打法が用いられていることが確認されているのは野畠遺跡5H区例と桐山和田遺跡例のみである。ただし、弓削ノ庄遺跡例では近接地から複数のクサビ形石器の出土があった。これら3遺跡及び千里丘遺跡から出土した両極打法を用いたサヌカイト剝片に共通するのは、自然面を多くもち、原礫からそう遠くない状態の剝片でありながら、あまり大きくなることにある。石核や自然面をもつ剝片から想定される原礫の大きさは5～10cm前後とそう大きくはなく、拳大～川原石大程度であろう。これはやや時代は下るが、例えば八尾南遺跡で出土した原礫などのサイズが想定できる（註20）。318gと499gのものがあり、千里丘遺跡例と類似した摩滅した自然面をもつ礫である。それから推定すると、千里丘遺跡出土の180点ほどの約2,500gの剝片の原礫は、単純計算では4～7個、接合しない剝片が多いため剥離されたものすべてでなく、石核・製品となるものが多くぬかれたことを加味しても、6～10個程度と、そう多くなかった可能性が高い。

これは、類例で取り上げた桐山和田遺跡やその他の中河内の遺跡と比較して、千里丘遺跡は石材产地である二上山からの距離も遠く、原材料がそれほど豊富であったとも思えないこととも矛盾しない。そしてこのように、荒削された状態で集石していた千里丘遺跡のサヌカイト剝片ではあるが、実際に素材剝片であり、集石遺構はいわゆるデボと呼ばれる目的的な貯蔵遺構であったのかどうかといった、その目的性については次項で若干の考察を試みたい。

### 5. 両極打法が用いられていない剝片との比較

両極打法による諸特徴をもった石器は、その性質と用途を考えるうえで、「両極打法によってつくられた道具」であるか、別の目的的剝片を得る際の「楔」として「使用の結果できたもの」

かの2つのパターンが考えられる（註21）。当該資料については、そのすべての法量をグラフに示してみた。それが図32であるが、クサビ形剝片には3cm以下のものも多く含まれるが、それでもまだ剥離が可能な大きさの剝片及び削片・本体が大半を占める。また、少量の通常剝片が含まれながらも、圧倒的多数が両極打法を用いられた剝片であるということから、これらのクサビ形石器が使用の結果できたものであるとは考えにくい。通常の剝片の剥離のために使用された結果のクサビ形石器であるならば、もっと多くの通常の剝片が混入していてもよいはずである。さらに、クサビ形石器自体もまだ繰り返し使用が可能であるこれらの大さきのものが多量に放置されるのは理にかなわないといえよう。それゆえに、筆者はここでは、これらのクサビ形石器は両極打法を目的的に用いて生産されたと考えたいのである。

両極打法を意識的に、また排他的に用いて生産されたものであると仮定しても、これらの多量のサスカイトの集石を、素材となる石材を貯蔵したデボであるとみなすか、素材剝片を選別した後に廃棄されたものであるとみるかは、調査区での関連資料にめぐまれなかつたために、条件づけることは困難である。

そこで、両極打法に注目してみると。その技法を用いることによって、打点が1点のみの通

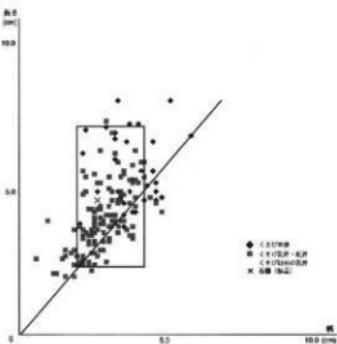


図32 千里丘遺跡 出土石器長幅比

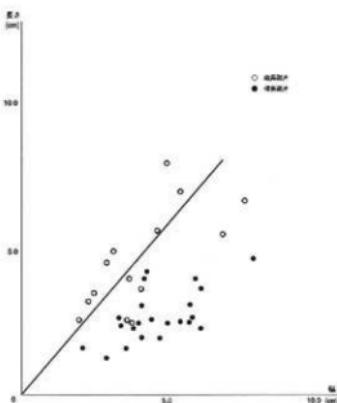


図33 はさみ山遺跡85-7区  
出土石器長幅比

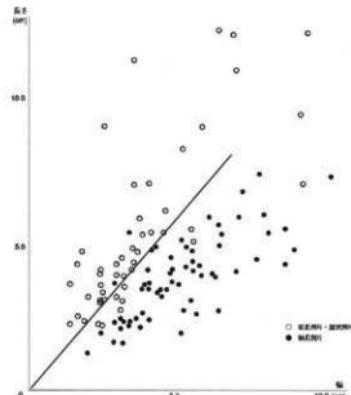


図34 国府遺跡第3地点  
出土石器長幅比

常の技法で削られた剥片とどのように差が生じるのか、この千里丘遺跡出土資料の目的性について、さらに裏付けとなる特徴はないかをさぐるために、通常剥片の事例と比較してみたい。ここでは比較対象として、大阪府下の代表的な石器出土遺跡である、はさみ山遺跡と国府遺跡第3地点の例をとった。

最も単純ではあるが、わかりやすい比較項目として、その法量及び長幅比を比較してみる。図32の千里丘遺跡例では、長幅比平均は約1.5となり、グラフにおける分布からもみえるように大半が縦長の剥片である。次に、図33・34は各々、はさみ山遺跡85-7区と国府遺跡第3地点から出土した剥片の法量をグラフにしたものである(註22)。縦長剥片と横長剥片がともに出土するが、横長剥片の方が出土量が多い。とくに、国府遺跡例では横長剥片の出土量が縦長剥片を圧倒的に凌駕する。一方の千里丘遺跡例では、横長剥片は数点を除いてほぼみられない。そして図35では、この3つのグラフを重ねてみた。先ほど述べた傾向がより顕著にみてとれる。

国府型ナイフ形石器の素材となる翼状剥片の作成過程をみても、サスカイトはごく通常の直接打撃によって剥離されれば横長の剥片が剥離される傾向にある可能性が高い。それは、ここでとりあげるはさみ山遺跡85-7区及び国府遺跡第3地点の出土例からも言える。しかしながら、その自然特性とは明らかに一致しない傾向で、千里丘遺跡出土剥片の法量は偏りをみせる。上峰篤史氏は、接合資料の検討から縄文～弥生時代の剥片剥離技術の復原を試み、近畿地方において旧石器時代に盛行した瀬戸内技法をはじめとする剥離技術とは明らかに一線を画することを示している(註23)。千里丘遺跡出土資料に両極打法が用いられている割合や、法量のばらつきが少ないことなどから推察しても、当該資料は故意に一定の法量の縦長剥片を獲得するためにその手法が用いられたようにみえる。出土資料は、目的的に剥離され、後に素材として利用するために集められた一時的な貯蔵構造であると言えないだろうか。

## 6.まとめ

これまで、千里丘遺跡出土の両極打法によって剥離されたサスカイト石器剥片の集石構造について、類例及び近畿地方で一般的なサスカイト剥離技術による良好な出土資料と比較することによって、千里丘遺跡において欠落する多くの情報を推察・復原することを試みてみた。ここでまとめに替えてそ

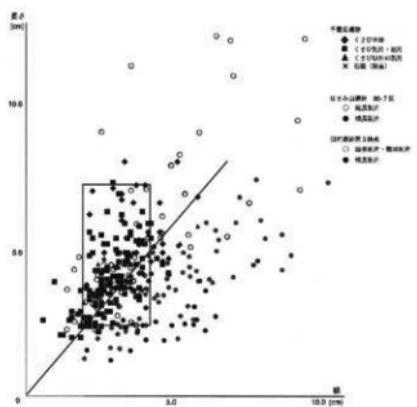


図35 千里丘遺跡・はさみ山遺跡85-7区  
・国府遺跡第3地点 出土石器長幅比の比較

の状況を整理することで、本稿を締めくくりたい。

まず、風化の著しい千里丘遺跡出土資料は、自然面は水摩し、剥離面ですら自然面と色などの見分けがつかないほど風化がすすみ、暗灰色～黒に近いサスカイトの新鮮な状態に近い色合いを呈することが多い弥生時代以降の資料よりは古いものである可能性が示唆される。180点程の出土剥片の獲得には、両極打法が極端に多用され、この剥離技法が故意に排他的に使用されたと言える。そして、その法量分布状況やクサビ形石核なども含まれることから、他の剥片を剥離する際に模として繰り返し使用された後に廃棄されたコンテキストとしてではなく、目的的にクサビ形石器剥片を獲得するために両極打法を用いたと推察される。これは、通常の剥離技法を用いて生産された剥片との法量及び長幅比の比較によっても、綫長剥片の含有比率が顕著であることからも想定できる。

そして、類例をみわたすと、このような遺構は縄文時代に多くみられることがわかった。その中でも、両極打法剥片を多く含み、出土状況の類似する例は桐山和田遺跡のように縄文時代草創期～早期の例にみられる。このことは、先述のように千里丘遺跡出土資料の風化が著しいことや、出土層が鬼界アカホヤ火山灰の降灰以前に堆積した可能性があることとも矛盾しない。また、すべてが二上山産のサスカイトで構成されることからも、金山産サスカイトが近畿地方に一般に流通する以前のものである可能性が高いといえる。

また、類例にみられるこの時期の両極打法剥片は、自然面を有するが多く、原礫からの剥離がそう繰り返しおこなわれたものでないことがわかる。千里丘遺跡出土資料のうちで最大長をもつ約8cmの資料は、ほぼ原礫の大きさを推定させるものではないかと考える。前掲の八尾南遺跡出土の原礫にみられるような拳大程度のものが想定される。類例に共通する傾向から、両極打法はさほど大きくない原材から効率的に素材剥片を獲得するために使用された技法である可能性もある。これについては、より多くの両極打法剥片について、自然面を残す資料の含有率、そこから復元できる原礫と獲得された剥離物の法量などの分析の蓄積がさらに必要であろう。今後の検討課題としたい。

そして、千里丘遺跡出土資料が廃棄物であるか、いわゆるデボ（貯蔵遺構）であるかという議論については先述のように極めて目的的であることからも、後者であると考えたい。一括資料は、長さが4cm台中心であり、それらは長幅比が1.4と綫長で、主要剥離面における平坦面のそりが少ないものが多く、その齊一性から選別を経た可能性が高い。一般的に、特に旧石器時代の石器製作においては、素材剥片の獲得から製品の完成までが一連の作業でおこなわれるといわれる。定型化された石器の素材剥片も、一連の行程の中での定型素材であることが想定されている。しかしながら、例えば石核素材に調整した後に連続して剥片を剥ぎとる、定型の翼状剥片獲得手法では、ある程度大きな原材が必要となる。それに対して当該資料の原材は、前述のようなさほど大きくない礫であることが想定される。従来いわれるような定型化した一連の石器製作に即した素材ではなく、そこから多様な石器へと加工が可能な状態にある、万能な素材としての盤状

剥片素材であると考えたい。その意味で、通常の剥離技法ではなく、小型の原材からでも素材を獲得できる両極打法を目的的に用いて、剥離させた剥片素材のデボであろう。

また、チップの出土は非常に少なく、この場で石器製作をおこなっていたわけではないようであり、製作過程で生じた廃棄物をまとめたものではないといえる。素材の産地である二上山にそれほど近いとも言えない遺跡の立地環境からも、これほど多量のサヌカイトが簡単に廃棄されるとは考えにくい。素材として使うためになら、一旦どこかで粗く剥離したものをまとめて当該遺構検出地まで運び、後に使用するために集石しておいた可能性は考えられる。しかし、廃棄するのならわざわざ運ばなくとも制作の場で廃棄するのではなかろうか。それゆえに、千里丘遺跡のサヌカイト石器集石は保管のための集石遺跡遺構であったと推定したい。  
(小川)

石器の観察・同定・所見などについては、山中一郎（京都大学総合研究博物館・当時）・一瀬和夫（京都橘大学）・矢野健一（立命館大学）・繩川一徳（財団法人 大阪市文化財協会）・神野恵・森川実（独立行政法人 奈良文化財研究所）・上峯篤史（同志社大学文学部文学研究科）・塚原秀行（立命館大学文学部文学研究科・当時）の諸氏にご教示を賜った。特に繩川氏には詳細にわたる所見とともに石器の分類についてもご教示をいただき、ここでの分類基準は繩川氏のご指摘に基づいて筆者が再考し、データ集成のために計測したものである。上峯氏からは類例についての詳細なデータをご提供いただいた。現場から採取した土壤サンプル及びそれに含まれる火山灰の観察については小倉徹也氏（財団法人 大阪市文化財協会）にご教示をいただいた。ここに記して厚くお礼を申し上げますとともに、その他いっさいの誤認や観察不足による間違いについては筆者の責任の負うところにあります。

(註1) 大阪府教育委員会2006「千里丘遺跡群発掘調査概要」

大阪府教育委員会2008「千里丘遺跡 都市計画道路千里丘三島線道路改良事業に伴う調査 大阪府埋蔵文化財調査報告2007-3

(註2) 土器片は残存状況が非常に悪く、どのような形のものであるのか同定できる状態はない。ただ胎土や厚みから、繩文土器であるとすれば早期以前のものである可能性もあるとの教示を受けた。一部煤が付着していたため、AMSによる年代測定の可能性を考えてはみたが、絶対量が少なすぎたため分析は叶わなかった。

(註3) この観察手法及び観察結果の詳細については、大阪府教育委員会2008 前掲註1を参照されたい。

(註4) 火山ガラスをHタイプ（扁平型）、Cタイプ（中間型）、Tタイプ（多孔質型）の3種類に分類する吉川（1976）の分類による。

吉川周作1976「大阪層群の火山灰層について」[地学雑誌] 第82巻第8号 pp.497-515

(註5) 筆者にそれを同定する観察力はないが、遺物を尖見の上ご教示いただいた方々全員の一一致した意見であった。

(註6) 岡村道雄1983「ビエス・エスキュー、楔形石器」『縄文文化の研究』7 道具と技術 加藤晋平ほか編 pp.106-116

上峯篤史2006「両極打法による剥片剥離実験 -異種剥離方法の同定を基礎とした資料体作成にむけて-」[III石器考古学] 68 pp.7-28

(註7) 岡村道雄1983 前掲註6。

- (註8) 卷末の写真図版28にある接合資料写真を参照されたい。
- (註9) 分類定義と観察にあたっては、鶴川一徳氏にご教示をいただいた。
- (註10) 類例を探すにあたっては、鶴川一徳氏及び上峯篤史氏からさまざまな資料のご提示をいただいた。特に上峯氏からは、独自に収集された「上山産サスカイト集石・積造構のデーター」をご提供いただいた。
- (註11) 田部剛士2002『縄文時代におけるサスカイト集積について－石器原材の集積事例から－』『往還する考古学』近江貝塚研究会論集1－例会100回記念－ pp.21-30
- (註12) 豊中市史編さん委員会2005『新修 豊中市史』第4巻 考古 株式会社ぎょうせい
- (註13) 財團法人 大阪府文化財センター2005『丹削ノ庄遺跡他』大阪外環状線（東大阪市）連続立体交差事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
- (註14) 大阪府教育委員会・財團法人 大阪文化財センター1992『河内平野遺跡群の動態』V 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 南遺跡群 旧石器・縄文・弥生時代前期編
- (註15) 財團法人 大阪市文化財協会1983『大阪市平野区 長原遺跡発掘調査報告』Ⅲ
- (註16) 財團法人 大阪市文化財協会1983 前掲註15。
- (註17) 奈良県立橿原考古学研究所2002『樹山和田遺跡』大和高原における縄文時代草創期と早期の遺跡発掘調査報告書 奈良県文化財調査報告書 第91集
- (註18) 田部剛士2002 前掲註11。
- (註19) 奈良県立橿原考古学研究所2002 前掲註17。
- (註20) 大阪府教育委員会1993『八尾南遺跡』Ⅱ 旧石器出土第六地点の調査 大阪府文化財調査報告書 第44輯
- (註21) 岡村道雄1983 前掲註6。
- (註22) 国33・34のグラフは、大阪府教育委員会1990『南河内における遺跡の調査』I 旧石器時代基礎資料編 I 大阪府文化財調査報告書第38輯 本文編 第5章の…瀬和夫氏によるものを転載・加筆した。
- (註23) 上峯篤史2009『近畿地方における縄文・弥生時代の剥片剥離技術』『日本考古学』第28号 pp.1-22

#### 参考文献一覧

- 上峯篤史2006『両側打法による剥片剥離実験－異種剥離方法の同定を基礎とした資料体作成にむけ－』『川石器考古学』68 pp.7-28
- 上峯篤史2009『近畿地方における縄文・弥生時代の剥片剥離技術』『日本考古学』第28号 pp.1-22
- 岡村道雄1983『ピエス・エスキュー、楔形石器』『縄文文化の研究』7 道具と技術 加藤晋平ほか編 pp.106-116
- 加藤晋平・鶴丸俊明1980『圓錐石器の基礎知識』I 先土器（上）柏書房
- 竹広文明2003『サスカイトと先史社会』溪水社
- 田部剛士2002『縄文時代におけるサスカイト集積について－石器原材の集積事例から－』『往還する考古学』近江貝塚研究会論集1－例会100回記念－ pp.21-30
- 森川実2003『瓜破台地周辺における石器群の様相～原材の搬入と技術変異のあり方について～』『栗生間谷遺跡』旧石器・縄文時代編 （財）大阪府文化財センター pp.279-298

# 図 版



調査地周辺（南西から）



調査地周辺（南東から）



調査地周辺（北東から）



第Ⅰ調査区 東側溝断面1（西から）



第Ⅰ調査区 東側溝断面2（西から）



第Ⅰ調査区 北側溝断面1（南東から）



第I調査区 北側溝断面2（南東から）



第I調査区 北側溝断面3（南東から）



第I調査区 北側溝断面4（南東から）



第Ⅱ調査区 側溝A断面（南西から）



第Ⅱ調査区 側溝B断面1（南西から）



第Ⅱ調査区 側溝B断面2（南西から）



第Ⅱ調査区 側溝C断面1（南から）



第Ⅱ調査区 側溝C断面2（南から）



第Ⅱ調査区 側溝D断面（南西から）



第Ⅱ調査区 側溝E断面（南西から）



第Ⅰ調査区 第2遺構面 全景（東から）



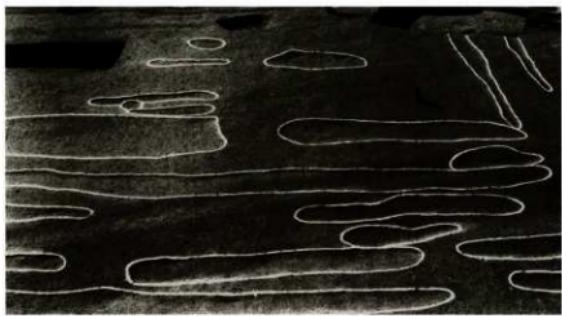
第Ⅰ調査区 第2遺構面 全景（東から）



第Ⅰ調査区 第2遺構面 西半 ピット検出状況（西から）



第II調査区周辺（北から）



第II調査区 第2造構面 細溝群（北から）



第II調査区 第2造構面 細溝群（北から）



第I調査区 第3遺構面 全景（東から）



第I調査区 第3遺構面 西半（東から）



第I調査区 第3遺構面 全景（西から）



第II調査区 第3遺構面（北東から）



第I調査区 第4遺構面 鋤溝（東から）



第I調査区 第4遺構面（西から）



第Ⅰ調査区 第5造構面 遠景（西から）



第Ⅰ調査区 第5造構面 鋼溝（西から）



第Ⅱ調査区 第5造構面（北東から）



第III調査区 調査地周辺（西から）



第III調査区 第3遺構面（西から）



第IV調査区 第5遺構面（東から）



第IV調査区 北壁断面（南西から）



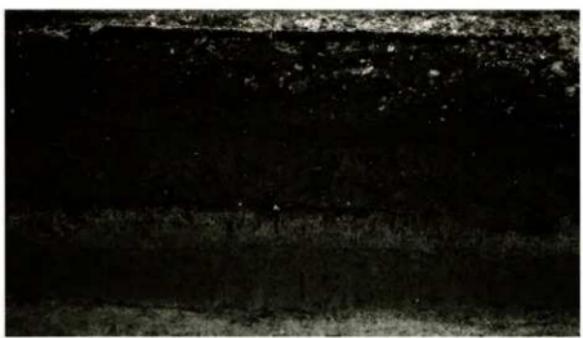
第IV調査区 北壁断面（南西から）



平成19年度 A査区 南壁断面と5層上面遺構（東から）



平成19年度 A調査区 西壁断面（東から）



平成19年度 A調査区 西壁断面（東から接写）



平成19年度 A調査区 西壁断面（北から）



平成19年度 A調査区 5層上面（東から）



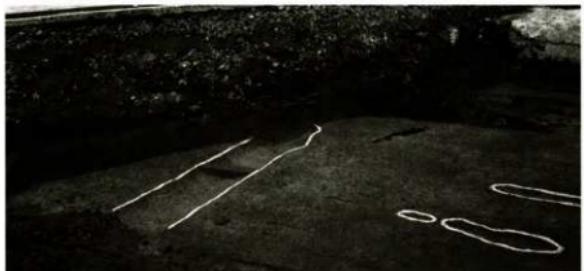
平成19年度 A調査区 5層上面（西から）



平成19年度 A調査区西 第5構面（東から）



平成19年度 A調査区 第5遺構面（西から）



平成19年度 A調査区 第5遺構面（南西から）



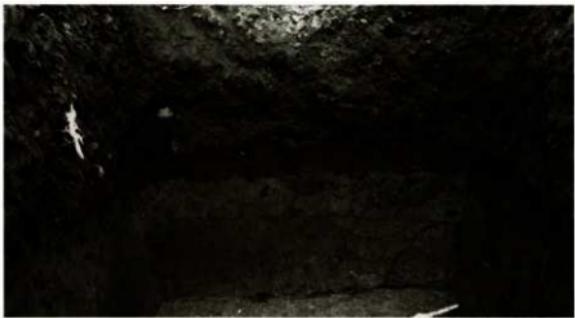
平成19年度 A調査区 第5遺構面 溝（西から接写）



平成19年度 A調査区 第5遺構面 西断面（北から）



平成19年度 B調査区 南・東壁断面（西から）



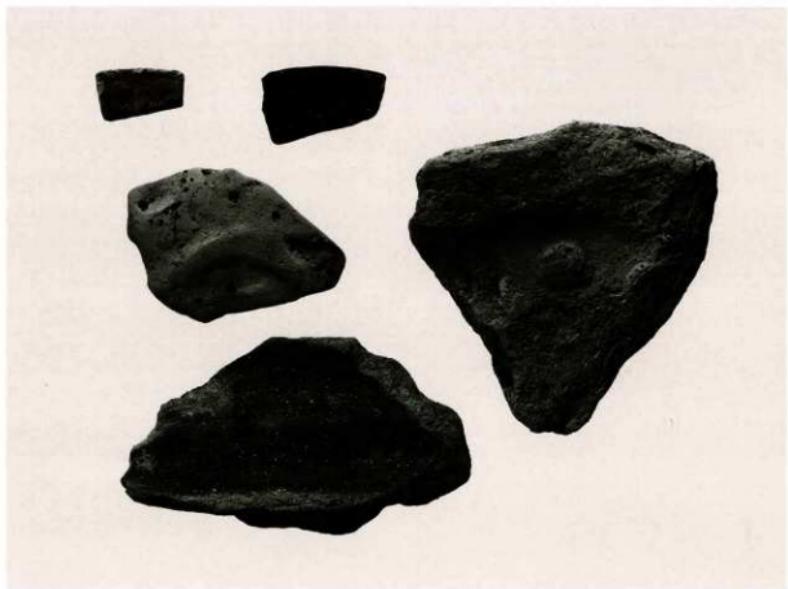
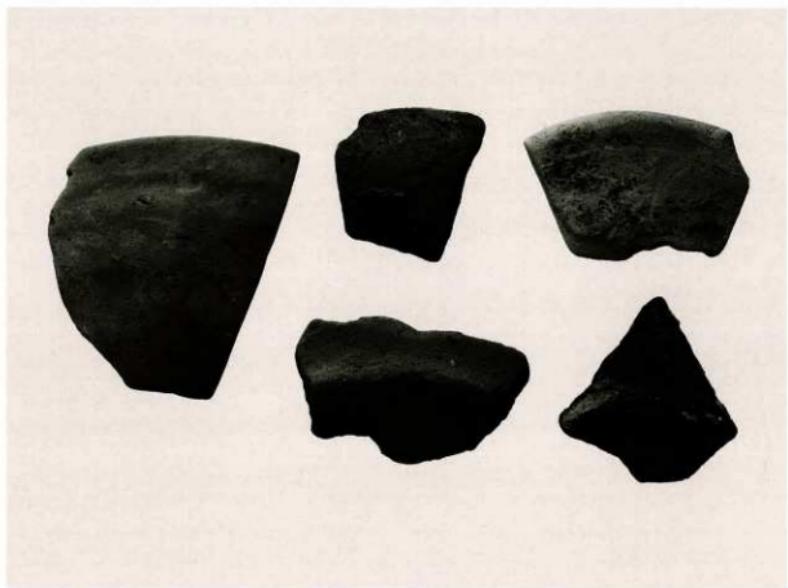
平成19年度 B調査区 東壁断面（西から）

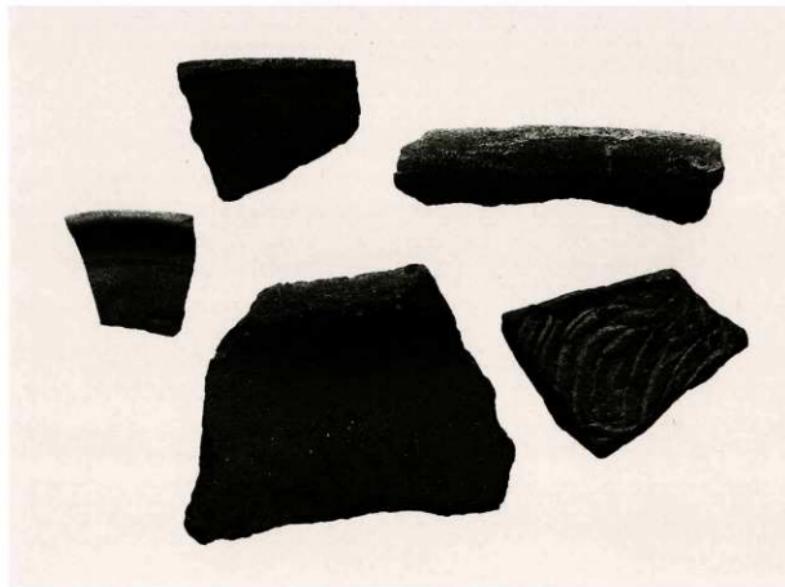


平成19年度 B調査区 5層上面（西から）

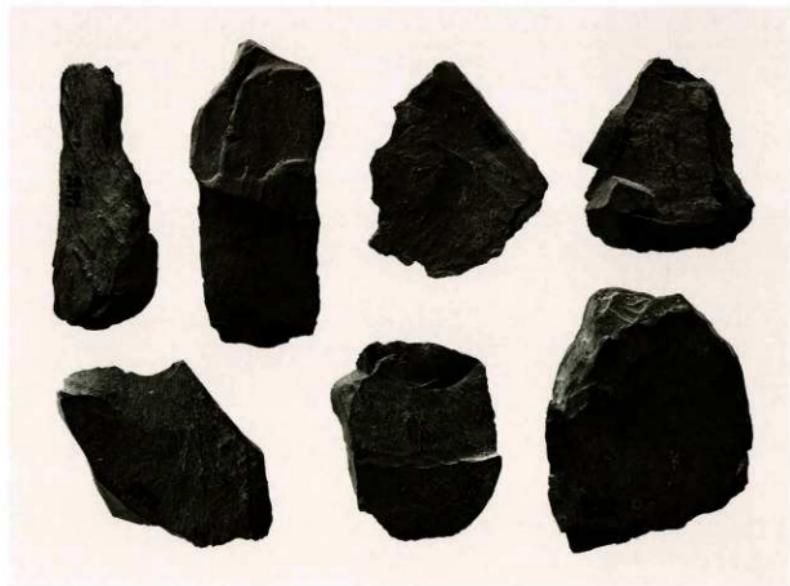
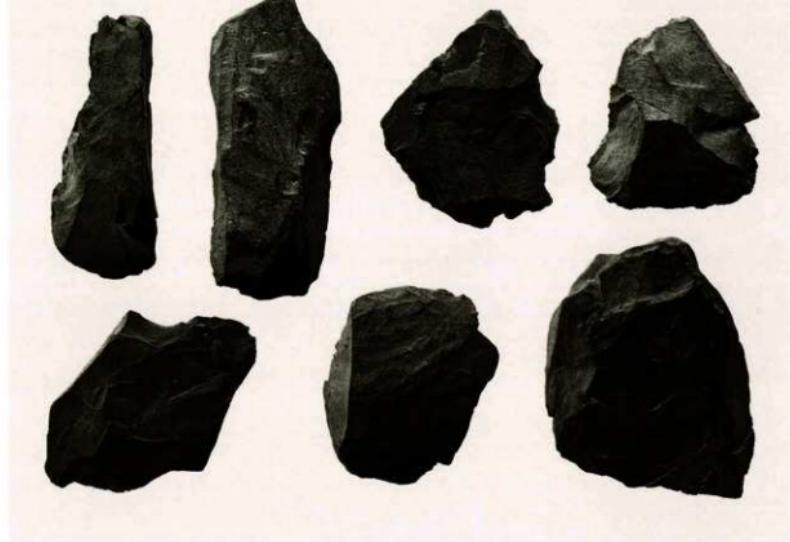


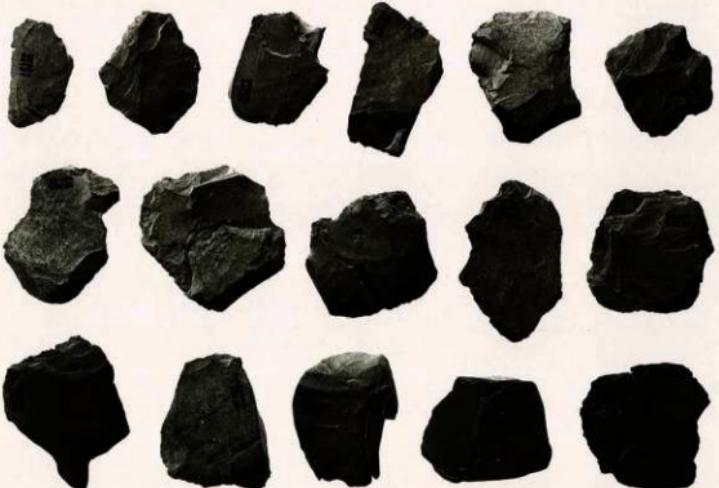
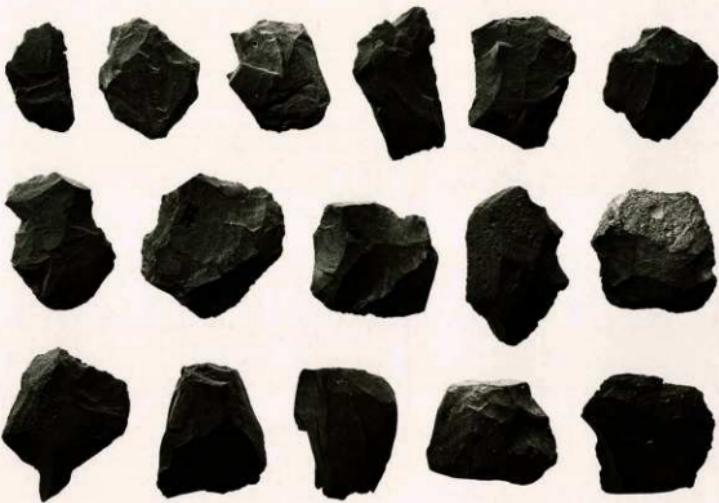
平成19年度 B調査区 第5造構面（西から）

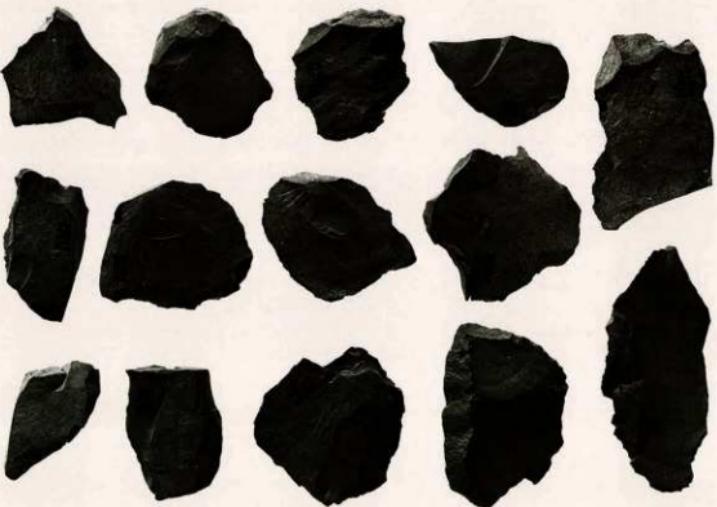
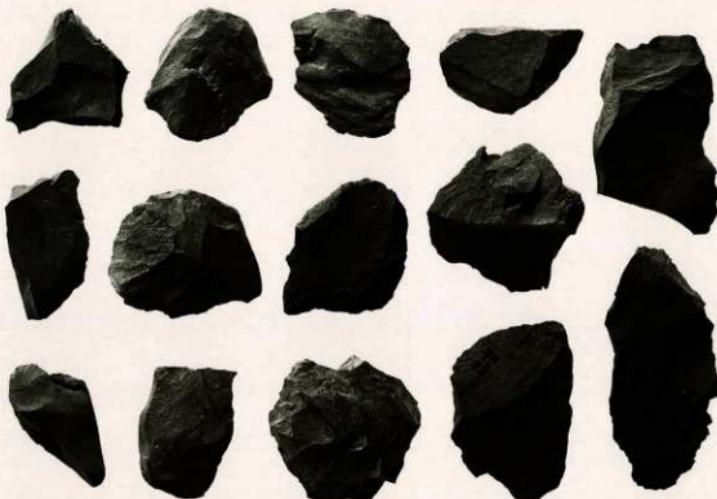


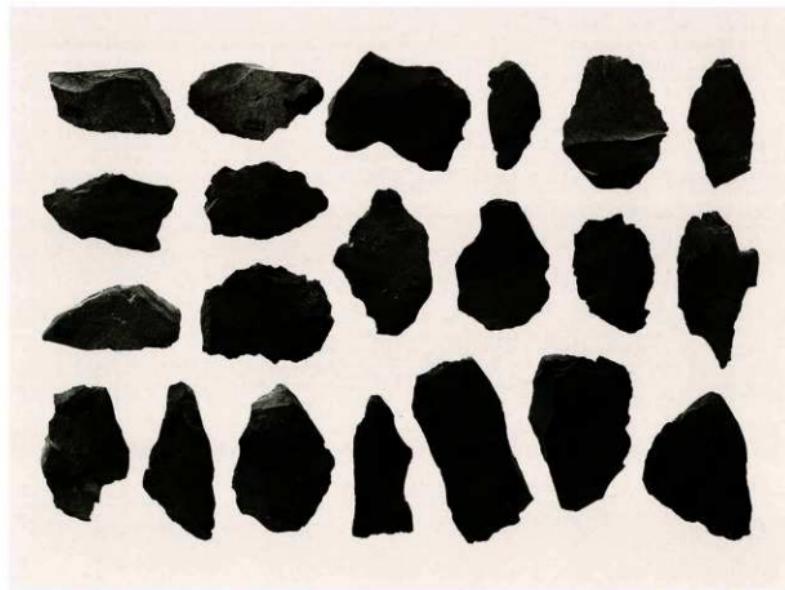
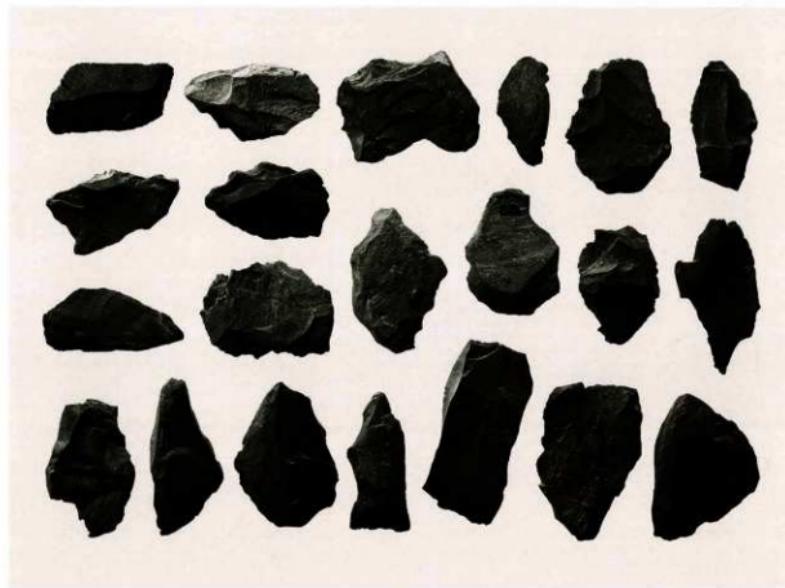


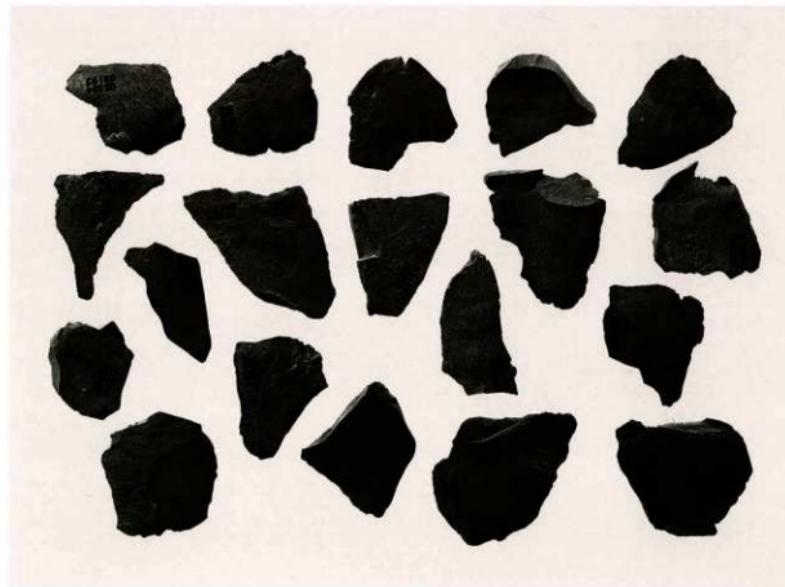
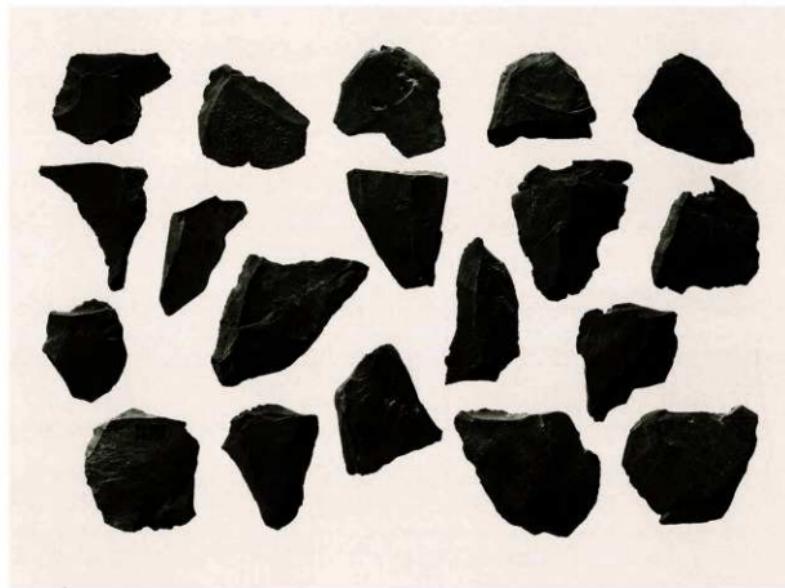


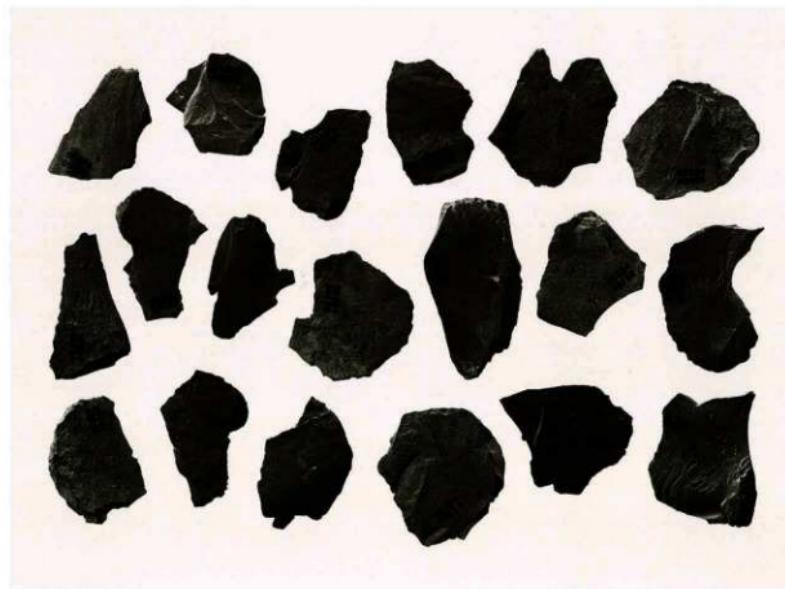
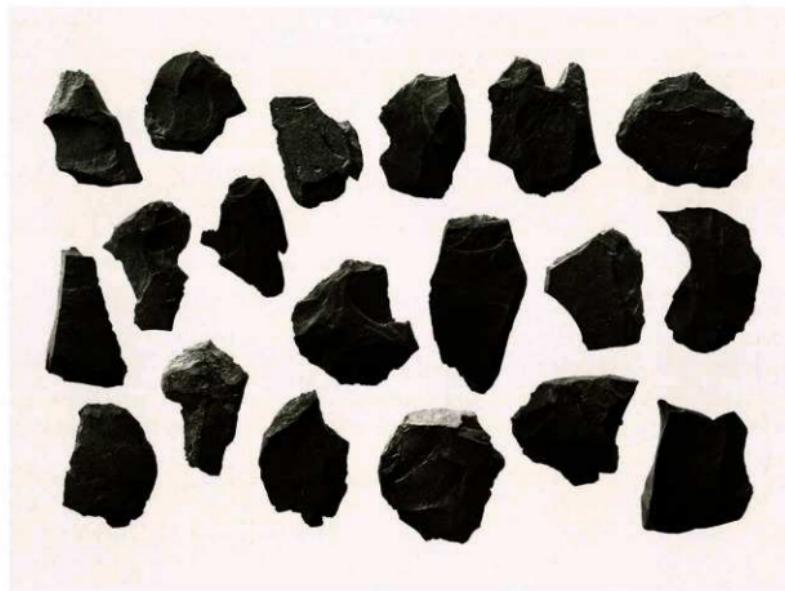


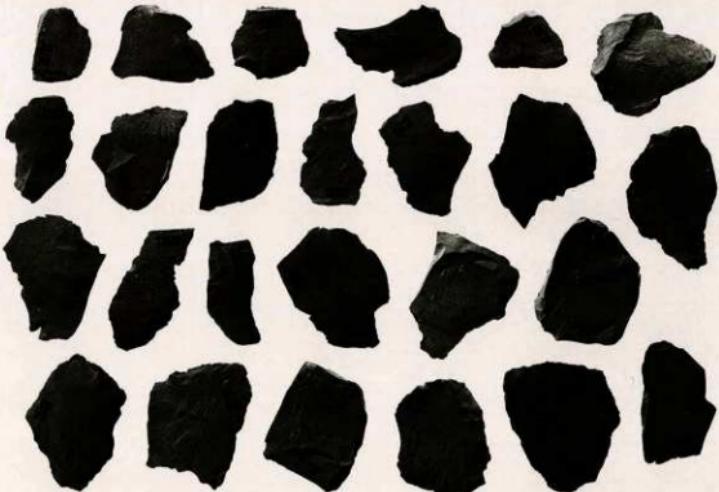


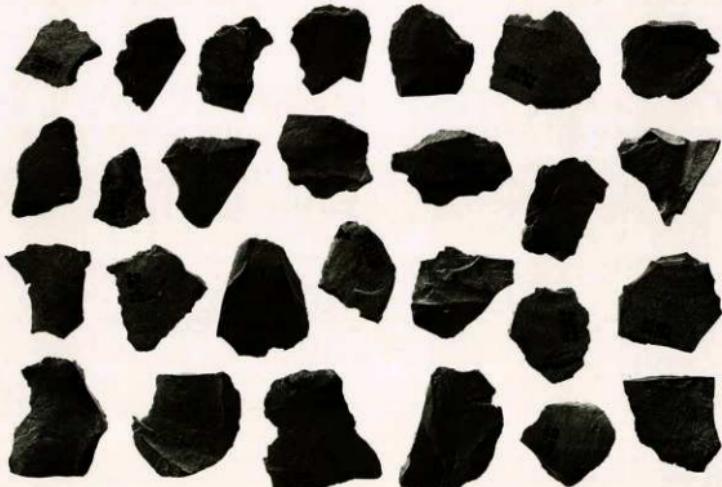
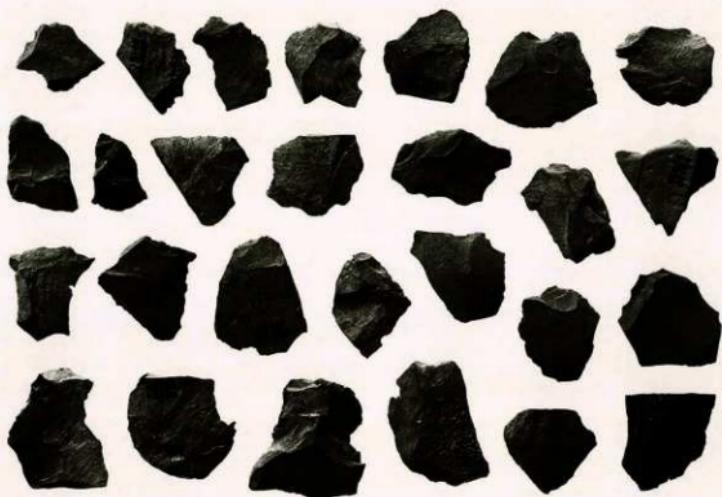


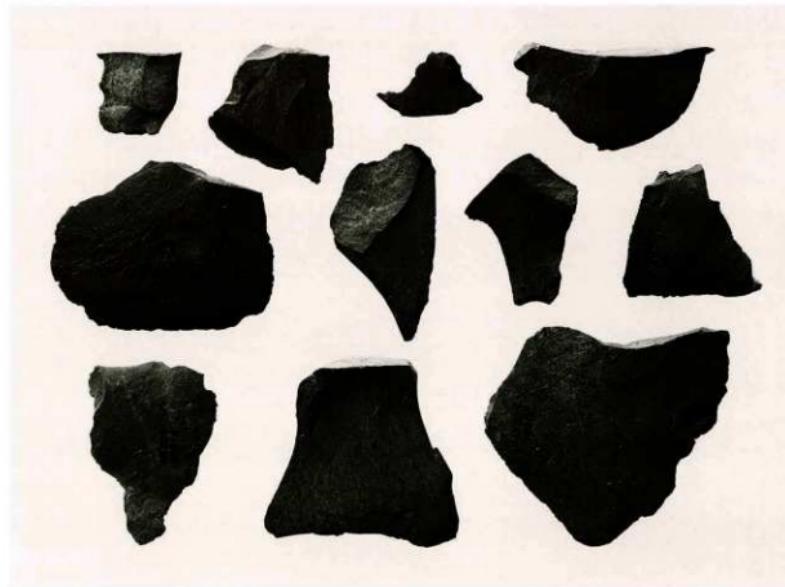
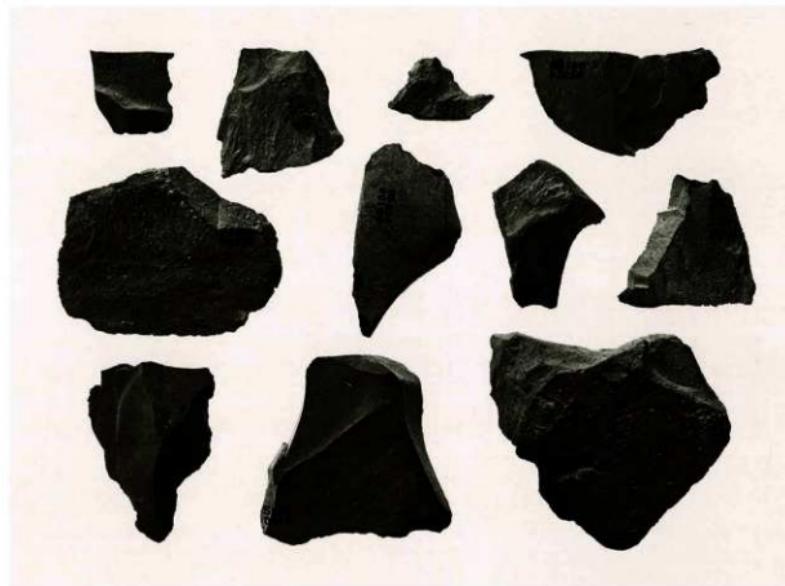






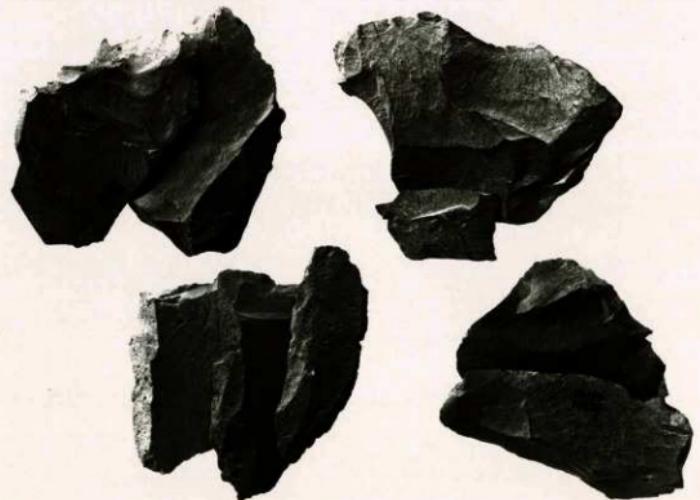








接合資料①～⑤（左上から時計回り）



接合資料⑥～⑨（左上から時計回り）

## 写真図版 遺物番号一覧

	2	3
1	4	5

図版16上 土師器

11	12
	13
15	14

図版17上 土師質土器

21	22	23
	25	
24	26	27

図版18上 陶磁器(1)

6	7
8	10
9	

図版16下 瓦器・瓦

17	19
16	
18	20

図版17下 須恵器

28	30
29	
32	33

図版18下 陶磁器(2)

\*図版19~27はすべて上段が背面、下段が腹面。

114	199	088	082
169	163	081	

図版19 クサビ形本体 5 cm以上  
(C・D)

127	205	188	203	175	183
149	096	126	129	194	
155	093	092	210	170	

図版20 クサビ形本体 3~5 cm  
(A・B)

146	214	212	090	214
089	212	212	161	
132	076	124	109	210

図版21 クサビ形削片(I・J・K)

139	084	113	133	122	106
166	106				
		157	208	185	165
195	075				

図版22 石器(139)・  
クサビ形削片 5 cm以上(H)

193	202	136	099	212
179	171	110	134	212
	167		101	135
212	097			

図版23 クサビ形削片 3~4 cm(F)

206	212	104	212	091	086
130	177	168	173	212	152
142	207	178	213	168	150

図版24 クサビ形削片 3~4 cm(F)

105	112	088	156	095	147
164	112	176	095	077	114
					133
087	144	204	080	094	204

図版25 クサビ形削片 3~4 cm(F)

141	151	188	210	191	108	160
219	100	210	210	098	210	154
210	174	188	154	210	078	138
210	196	210	210	172	210	

図版26 クサビ形削片 3 cm未満(E)

210	159	210	180
200	197	145	102
214	116	201	

図版27 兩極技法でない削片

(L・M・N)

## 報告書抄録

ふりがな	せんりおかいせき に							
書名	千里丘遺跡 II							
副書名	都市計画道路千里丘三島線道路改良事業に伴う調査							
巻次								
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	2009-13							
編著者名	小川裕見子・福庭万里子・坂本聰美・山崎美輪							
編集機関	大阪府教育委員会 文化財保護課							
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL 06-6941-0351 (代表)							
発行年月日	2010年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
せんりおかいせき 千里丘遺跡	せっつしせんりおか 摂津市千里丘 1丁目	27224	20	34° 47° 16°	135° 33° 10°	2007年11月1日～ 11月22日 2008年9月1日～ 2009年2月9日	150m <sup>2</sup> 420m <sup>2</sup>	道路改良 事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な構造	主な遺物	特記事項
せんりおかいせき 千里丘遺跡	生産遺跡 住居 集落	古代	流路、礫溝、ピット	土師器・須恵器、 黒色土器	中世を中心に、耕作 の痕跡と柱穴を検出 した。
		中世	流路、七坑、溝、鉢溝群 ピット	土師器、瓦器、陶磁器、 瓦	
		近世	溜池／流路、土坑、溝、 ピット	陶磁器ほか	
要約	平成17・18年度に継ぎ、平成19・20年度もJR千里丘駅西口と都市計画道路千里丘三島線を結ぶ 道路において発掘調査をおこない、中世を中心とする耕作と住居の痕跡を発見した。周辺の既 往の調査と同一性質の遺跡であると判断して、平成18年度に千里丘遺跡として登録したが、今 回の調査成果をうけ、再度その範囲拡大を決定した。				

<b>大阪府埋蔵文化財調査報告2009-13</b> <b>千里丘遺跡 II</b> 都市計画道路千里丘三島線道路改良事業に伴う調査 発行 大阪府教育委員会 〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL 06(6941) 0351 (代表) 発行日 平成22年3月31日 印刷 石川特殊特急製本株式会社 〒540-0014 大阪府大阪市中央区竜造寺町7番38号
---

Osaka Prefecture Buried Cultural Property Report Series 2009-13

# Senrioka Site II

Osaka Prefectural Board of Education